

○六日 くもり 庭の梅の樹のうろより大成蛇繩のことくに成下り居たりよくみれば大トカゲをべ附ついている也めつらしきこと故にみなくみる表と奥の間にある木故に貞助なども來りみて蛇を竹きれにて打ければトカゲを放してウロの内は蛇は入たりトカゲは過半尾をくひ切られしまゝ石の下は隠れたり其とき家來の子供らかみな來り居て其始末を一々におさとへ注進する也或は障子につらまりなから或は椽の上より大聲をあけるなとみな幼兒のことさもあるへし榮壹人は其度々おさとの前はひさまつきて手を附て只今はかやうと其始末を審にしらする也めつらしき兒也

○七日 雨 別當の方の兒出生六十日はかり立し也よき男兒もおさと呼てねかし置しによくすやくと寐る也われおさといふはこの子結構になるか御仕置になるか別當のこときものになるかしられすみとり子の行末は水のなかれのことし果をおもへはあふなきもの也易の童蒙のことを

山水のすかたをもつてときしもかゝる故なるへしわれらか今壹人に而結構に成藝術出精すること顔して居るも大笑也みな行道院様と母上の御しこみによるもの也この兒をみても 行道院様の嚴敷被成たりしはありかたきと申しき易に山下に出る泉を以説れしを以も幼年ものは谷川の水の石にあたり岩にくたけ千たひさはらひ行て平坦の地へ行かことく子をも千たひもゝたひ嚴にくたき折曲ねは人にならぬことなるへし別當の兒名は八右衛門と云と也

○八日 くもり 別當を小兒をおさとの居ふとんねかしたり別當殊々外悦ひて用人方は禮に來る内のがきめくはほうもの也奥さまの御しとねへ上りてねたりと也奥さまの御しとねは殿さま之外はのほるものあるまし殿さまの御名代する輿力衆に而なるましとて屋敷中ほこり歩行たると也朝く馬にのるとき別當に汝か子に廐中間になりはくちをうち大酒をのむことを教ゆるや汝かことく親に不事ことを教ゆるやいかにといへ

はことの困る也外脱カしかし子の出来てよりよほと別當おとなしくなれり○夕
かた四月廿六日附之宅状来る先以母上様御機嫌克其外御一同之御無事恐
悦之至御座候○母上様之御状土屋も度々参り候由深切之事同人悴弓之
上覽殊之外大出来常之拜領物之外せり之方に別段御扇子拜領いたし候
由今便吹聴申越候さそよろこひと相察候義に御座候これにて少々鬱を散
し可申と奉存候子のよろしきは親への孝行に御座候羽倉参り候由同人は
は墨壹分貳朱はかり遣し候是は同人五條の手代はこと傳いたし墨之事申
來候間遣し候義に御座候外ならぬ人故にかくいたし申候新右衛門幸三郎
などとは私は違ひ候故に御座候けしからす今便禮申越候○高橋へ御とま
りに御出之由太助殿も無御滞御着と奉存候一度文通仕候着之御歡に金
子三百疋あけ申候幸三郎よく孝行いたし候由何よりの事に御座候同人才
子には無之候得共才子に大にまさり候事御座候この頃人の和韻の詩に
莫欲モツク舉兒有才氣誰知才氣不如癡君看多少危亡事才氣爲憂豈可疑ヤ

これは子供をまうけて利口ものにしたしとおもふへからす人しらぬ事な
から才氣あるよりは馬鹿のかたまさりたるへしみなさま御覽候へ世の中
に多くのことあふなく亡るやう成はみな才氣のなすわさ也疑ふことはあ
るましとの意に御座候幸三郎は私などに見合候は遙に大丈夫にありき
人と兼々感心いたし居候義に御座候よつて前の詩を其證據に記し候義に
御座候○おまき宿下り之事おさとも申候得共乍去例の氣質其上實母に似
たる一概なるところ御座候間よく御勘辨可被下候何分御殿にて一足も動
かれぬかた第一に御座候いつ方の女中に候歟一寸宿下りいたし其まゝ出
奔いたし候もの有之候と歟と申候様成はなし以前承候得共忘れ申候○太郎
等之ゆかたきれ拜見仕候外よりゆかた私へくれ候もの有之候みな革染と
申候由是は藍染殊之外高直故にかゝることをはしめ候世の商人のこゝろ
驚入申候日記に御座候食物ののとへつまり候事其後曾あなし御案事被下
間敷候毎度なから日記は御そはにて入御覽候心得に其日のこと有のま

ゝにしるし候故却御案事をかけ候事と恐入候只一度限りに其後かげも無御座候○今相廻し候節日記其外は其少々前に出し候間差上不申候義に御座候入記と相違いたし候は書損に可有御座候日記の日附よく御改候而此次のたよりに御沙汰可被下候○順右衛門方小兒殊之外なる俗例也去年二月生レに而此ほと少々口をき候得共多分のことみな辨別いたし私のみねより宅に而兩親の申せしこと或は叱り候ことなとみなく驚候はかりに手まね其外にてミブ狂言のことくにいたし申候○大監物之家來罷出領分寺社の問合之序先代之不快之様子御はなし申候躰頻に落涙いたし候位之義御こゝろからとは乍申可惜之至大に歎息いたし候義に御座候此御人に執政之論をいたし近頃にては白川少將田沼など豪傑なるへしと申せしに田沼はなせと被申ければははにて候田沼と申候御人寶曆のはしめと天明年間には驕滿の氣よりよからぬ心起り松本かこときものを御用ひありて今以惡敷ことを田沼時代など申候得共はしめ 有徳院様之御手許よ

り出身いたし其上近頃循良の聞へある石谷備後守を御用ありしさま以前はよかりしに無相違候執政の可恐は天下のことおもふ通に成候時に有之候よし少々存寄ありて申し其ことをは後日のためと記し置て其頃淺野なとへはみせしこともありしか今更いかに御氣之毒の御事也御用ひの人次第に而よくもわるくもなる御人也われなど一旦屢御下問等に預りしこともあればこのほどの躰いかに御氣之毒におもへとも公義より御咎中の御かたなれはいかにとも爲へきやうなき也この人わか考に而は此ほと死に不及して長く煩ひ快ならるへきかとおもふ也いかにや有へき異宗之法義持候もの、事先便に記し候白石之西洋紀聞にあるところと宗法之立かた符合せりますく可疑此ことに付書物入用に而禁書など見合することもしあらは必表向書面に而其筋之御人御承知之上に而取扱へし後日存外之ことありしときこまる也表向なれば御役のこと故氣遣なし早速にいたし候可然候大に案事申候世に長芋のふみぬきと申候こと有之候禁書等の

こと別可恐可戒○尺ニ大まと十七日の御中感心々々御説又御尤也前に記す醉墨の説と同じ○龍之助初のほり目出度候夫に付御自誠の御説御尤也これに付御物語あり久須美佐渡守はなしに根岸肥前守町奉行之節か御勘定奉行之節かわれ聞おとしたり初のほりに杭をうちあら繩にて縛り附てありしとて驚入てはなせし也いにしへは三奉行職にてもかゝることゝみえし也今中々左様にはならねとも合みて肥前守か凡庸ならず千石まてなりし基をもしるへし韓麒麟とかいひし人儉なりしを人わらひければ衰來りて則驕る何の常かこれあらむといひしと也驕はみな衰のきさす證據なるへし三月廿二日ことし立 春元日御小性其外之遠馬遠足之名前書忝候薬師寺筑前守之西丸を鎌倉まで二十六里の道を夕七ツ壹寸前迄に歸りしはなるへけれ共御鷹匠同心石川伊右衛門之七時五分廻りに往來せしはや、駿馬につきたること可驚こと也武士の馬馬場乗はいらぬ事也何卒だく足にあり一日三十里位のみちを歩行馬をつからせぬ様にいたし度もの也これそ武士の

かまぐら八に
猿茶屋とい
ふありそい
の夫婦并こ
こと遠乗の
者にてその
當て馬のそ
ふもなまあ
るも乗は
なにかも
大に叱ら
とと一平次
殿なといふ
行かたは
行はかたは
常はかたは
おのこ
ないひ合
りて行に
りて行に

乗かたなるへし雲霞集などに春はさくら秋はもみちを除てのる傳あれは今のことくいにしへ帯は、のことき場所にて馬を乗試しやいかにあるへきわか馬の師沼田一平次殿は遠乗ならてはまことの修行にならずだく足をよくのらねは必誤ること多し今の馬場乗はおどりをおとり舞を舞ふの類也と常にいはれき松平讃岐守に長生とかいひし馬にて鎌倉遠乗せられしに七ツ前に歸りしと也讃岐守馬見所にまち居て歸り馬をくらのり試しにかはらす其翌朝ものりこゝろみしにかはらさりしと也同屋敷馬乗八半時頃までに歸りしは翌日馬更に役にたゝすなりしと人をいふを聞きことあり予一度沼田か悴につれられてかな川まで行しことありしに門を出て十丁はかり行てはだく足に五、六町もかけ又十丁も行てはだく足にて十丁もはせかくして段々とはせ行かたをまし頭を下ケ左のかたを軽くのることのよし後よりだくにのれそれ拍子になると叱られしか常の馬場乗にてはだくをのり叱らるゝ馬とかく拍子になりし也われ馬のこと少もし

らす何卒巧者の乗手によりて修行したきことなれ共これのみは一生出來す残念也太郎敬次郎などに覺させ度もの也

○九日 晴 けふは學問所の子供の講釋を聞に出る日なればわれも行たり子供には饅頭手ならひの師共には汗手拭扇子などを遣したりこれらのことみな 公儀に御奉公に少も私意を加へましくとおもへ共姿は公正に心内に油斷すると私意のきさすなり其外市中へ施などの目ろみ等多く夫に心附なり御役故かくすへきこと心をつくして千辛万苦することとおもへは第一也其次は御取立になりし御禮こゝろにてすればよししかるをかくしたらは隱徳にならむか子孫のためならむかなとおもふこと折々あり是御役を以私するにて金錢貪り子孫におくらむとするの一段品よきものにてやはり御役に附ての盜のうち也可戒事也この類を禁せねは惡黨の死を筆を振てゆるし良民を害するにいたる也この不隱徳必子孫に來るへし可恐こと也御仕置筋之義は書經をよまねは味の解かたき事あり

詩書は義の府也といにしへもいふけにもとおもふ也君子は義にさとる小子は利にさとるといふことありさとるとは早く夫へ氣のつくといふ意味ある也君子は間違てもこゝろ義に向ふ也小人は公平のことをしても心は利に向ふ也この場を早くまぬかれたきもの也此節八十度位也朝五ツ時六十九度也

○十日 くもり 江戸にかはりしことありきのふは惣構の土手にて鹿の子をうみしとて人々めつらしかりたり鹿は三年一度ほと兒をうみてふろ子なり母くひ破り遣すと直に出て草をくひ走りあるく也庭にて鹿の兒をうむなと仙家のことし池にて小かも子をうむにやこの頃山にて尾を交ゆる也あひることしめ一ツを二ツ故に争ひて鬭ふ也至るやかまし去年は青くひ一番居たりしか更につかふさまなし小かも故に庭うちにて子を育するとみゆをし鳥はめを失ひ其上羽をきりたれば木のうろへ入ことのならぬ故に子をうまぬ也

○十一日 大雨 御用日けふ市三郎寶藏院の稽古に行をみれば長合羽に白たび也われいかつていひしは身分も違ふなれ共予御勘定は出るまで雪中にてもたひはきしことなし芙蓉之間御役人に成ても大雨のときは退出に必たひを脱せり夫を何そや次男の身として雨中の白たび何事そや身分結構に成て育られしもの中人なればはしへもかゝらぬ愚と成て一生貧をする也これ親の教によるもの也汝其こゝろならむにはしらみを拾ふこと必せりといひきこの頃は朝々未明に馬場へ馬をひき出し別當か其ことを外庭より呼ふこと也よほと日々をはいやかる也戯に

五月雨に別當ぐつと高まぐらといひし也

○十二日 雨 ある人のいふ成程殿さまの小人にこまるゝとの御はなし御尤也實に精進にはこまる也あれほといやな食へぬものはなしとの事也ならにては四月八日八朔までは市中のもの上下一同におしなへてひ

る寐をする也全夜に同じ盜賊のみせのものとなぬも不思議也民藏方の下女など夜は五時にはねかす故ひるねはならずといひ聞かせしに大に困りしかこのほとはなれたり也ひる後に買物に出したゝき起して買ふとふくれつらすると也

○十三日 雨 穢多の申付置たりし小さな下地并鏝ふち頭共精練の革にちつくり來るこの度はわけて鏝は入念たればかくのことしとてためしたる刀の大なしになりしをもち來る先達直たね方にち切損したることあれは別にためさすうるしのことにていろゝいふ故に明珍宗保が歿前つくりし甲冑を手本に出しみせしに革の精品をつかひありしとていたく感たり宗保かこと今にはしめす感心する也この具足は御恩返しに精神をこめて作りたれば容易には思食下さるましく候私は湯島のうら店に居し時御見出しにて厚き御世話より世に被行たれば御恩はあだには不存なと五十兩もする價をとりなから麻いへちの甲冑つくりて大造にいひしを其

時はさまでもおもはさりしか今おもひ當る也穢多いふ革を水にひたし置
て毛を去ルと夫たけ弱しよつて張置て毛を去り水をつけぬかたよほと強
しといふ左もあるへし胴くさすりに一貫九百目はかりに出来積り
也

○十四日 雨 市三郎大に丈夫に成れりわか衣類にて丈はよろしけれ共
ゆきは不足けしからぬ肩はゞ也けふ腕をくらへみしにわれよりも五分か
たふとし力は少々あるか也

○十五日 快晴 さむし中數也入梅は芒種の節に入壬の日にて出梅は夏
至後庚の日を出梅といふは江南の風にて日本の曆にも夫を用られしにや
入梅のことあれとも出梅のことなしいかなることによけふ例の七日のう
まきものを禁するをみて市三郎さを困しからむといふ故にいひ聞せしは
この三度の食にめしと香の物の外は不食さとう入たるものうまき菓など
食せぬといふこと一向にめつらしからぬ也これは身のつゝしみに十七日

の 神拜前に六七年來すること也され共おさとのこゝろ入に新つけ
の香の物なとくれよき茶なといれくるゝ也わか幼年の時 行道院様は御
徒方に男子三人を相應のものにせむとの御困しみ大かたならす藝術等
のことには少の儉約といふことなければ御徒にては入費つゝかすよつて
勿躰なくも父上も母上も今わか潔齋の時にくらふれは今一段も二段も食
食を遊されし也朝鹽氣を禁するは父上もしかりこれ子をよきものに仕た
きとの御祈也きさて平日はわれ潔齋中にくらふれは御扶持米にめし至
ゝくろしよき香之物なしよき茶のにはなといふものなかりき第一に廣し
ま茶罐大小二ツにて事を辨し給ひし也其ことをしらしめし其ことに逢給
ひて今御存しの御方は一天下に母上御一人となりたりわか潔齋中なとい
にしへにくらふれは大成奢の沙汰なるへきと申聞せし也大小ともに子孫
先祖の創業のくるしみを忘れたるときに其家の衰るきさしと成也當時
公儀の御規式の御譜代もちなとは難有御事也

○十六日 晴 さむし綿入羽織袴也八ツ時頃七十度也けしからず候○な
らにては此節正月の堅き餅を只かたすみ二ツにてこりくくと至るよくや
く也其仕かた中位のかた炭二ツおこしよくいけ其上ほふろくをかけよく
ふたをして置也二時もかゝるとむしやきになる也夫を少々のおさとう醬油
にてあへて貯置子供に與ふる也かたきもちなれ共齒のよからぬものにも
給らるゝ也上方ものゝ勘辨これにてもおもふへし

○十七日 晴 冷氣昨日の如し外圍の土塀を度々鹿の子飛越來りこの頃
などは乗馬中にて大に馬を驚したり御林へうゝる苗木の芽など盡くくひ
たり其事與力へ教遣したるに與力共苗木をはまれしに驚先ツ屋敷圍内の
高くかやのしけりしところを人足して刈らせしにそこに鹿三疋狐一疋居
たり驚て逃去れり俊藏ことに骨折の野菜ものなど一夜に食れたり也奉
行所にては打はせねとも逐ふ故に鹿人の二三人も行は逃る也百姓地にて
は夫のならず畑を食あらすそばは行手をあけてはつかに手眞似をして逐

興福寺にあり
子もりなす
の頃鹿來り
の鹿一頭を
殺したるに
手鹿といふ
被殺損也

ふはかり故みなくひあらさるゝ也百姓共常に悲歎する也この頃鹿のこと
によりて御慈悲願に百姓共願書を出せりけしからぬ事也

○十八日 くもり 少しく暑氣八時七十六度に成乍去捨きる人のかた多
し○きのふ大津音次郎かはりに來る盲人のはなしに此ほとは鹿の兒をつ
れ歩行なれば往來恐ろしといふいかにと聞は鹿の兒を育つる頃は女じか
人をうつ也これは前足をあけて人を打倒しけしからぬこととするよしけふ
も途中に米屋の若きもの錢を肩にのせ行しものをうち驚して肩なる錢
地におちさし絶て四方へちりしとて人々見居たり又荷附馬をいたく打て
馬驚きて大騒せしとかたりきかよう成ことく畑をあらすは犬より大に害
あり

○十九日 くもり きのふは肴やより御奉行さまの御精進落にあるへし
幸鯛下直也とてもち來れり目の下一尺はかりの鯛四匁五分也しからは酒
なくはあるへからず酒有は肴に書をかくへしとて多くすみをすらせたり

与風おもひつきて築山のうしろ成芝地の蓮池のほとりへ行て書をかきみに芝上へ毛氈を敷はたゝみの上より晴はれとして至て書よしよき芝地はかり一屋敷ほどありてところ／＼に小松あり草花あり蓮あり的場ありわかくさ山三笠山は庭の内のことくにてけしきよし唐紙十枚はかりを費たり至る快然として書もよく出来たるこゝちする也筆を池の清泉にて洗ふに忽によく墨を散する也筆を池にて洗ふよほと益多し直に其芝地を寧樂園と号たり其圍ひ外には六十二間余を馬場ありて高サ二間はかりの土手あり其上に煉塀ありて十夕つゝ位は自由也可惜我鋋炮を學さる事と常にいふ也

○廿日 雨 冷氣也米貳匁ばかり高直に成書經の無逸の篇をよみてみるに人はこゝを脱カ苦しめ慮を勞して出精するほと壽命のくすりといふはなし遊ひくらすこと短命也其ことを周公の丁寧に成王にいにしへの人の長壽と短命との例までを引て仰られたり聖人に偽はあるまし今の養生反之

害あるわけ也

○廿一日 くもり又雨 けふ太平年表をよみて 有徳院様の御事を拜見して深く恐入たり四月廿九日 有章院様薨御五月二日 有徳院様を上様と奉稱六月二日にもみち山御庫の御書庫物之目錄を御取寄引續小笠原之弓術の書御覽也天下をしろしめしはつか三十日目にかゝること迄御手とゝきたると申こと 神さまの 御再生疑ふへくもあらず御定書其外諸役人の勤向火事場のこと迄 有徳院様に定りて万世の 御基とはなれり御徳は申上候も恐多事なれはしるすも無勿躰御事なれ共いかにして万機の御閑暇にかゝること迄遊はれしやと凡夫より考附かぬ事也

○廿二日 雨 此節雨降つゝくにつけ松たけ多し乍去味少しこのほと人のたのむにつけて書をかき遣すに禮として少々ものくるゝあれば或は差もとし或は返禮をする故に筆墨昏の外少々費たつ也乍去われらかこときものゝ書に絹表具いかにも氣之毒也よつて憤心にてこの方より謝禮の

つもりも可笑子供のとき 行道院様に多くあたまを被打候御惠の一ツ也
 さて又奉行職故也手習をしてかけものになる書千人に一人なるへしとお
 もへは君恩と親の恩に涙こぼるゝ也乍去昏其外をよこすは甚しき不隠徳
 也平仄違の詩など緝地へかくは尤子孫のむくひ可恐々々
 ○廿三日 冷氣 八時七十三度也昨夜四ツ半頃まで書をかき居たり小用
 に行とて居間の椽よりみれば泉水のうち築山のかげの方へよりたる所に
 ものひかる也泉水の魚を夥何かに取食はれて此ほとは眞鯉さへもみえぬ
 也大かた狐なるへしとおもふところに其ひかり狐火なるへしとおもひし
 かおさとをよひてあの火は螢かきつね火かといふにいかならむとて兩人
 にあしはしみ居るうちに螢にて飛かふさまみゆる也さみたれのふるに蓮
 のは露へうつりてひかりしものなるへし去年さほ川のほたるを取はなち
 しに其種類のこりしとみえてことしは庭のくさのもとへ多く螢生したり
 くさのもとに残る雪か沫かとおもふものあり其うちよりわくと女共いへ

この馬の背へ
 居候もの上
 に有候夫
 逆に候力
 置候に
 極品と
 候別は
 申候と
 成候と
 如く候
 いたし

りわれ臆したるにあらねとも心におもふところあると彼是にてかゝる見
 損しあり子供ならば臆病とて可叱也尤普通の螢より大きけれ共たけのし
 れたる事を一人ならず二人迄しはしは首をかたふけし也人は笑はれぬ也
 ○夕かた九日出之書狀相届一躰は一兩日已前に狀可差出とおもひしか此
 返事に可出とまち居し也先以母上様御機嫌克恐悦之至其外一同之御無異
 目出度候食物之義御案事被下難有候先便にも詳に申上候通に付御案事被
 下ましく候其後彌健に御座候間御放慮可被下候○新右衛門書狀練くらの
 一條右は例のならち屋之奸言と存候其譯はねりくらを造り候に生草なら
 ぬはなし一躰は三年も立不申候はかれ不申かれ不申候はしなひ可申
 哉と懸念に而作人と相談之上予くらのかたは出來候はしはらく乗ためし
 候はしはく乗馬いたし三四十日かけ切に而用ひ試候は子細無之候に付
 其かたを江戸廻しとの事に而ぬり直し候は相廻し候間少々漆こく相成候
 事に有之候よつて延候氣遣少もなく乍去兩手に而おし候得はしなくは

候はに可申候は木
さらけに可申候は
な作らちや買
り作らちや買
候り候つ折居
の段々折居夫
木忽し折居夫
木くらし折居夫
居木折居夫
有之候居夫
工之候居夫
候夫居夫
ての候居夫
居事候居夫
の事候居夫
あなま候居夫
居事候居夫
する候居夫
折居候居夫
は居候居夫
折居候居夫
出居候居夫
この候居夫
馬居候居夫
用居候居夫
也居候居夫

いたし候得共一年も相立候は、黒漆に塗上候は、尙さら大丈夫と存候
右はのりためしの品に御座候穴のあけかたはならちや申候通素人故よろ
しからぬ事あるへく候あけ直し候方可然候乍去革のこととてもならちや
にあら革下地より精練候事口には受合候得共よくは出来不申候と存候勿
論素人の工夫必可有之候間穴其外之義はならちや説之通なるへしと存候今
一工夫いたし可申候○是住と申候所化僧之義に付段々御教示忝候諸君
も宜奉願候察度誥之口書爲讀聞候處被仰聞候はと有之候末を省不申候
は口書印いたし候義相成不申候と之事に又御心附之通本山之所化
故身分之義尋置候處一寺住職に可准は勿論平僧に有之寮主にも無之旨等
本山申立有之候間其旨をも利害いたし候得共更に聞入不申其以來三度
牢問いたし候得共一向平氣に煩ひもいたし不申ます、牢問なれ與力共
も當感いたし候間此上は察度誥も出来不申候間御教示之趣にも參り不申
されはとて女は口書濟に付いたし方無之候間此上之取計方當感之限りに

ならちや打
取計刀を以
候折る刀
匠申候ふと
均別な人
格別な人
やなこと
あること
いること
いかい
も

付前段之譯を以口上書なしに落着之義可相伺哉なと、おもひ附候義に御
座候右之味如何可有之哉御内談いたし此次之たよりに御申越可被下候○内
藤之遣し候書狀之鍵之價其外とも否申越候様御申通可被下候○筆と印は
いまた出来不申候哉今便まち居候以前懸御目候より少々模様附候間名筆
に可認とたのしみ居候愚筆は筆を撰み申候筆にてよほと違候哉に有之
候○日記之内自讃毀他之頑僧嶋にて之著述もとより罪人たる浮屠なから
いかにも感心也日蓮など佐州へ流罪に塚原三昧堂におゐて膽を練夫
別段に佛學上達いたし候由彼らか方にあら佐渡後の御書と唱候別尊み
候事と及承候ちと譬候には過たる事なから聖人は何事も己のあしきとつみ
し小人は人をとかむるのみにて相反せり詩經に他山の石もつて玉をとく
へしとあり夫はあら、しき目にあひ候こそあら砥などの御かけに
玉もひかりを生し小人にあら、き目に逢候心を動さぬにて君子と成
と申候ことを詩の意に前のことく申せしか也さて右之僧に付一ツの論あ

りよき師に附よき道を聞かねはいかにこゝろをつくすとも學問にならずこの頑僧人欲の私は一毫もあらず其一條にいたりては賢人君子のかたしとする所なれ共つまり愚人也かゝるものを聞につけてもよき書物をよみ禮に身を置て格物致知正心誠意の學をつとめされは京へ行つもりにて江戸より奥州道中へ一さむに日々かけ行にて行は行ほと間違なり長沮桀溺楊朱墨翟らか類仁を學ひて過ぎ義を學ひて過ぎ或は仁義とおもひて道を弘めなからつまり聖賢よりは禽獸のことく申さるゝにいたり其害人傷ふて一人の盲人か衆盲人の道案内して深淵へともにおち入の類にいたる也可恐のかきり也われこの頃思ふ宋朝に道學ひらけてより二程朱子をはしめ大先生多く被出夫より心學被行て元の吳澄明の陽明陳白河か類學派夥出來て互に正學を唱て人を議すること日蓮宗に似たることもあるなれとも中々淺學のものゝいつれへ可隨しらすそれは日本流の堀川學徂徠學までもみなひかことにはあらさらめとも乍去其國にありては其國の道を

學ふへきこと勿論にて朱子學のことは日本に今のことく成りしは恐多も東照宮の惺窩道春等を御尊信被遊しにはしまり如今なりたれはいらぬ書物は捨日本の武士は朱子學を尊ふへきこと也われ以前より明儒の書をよみ又徂徠か大仕かけなる學問をもおもしろくおもひて少々宛一字ツ、ものそきたることありて佐藤捨藏のはなしに近思錄讀書錄傳習錄を三錄と号しくりかへしよむへしとのこと故に今以其通にするなれ共与風感ありて一兩日前より又専らに小學近思錄をよむことに成したりしかるに前の日蓮宗の頑僧のことをみて大に發明したり朱子學に少々可論ことあるとも明にても天子の科場に用られしは朱子學なるへし四書五經の大全の様子等にてもしるへし清朝にても欽定四經の斷案などの様子純朱學也まして前にいふ通り東照宮の思召に御代々御尊信今の聖堂々様子等を以考ても其御家來たるものは決り純朱子學たるへき事也何卒新右衛門らも小學近思錄はせめて講釋にても暇にきゝたき事也近思錄道躰をときしはし

めのかた用少し爲學篇よりみるへし道躰篇は元來朱文公の追而加へられ
たるものにて本意にはあらぬか也其說鼈頭などにあけありしと覺へし也
○廿四日 快晴 至而冷氣六十三度也○けふ所々博奕打のかたを廻り歩
行劔術遣ひの惡黨を召捕たり其申口によれば大和へ來りしに博奕を業と
するもの共之方にあ此節は世上博奕不けい氣也とて一向に錢をくれす所
々廻りけれ共錢にならぬ故に無余義盜せしといふにいたるこのほとは惡
黨ものゝ大博奕打は減してなら町にあ博奕打らかみな天秤棒を肩にのせ
て諸商ひするといふ風聞故左もあるへしこれに付はなしあり或奉行のこ
ろは祭の時奉行を日傭の者の下宿を市中へとり其旨張出しをして其目印
にて京攝の博徒共財布へ金錢入て御免の博奕とて一大土場あり其節は供
頭一日十兩ツ、になりしといふ也かゝる人なれ共市中のものなと難有狩
たるといふ也今風聞糾のもの博徒の方來りて其奉行と予とを聞合すれ
は其人を賞するなるへし其口を以風聞書出來ればなさけなきもの也風聞

をたすものはいにしへの間者也間者は聖智にあらずして使ふこととな
らぬといふはこのわけ也

○廿五日 くもり 御用日前のことに付咄あり新右衛門など奉行職など
にもなり又追而執政とならるゝ人に日々突合故にするす也前の奉行の勤
向といふものは月に一度も白洲は不出只與方らに酒を吞ませ同心等へも
のをくれ市中へ小惠を施したるもの也扱公事吟味物は此公事は何兩この
出入はいくらとて用人給人申合よき公事はなきやあらずやとて買歩行
入牢ものなと夥あり一寸の盜賊の引合にても百姓共の三十日宛も郷宿に
居たるといふこと也奉行は日々後園にて酒のむ外は他事なく二男とか三
男とかは木辻町に入ひたりて果は親もこまり坊主のことくに頭をして行
かれぬ様にせしか止らす其奉行の死する時も木辻に居たりといふ也され
共小惠を行ふ故に氣うけよし世にありかた人のことくいふ也某の監察局
の支配下の我に某の人はならにて市中如神に尊す佛のことくにありかた

り既に其人の武運いのる燈籠を市中にて納たりしをみ來れりと深く賞して咄したり乍去其實はかくの如く也昔漢の時の遠國奉行のときも其國へ行て日々兵卒のならしをさすることなりしか氣受の爲隔日に成したり其次の人は皆止にして氣受をとりたり其次の人は皆止の上に日々酒代をくれたり其次の人は又肉食の代を添てくれたりしかるに其次に來りし人來りみて大に驚ていにしへのことく復古せしかは一揆起りて其大守は死刑になり軍卒も刑せられたりとなり其ことを後世の大儒評してかゝることにては政事の可被行様はなしこゝろすへきことゝいひきそのよの遠國奉行も其人其職にあたればさして嚴敷せすとも譬はよき馬乗りの乗れは静なれ共柔成うちに動かすへからざる所あるに馬は速に氣をしりて首をあけ背を卑くして法のことく歩行也夫に類して馬乘にあらずして責馬をすれば馬かいたむかのりてか落馬か受合也後生大事に鞍につらまり息をこらして居れば馬は馬場の土手へ上り草を食ふにいたり馬の法は更に

なくなる也可歎事也○けふ御用狀來る川支にゐきのふけふと一時にとゝきたる故に大に驚しか何事もなし母上少々の御不快との事なれ共御自書の御狀あり其外いつれも別條なしとの事故に大に安心せりはしめは大に驚たり日記に内九日十日十一日と大地震雷雨等大に驚たり地震に付夜中外に出しことなど予など聞しことも江戸にてはなかりし也近頃めつらしきこと也大和は神の定給ひし都故か是は地震かとおもひしことは三年のうち一度もなき也○玄順は予不快の様子相談に付主劑之法書參候會此ほとかけもなし○鈴鹿豊後守放蕩の子を殺したる手際別段也豊後守は吉田家の執役中に而は神道のことよく辨へ奉行所之答など出來るもの也乍去京家の者かゝる武氣はあるましとおもひ居しに別而感伏也○廿六日 くもり 少々暑を催す途中歩行ものはかたひら宅に居るものは裕也乍去障子は明たるかたよろしといふ位の事也○御殿之娘共へ春日野にてうる鹿の生つもの髪さしを遣したるにたかいひけむ魔よけに成とて

兩人よりねたり來る故におさとより十本宛遣す也春日野に鹿の生角もてつくる根つけをしめ其外を小道具をつくりて所々に出し旅人なども多く買ふこと也しかれとも鹿の角伐は八月中にて其頃はまた鹿角柔にて用にたぬ也夫故に内實は鯨の骨もてつくり鹿の角もてつくるは奥羽のかたより角を買入てつくるといふ也奈良さらしといへ共みな米澤あさ也麻にあらず紵也からむしといふもの也八丈嶋にておる本八丈と云は獻上は格別其余は上州其外所々を縮いと御買入にて嶋人の御渡しに相成夫にて織る也元來八丈の丈夫成は嶋桑の蚕故唐いとに准することなるを八丈よりくれは本八丈は丈夫也とて上州其外の縮なるをしらぬともし類也よ中のこと多くこれに准する也桑の大木は新葉みな小にしてつやなし夫を以つくる蚕は丈夫也これは砂地惡地等桑の葉のうらへ土をあくる地にては高く桑を仕立る故に自然と唐いと、同事也上州のとき上田の所は土よき故に桑の葉に土つかす故に卑く桑を仕立る也夫はわか葉大きくし

てつやあり夫を以飼し蚕はいとつやありて上品なれ共弱き也乍去唐土にてもにしきなどの華美を以旨とするはやはり上州縮のことく蚕をするか也から桑といへは大木のことくなれ共易經に苞桑につなくの字あり是は必大木にはあらぬなるへし○このほと松茸多くいづれ共秋より味なし近頃めつらしきことによし也これは去秋の残いつるなるへし時を失ふ故に用少き也書經をよみゝるに周公の召公奭へ仰らるゝも人才なきを以國虛也とするとして人材多きことを成湯已來盡あけられたれば周の盛なる時は人材多きなるへし其衰は人材を捨られたる故なるへし寺人孟子其外末に成ても孔門の人々等の様子みな人材にて周の盛に出たらはみな用らるへきを時を失ひし故に疏食をくらひ水をのみて世を終るにいたる其末庶士横議楊朱墨翟等みなすてられたる人材かいらぬことをいひ散して却害をなし中には刑せられし人もあるへし是も又盛周ならは用られて用をなす人なるへし可惜時ならぬ故也人材倒置するときは指と肱と所をかへ鼻

の穴にて見目にてきかむとし或は足のうらに耳目などある様に成になる故にあれとも少も用をなさぬ也今の松茸秋に出なは貴人にも賞せられ土地にてもてはやし遠國迄へも遣し土地の潤にも可成を時を失し故に貴人は不祥として不食土地の益もなくすてられ物也

○廿七日 くもり 少々暑氣おさと螢かこをつくりたり五ツ六の庭の螢とらむはいとこゝろなしならの八景にさほ川の螢あり御役所より六七丁余也興福尼院より眉間寺のわたり多しよつて市三郎にさふらひ二人中間其外添て昨晩方ほたる取に遣したり直に歸り來りしか七八十も其余もとり來れり土地のものもかれこれと螢かりに遊ひ居たりといふ也ほたるのかこにいれらるゝをみて

佐保河邊乘晚涼。群飛隨意樂悠揚。忽逢今夜紗籠苦。知否誤身不晦光。窓上斜懸紗壁廬。甘泉一滴養微軀。可憐方尺小天地。纔試熒光夜々娛。

都府日記の詩はおもひ出しまゝしるす故に後屢あらため又韻を違へ平仄

をあやまること多し人にはみせられぬ也爲念しるす也

○廿八日 くもり けふ當麻てらゝ當麻中將姫の有髪の本像といふものを開帳せしといふによりて取上てみたり丈ヶ貳尺余の大成ひるなのことし髪はすべしにて紅の袴なと着て衣類は 仁和寺宮より御奉納といへは立派なること也居間へとりよせて見し故に人々みなみたり其内俊藏かたの少女順作かたの少女も居たりしかるに俊藏方の少女は先に來たり順作方の少女は跡より來れり順作あいそくに俊藏方の少女の頭を撫たりき其こと順作方の少女へかたりしとみえて人々のうちむれしなかにてオトツサンお榮さんのあたまなてしといふことを聞つまことにやいかにくとなしり問ふ也順作例々通にこくわらひ居也我つらく其躰をみておもふ様は婦人七去の内に妬心をいましめられて盜するもの淫なるものに比せられたるは過たるに似たれ共男子の爵録を失はむと患ふるより終に父と君とを弑するにいたると同じことにて妬よりして天下國家をも敗るにいた

隨の獨孤皇后のときは是也婦人中の丈夫にて文帝の天下をしらしめさるゝことをも助給ひけれ共妬心深より天下を滅亡する事をも引出せしにてみるへしこれに付物語ありいつれのくにいつれの時のことなりしや常には書をよみおさし和漢のこともしりて女の中にてかなり指を屈するものなれ共とかくに妬の一字はたちかねてやゝもすれは檀道濟か眼にひとしく松火のこたく眼を光らしなきわめきて忽に賢愚所をかふる婦人ありき其人に夫かあるときはなしに昔六朝のころに某の人妾を畜へとしけれとも其妻きかすよつて其人の門生よりして詩經の螽斯の羽振々の章を講してかくいにしへの聖人も子孫繁榮は喜ひ給ひし也といひしに彼の婦人其詩は何人の作也やと問ひければこれを万世にをきてを施し給ふ聖人のうちの周公旦の遊されし詩也といひしに婦人奮然としてヤア其詩何の役にたつへき周公をして婦人ならしむるか或は文母のつくられたらむには證ともすへし男子の造れる詩何の用ゆるにたらむといひしこと世

説にみえたりそこも亦この類かと聞しにいかにも然り兼あきく周禮に十二嬪廿一世婦八十一御女の類儉素なりといふ周公の心のうちこそ心得ね元來唐人は淫亂也左傳に季文子か儉を稱して帛をきるの妾なく粟を食ふの馬なしといひたり儉ならば太夫の家妾なくして可也木綿着物にても妾ありては驕り也孟子によるときは所々の祭肉のあまりもらひていはゞ印塔場の強めし貰ふかことき非人乞食に似たるものにて一妻一妾はありしと聞く何事をやかゝるけしからぬ淫國の風中々以神のみくに可移やは君はいまたしろしめされすや西洋各國猿か米を搗たるといふ程にもあらねとも必一夫一婦にて他狂をゆるさすことくといへはからも西洋も同じゑみし也同じゑみしの例を御用ひあらむには西洋各國にならひ給ふこそいみしけれと疊をたゝきて辨論せし故にさすかの亭主もきわたをなめし啞のこたく多くに介をかみし小兒のこと成てやみにけりとなり予かたの婦人なども左程にはあらねとも必似たることなしといふへからさる

かこれわか不徳によるものかいかむくこれも新右衛門はいかに御調役さまにても其御さはきは受まし周公にても微塵ともおもはぬ婦人もいにしへはありと聞まして新右衛門をや

○廿九日 雨 きのふ出入の町人かゝや助藏より當春よりの工夫にてつくりし墨三笏をもて來れり少々摺こゝろみしに唐墨に不減といふよくみるに形もいろも松烟のところくぼちくぼちといたしたるものかのこれるさま等全の唐すみ也先達而古梅園へ巡見に參り墨のことを聞みしにいかにして唐墨のことく柔にすゝりあたりは不出來すりかけにしてひゞのいることなしと唐の膠を遣ひても不出來といひしかこの墨以上の出來ぬといふことごとくくくに出來たりすりみるに墨の當り柔にて潑墨しすこしひゞのいりし躰いかにしても日本のものとはみえず扱唐帑へかけはよく奉書へかけはあしゝこれはいかにして製すると聞にたとへは松烟二匁ににかは壹匁五分といふかことき和墨の製也松烟二匁ににかは二匁も

其余もつよくいるゝとかくの如しといふ也唐すみはにかはうすく和すみにかは濃故とおもひしは大にあやまれり膠つよきほとひゞなといるといふ也おもひしとは大に違ひしこと也此製被行は更に唐墨はいらぬもの也少しもかはらぬ也

○晦日 くもり けふは鹿おとしといふことありこれは春日の鹿ならの近邊の村方へ行て藪林等之内にかくれ居て夜々出て作物をあらす也よつて三四年に一度宛奉行所へ願上する事也なら附八ヶ村もの共大勢出て貝を吹かね太鼓を打てこゑをあけてから筒を頻にうつ也一揆か起れるかこときさわき也○けふ質地と書入と諸物賣渡證文にゐ金子借候と無差別に付其わけを與力共へ申聞たり其序にかれら持居かけぼしといふものをみしに傳寫の誤は更にもいはす後世人か覺に書入しを本文と成しも多其中には本文之意と大に反して夫にゐは一書中一事を兩様えわけに成行もある也右にゐも知る万葉古今などいふものも唐の書も古代の物は後書

入しか本文になりしも多あるわけ也論語の邦君の妻といふこと其外微子第十八より末にはもしや全の論語にあらず後の人の覺に記しか本文になりしはあらぬか

○六月朔日 くもり 月並の禮受ること例の如しけふよほとあつくなりたるに八時頃にて八十度也けしからぬ冷氣也木綿單物にて少々ひやつくかことし土地にて五月に松簞多くいつるとしは米の出來あしと也さもあるへしや母上より常に大猪口に而七ツ八ツまでツ、酒用ひよとの御意なれ共ためしみるに猪口に三ツならは更に害なけれ共七ツ八ツにては氣根わるくなる様なりよつて常にせず字をかくときはかり酒を用ゆる也猪口の大成に而七ツと定たり一合五勺にたらすまた七ツ以下に而は一向にきましめ也酒功なし酒といふものはよくめくらす也めくらす故に多くのみて常の脈より高くなればめくり過る故に其つかれ必明日迄に出るわけ

也過酒のねふりを生するなと其効かとおもふ也七ツにてはねふり不出書をかき果て書をよみ例の通に臥る也それにてもつゞけはあしき也人々よくためしみたらはわかるへきこと也これをたとふるに肺腑の動き息の通ひ血のめぐり一刻をうちにくらといふ定りある勿論也夫を酒をかりて強くする故に膽ふとく勢ひつけども夫たけの無利あれは其早くなりしか如元になるまでのうち躰によはりを生し或は氣根をわるくするわけ也この理万事にかよふへし新右衛門など御ためしあるへし

○二日 雷雨夕かた晴 庭中を歩行するに綿入羽織也○けふ螢かこをみるに出はしめより小さくなりたれ共尙大きなみゆおさとものさしをあてさせしにくしらにて六分余ありといふ也螢は吉はらの遊女に似たりひるはいつくのかけへ行やらあれ共みえす籠をとりても動かす夕かたよりあたり目はゆきまでに光をあらはして夜ふくるにつけますく飛歩行也○この冷氣にて米二匁かたあかりたりこのまゝにて夏をもし過さは大

事なるへし

○三日 くもり 朝は七十二度也しか晝後より八十一度に成單衣にてよろし○けふなら町の者にて米屋をして可成の町人の悴三十三歳なるか實親の手にあまる故に御慈悲に御利害とて召連て出たり汝酒のみかと問へは町役人一同下戸也といへり酒のむをよしといふにはあらねとも酒は狂藥なれば其上にては品に寄心得違のあるましきものにもあらず下戸にゐ其次第にゐは常盤に生酔也其上奉行所に出ての取廻し受答おもひしよりもよしばかりも利口をばかに親こまりなるへし汝もきけよ學問所にて五教のことをもとき示し去年來より孝行のものあらは御褒美おもとおもふに三度迄不孝の訴はあれ共孝行のものなし是わか教の行届かぬ所にて上の對し奉恐入たり乍去親の訴其まゝになしかたしとて入牢申付たり

○四日 雨 冷氣也わた入羽織を着す○瀧澤の元家來常土村源七來る檢地は十月ころまで可懸と之風聞也とならへは何事もきこゑす

○五日 雨 朝けしからぬ強き雨也ならにてもよきことあり朝蚤く起ておさと庭を歩行蓮池のあるかたへ行て蓮葉をとり來りて飯をつませ置也朝飯蓮の香ありて至るよろしき也佐州などにては菓子は澤根といふ一里はかりなる所より小赤豆もち買來るくらひのこと也ならはふるひても都也菓子やの新みせ引札をするなとめつらしく江戸めきたりいつ買にやりても煉羊羹うは玉などに事かくことはなし江戸より少々やすき方なるへしけふはしめてかたひらを着せり水ぶりといふ躰に蒸してあつしおさとなどは晝飯くひてわた入の被布を脱たるといふ位也

○六日 大雨 先達問合之是住牢問既にはしめよりは四十度に及ふ度々のこと故是は六ヶ敷なりたれ共其外に替りなしけふは牢問中閉口無言なりしかしはらくして申度ことありといふ故に尋しに段々今迄之禮を述且わか取締牢内末々迄も行届市中迄澤に従ひしこと仙石之一件佐州之御改正に行しこと中書の手につきて寺社のこと明ことなといひて扱かゝる

御奉行の御吟味受といふも仕合也乍去御慈悲を以女犯之事を更に省たらむ口書ならば格別其余にては口上書へ判はならずといひて又閉目せしか又目を開きて一首のうたをよみたり記くれよといふ長吏にしろさせしに某佛門にはいれ共歌學なしてにははよろしく改給ふへしといひしと也其歌は

天か下いつくも川路浪しつか出つ船ゆたか左衛門尉

千代までのこうも名高き三ツ星は三笠の月に増ひかりかな

といひしと也長吏等いふ足は不立なりしかと骨にいたみなく外の罪人は汗出息つかひわるくなるにいかにも攻ても汗不出とて愚成もの共ゆへふし身或は眞言宗秘密のことを修すなるへしなとて舌をまくといふ也牢問五十邊に及ひたらは取計方を所司代に可伺夫迄は日々牢問せよといひ附たり初瀬をも糺したる所集議席などいふもの、役僧にてはなしとの書面を出せり

○七日 くもり 七十六度也四時前也けふは御役所の辨天のまつり也代々之奉行之例に石之燈籠一基を奉る江戸ならば一兩以上之ものなれ共貳分貳朱也みかけともし石にて高サ四尺六七寸あり右に付奥の居間の庭のはつれなる少々の芝地之所でんがく燈籠をつける也右に付與力同心家中之もの共之ことくく赤飯にしめ遣すこと也この辨天は元來御役所の土とり場の跡水たまりて池のことく成しをことを好める人の辨財天女を勸招せし也され共傍に大樹あり大なる藤などありて神さひて池も小なれ共青みありてよしありけなれはみたらしの池の魚をとると眼を煩ふなとてはしめは出入之町人などにおどされし也實を糺せは前之通也乍去祭りといふことあれは赤飯あり奉行も參る故に少々の賽物ありて普請方人足の所務に成也世にかゝること多し已前の英氣あらは淫祠を毀つ例にならふへきなれとも兼るもいふ通先例を守ること佐州已來心附たればをとなしく崇敬して奉拜こといとかしこし

○八日 晴 今朝京都に遣したる同心共歸り來りていふ四五日已來の雨にて伏見の豊後ばし中ほとにて五間はかり落たり辛してわたりたり桃山通は往來とめ也風聞にてはよと近江所々あれ宇治橋も落しといふと也われ屢大和より京都へ行に必ふしみにかゝること也地理を以考るに今大池といふ邊いにしへも沼なるへし夫は所々の堤出來て良田と成しものなるへしみち／＼の村名新田長池玉水などいふ也今以いにしへは伏見宮の御坐所存する也玉水は溜り水成へしも、山といふはいにしへは伏見宮の御坐所にて大閣殿下の御望なりしを進せられさりしかは其頃までは伏見宮は南朝の御末にて五千石余を御采地ありしを御取上にて當時のことくにはならせられし也以上一乗院宮の御物語をしるす夫は太閣殿下の御坐所と成彼鳥居内藤等の忠臣の討死せし所也され共慶長の後右之城は當時の西丸へ引移られて今は伏見奉行の御役宅のうらのよき山にて桃多くうゑあれはも、山とはいふ也今度の水は其邊へも出しといふよほとこの事なるへ

しけふは被頼ものを書によりて母上の被仰下候通御酒を給たり一ツ二ツと數へ給ければさらやしきのことしとおさと其外の笑ふによりとりあへす

番町の住おもひて菊の酒一ツ二ツと數へてそのむ

奈良の菊さ
かや奉行所
か儀の御酒
か儀の御酒
御用達さ
也次左衛門
也也

と答しか忽に母上のことおもひ出奉りて予もおさともなく也酒は八ツ半にて十二分也書を書畢り夫を詩を作り詩集をよみにあまりに月よく池のほとりくらさあたり螢飛こふさまいふへからすよつて所々庭中を市三郎をつれて歩行しに御隱居所の前行しにまた御酒中にも被召候一ツ給候へとの御意也例に通三ツ給夫を表に居間へ歸り此日記をしるす行燈くらけれ共酒給たれ共此位のもの書こと少もいとひなし母上御安心可被下候これ此ほと第一に多くのみし時也平日不飲薬同前にのみて如斯御安心可被下候はや夜五半過也序にいふ伏見の御やくらは當時の西丸の御書院の御やくらは是也御普請其外之時は御作事方の人足清服也手に障れば必災あ

る柱などある也。是は御作事方御大工頭金田藤七郎話也。小普請方持之西丸御大鼓やくらの下にふしみの陣かねあり以前は刻限には必うちしことなりしか。大猷院様のきこしめす度ことに御落涙ありければ御太鼓にかはりしと小普請方のものはいふ也。今二三分通り土にうつみて御太鼓やくらの下にありけふ輿力宅にある古瓦を多くみたり三百種もあるへし其内大極殿朱雀門あり瓦を多あつめては柱其外共到大造になる也いにしへのことおもふへしこのヶ條細字なるは母上の仰を守り最上の大酒にても此位のものにかけ候と申候こと健なること御安心のためにはわさと細字にするす酒めくり大酔にち燈心一本にち中々かゝる細字はかけましく候これ御安心の一ツ也けふ詩作のうち

○九日 雨 學問所こゝにては明教館といふ也。そこへ何ぞしるして納めよと儒員并懸り之もの共いふなれ共もとより學則といふこと可定にもあらねは外と違ひかしこして記さゝりきされ共太田備後守殿の懸物梶野土佐か額などあれば學問所の再ひ繁昌せしはわか奉行の時なれば必記せよといひけれ共場所からめつたなるものもかゝれずもとより象山陽明

等の語など可記にはあらずけふ朱文公の文集をよみて一の語を得たればしるしたり

大抵爲學不厭卑近。愈卑愈近。則工者愈實。而所得愈高遠。

錄文公朱先生語示明教館子弟 左衛門尉聖謨

このこゝろは今の學問といふものは朱先生の教に背けり學問は先ツ平日の行跡を人間なみにすることなるを夫には心つかすけしからぬことゝなる也。學問は他にあらず三度の食事等を慎しむ其はしめ也。其はしめの事にも六ヶ敷也。それをせず大論をいふは其身の行跡にこゝろなき人也。夫をせず大事を學はむとするはまた歩行のならぬ子の飛脚の修行するかことし忠臣にして死を潔することゝあらは至而容易なることなれ共日々の御奉公を早く出遅く歸りいやなることを不厭名聞の爲にせざるにありこれ至而卑く近くたれもしりしことにて六ヶ敷也

○十日 くもり 七十八度位也。蓮ひらき初たれ共去年より花も葉もあし

冷氣の故なるへし○この頃松烟墨をつくる商人助藏より墨を製する室を新に造り額字を乞フ是は奉行所出入町人の頭なれはとゆるして序に烏松といふ字をしるしたりくろき松といふこゝろなれ共からず松とよまれてはいかゝ故烏金としるしたり烏金の字は唐人の熟字なれ共からず金とよまれては助藏は金かし故至ていかゝ也とて夫をも止たり昔ある妓風流にて百人首を衣に縫たるに前の所へはなそむかしの香に匂ひけるといふか出ければ臭氣あるに似たりと縫直したるにこの度は人こそしらねかはく間そなきといふ歌出て大に赤面したりといふことあり助藏か方の額字又これ類す絶倒

○十一日 晴 朝七十六度也先達る例之是住再ひ牢問之上に呼出し得と及利害候處一兩日勘辨之上にて否申立と之事に付聞置たりきのふ呼出せしに御役所にては入牢ものゝ印は牢内取締の牢番人預り居事也其ものに向ひけふは品に寄印形の入用あるへし持出吳候へと之事也き扱呼出し

て吟味してみるに口書を直しくれたる事を謝して誥文言をは省くれよといふ故に佛法を以ていへは前書と誥文言は胎藏金剛の兩界のことし一ツを廢すへからさるもの也其上申上候に付といふ迄は汝か申分に被仰聞候と有之候は奉行所之辭也よつて相違するよしをいひ聞せしに口書に奉行所之辭載するに不及といふ故に奉行は勿論縱令 天子將軍にましますとも悪事なきものを苦しむること不能しかるに汝か口書前書のことくならむには眞の清僧也しかるを何を以四年之中に五十度余の打擲はせし奉行所不法之至ならずやよつて奉行所を四年以來察度せしことゝをも書載せて其わけをしるす也是難省所以也といひしに漸に承伏してさらは口上書を御よみ聞被下へしといふ故に與力共よみ畢候も末文にいたり女犯不致と之申分難立不届之旨御吟味受無申披由之文言は全に是住の意をしるしたるもの也夫は奉行所を下したる辭にあらず然ルに是住におゐて申披なきこと更になし夫に或は口上書印形ならずといひて一向にきかすよ

つて汝は釋迦の流をくみ二十年來法義をも聞なからいかなればかく頑愚なるそわれをも可欺世の人をも可欺欺得て我意をはり通したるときに天より賜ふ汝かこゝろと釋迦はいかにおもふらむ愚僧なるかなといひしに少しくおそれて頭を下て御慈悲をといふ故にさらは口上書に判をせよといへ共夫はきかすや、半時はかりの問答に及ひけれ共伏さすしてやみたりよつて口書に印形せぬまゝ、落着之積に見居たり元來ならの牢問に用ゆる石輕しよつて重き石をつくり牢問をも爲へくとおもひたれ共既に奉行所之法をつくす上は又刻薄のことに改て後世不仁のことに成ては不濟とおもひ改て口書をさせぬ方に見切たり

○十二日 雨 冷氣也けふは中院屋々參拜日なれ共いさゝか風邪に付不出ふり強き日には同心町代其外之もの共もこまる也外の病にあらず先例もみなしかり○けふ暑中之狀を市三郎の書てみせたり奇を究極せりなるほと文事は地をはらひたる男也生涯文字のことはおもひ絶たる人也され

共朝夕やかましくいふ故に保元壽永より承久の頃のはなしなど少々する也禮記ひとりよみに成たりよつておもへは人間並のものは修行にてよほとの人になるへし出精すへき事也市三郎にておもへは予なと是より今一段出精して息のかよふうちは心の修行をあけ度事也市三郎の文事なきに歎し又みつからいましめてしるす○このほと書經をよみ大に恐れたることあり大禹は既に成王の手本に周公の撰あけられし聖人なれば大徳なるへし其大徳の内に酒をいむことを稱したり申サは酒きらひなるか聖人の行ひの半分といふかことし夏桀般紂のとき至惡の人の行跡をいふに又酒を好むことを第一にあけたりされは酒すきなれば般の紂王の惡半分ある也酒をのまぬものは不學して聖人の一徳ありいかなればわれら兄弟に度を破るほとこの事はなけれ共みな酒をこのめるにや猥に酒をのみたくなりし時は紂王の一惡來りしとおもひよくのまぬときは禹王の一善を得たりとおもふへしよりあつまりてのみたらは死刑に可置とまで聖人は掟給

ひたれとも既に家業に出精して父母歡ひし時及ひまつりには酒をのめと
同し書のうちに御ゆるしあれはその位のことにてかなれ共何分にもおも
ひしよりもべ高の日數にいたりふへ居る也可恐可戒は酒也いつの夜にか
ありけむ酒のまぬ積りの日四ツ頃に書物をよみ畢り月よければ庭をあるき
みしにも静にして露きよく得もいはれぬけしき也其時にいたり忽酒を
おもひて三ツのみてはつかなから戒を破りさてく残念也き今のいちの
いやしさ可笑の極也この頃日記を出すべくとおもへとも宅狀參る頃なれ
はとて見合居しに今夕來る所々川留にて延着也先以御一同御無事母上様
御不快も御快と之御事恐悦之御事御文通之御様子も御よろしく相見候
一同大悅仕候○私義食物のつまり候事快御安心被遊候と之御事右は先便
申上候通只一度限に相濟申候此ほと快候心配いたし不申候様と之御意
難有奉存候御用向はさして之義も無之候得共大和國五十万石中之義其上
家來并支配向等も御座候間氣油斷は不仕候乍去心配仕候義は以前と違ひ

薄き方にも扱又母上に別れ奉り愛弟兄孫等を捨參り居候間故郷之情も不
少候得共三年來別る心を用候而修行いたし候而しはしにてもたのしみの
心失候而は不相濟義と少のうちに而も樂を忘れ不申候様修行仕候間三年
以前に見合候は、壹二分はかりのこゝろの甘キ出來候歟と奉存候追々に
修行いたし候は、此樂少々はまし可申と奉存候義に御座候樂はこゝろゆ
たか成か第一に而夫には先ツ足ることをしり欲をはふき候事歟と奉存候
義に御座候本なども經書は日々小學四書五經のうちに於て十四五枚には不
過其余はなくさみに御座候間當り候義は無之右は酒をのみ候も芝居角力
をみ候も同前之義に御座候四五日已來例之通槍棒をふり候跡に而ねふり
を生し晝前くたひれ候間如何いたし候哉とためしみ候處例之風邪之氣味
と相見今朝は雨以前に未明に馬にのり夫を棒千二百大刀八百重きやり千
貳百少輕きやり千六百居合并飛ひ候事三百例之通いたし夫より書見等い
たし只今御用狀の參り候迄書見いたし居候得共ねふりは勿論あくひも出

不申候間是ならは子細も有之間敷と奉存候扱又養生之事は朝めくすり齒藥夫々玉子湯朝鹽立に飯二はいひる三はい夕三はいにてはな一度焼飯もちの類一度酒は常はなし書を書候歟或は別段の時計よる一人按摩の書を得てより按摩手足はら等をなて息をつめ候義をいたし候ふせり候酒をのみ物を書はしめに

治心修身以飲食男女爲切要自古聖賢從這理爲做工夫其可忽乎。

といふことを先認候跡はなくさみをいたし候間毎度おさとと申候是に煩候は命なる哉と申候も可宜哉と申居候間養生之事御安慮可被下候○新右衛門より之書狀先達之申進候趣御返事承知文通に僞有之間敷と申候事安心也印二ツ御惠投忝候不存ながら上工之細工と相見申候十七日夜十八日には潔齋濟に付其節書をかき候おし可申と樂居候筆之事忝候三本之内硯中龍と申候方は即刻おろし候此日記しるし申候中々唐人の可及とも不存位に良工驚入申候稜角の出不申候風雅の趣有之候

は大に筆の助にも寄候義に御座候別かなたにさくなとかと有之候は見苦敷と存候此ほと此事心懸居候間筆は悪筆大加勢に御座候いまた古梅園の筆有之候間其内御たのみ可申候實に良工感伏也古梅園にて大坂より爲結候十本差越此筆を遣ひ後悔いたし申候○銅籠の事明日春日之社家共呼出候承り候様唯今申付候此末之たより廿日出に付其節否可申進候○日暈の圖御越忝候此地にもみえ不申候上は全く卑き所之水氣と相見申候當年作からいか可有之去ル十日よほと雷雨有之一ツ二ツは落候歟と存候位に付右に時候直り候哉と存候處矢張同前に今日など六半時より雨に夜までふりつゝけ夜中單衣にては少し冷過候方に付おさとはヒフに單物わたくしは襦袢單物に御座候夫故歟蚊など少様覺申候○異國船のことこゝにても風聞いたし候ひかさしての事無之候恐悦之御事也○この頃雷雨

十日陰霖一日晴々來蒸暑促雷鳴沾汗短葛凄冷忙着背身護老生。

如霰雨鳴板屋簷連天垂下水晶簾電光一閃狂雷響掩耳女兒伏碧簷

など其外四五首例の悪詩をつくり申候○こゝにてはまむしをはみといふへみと同じことにて反鼻の轉なるへしうなきめしをまむしをくふといふ是はマブシマブスの轉にてうなきへめしをまぶし食ふの意なるへしうなきをほうといふ蛇をへみといふものなしみな口繩といふ也古言のこり居とみゆ○十三日 朝少々晴 七十六度也しめくとして風ふく八月の如し○都筑平藏目出度候御序によりしくかた衣地被遣被下候由御世話々々この人御廣敷にて立身する人なるへし其ことわれ其人と成と相貌とによりてかねていふ當人におゐて不遠其所を得るなるへし○殿上にて御奏者番廻状の古きをみられ候よし也右は以前古河之所藏にありしことあり私用日記のこときもの也夫にあらずや夫に由井松雪丸橋忠彌などのことありて抄出して置たり大鹽平八郎一件之時懸り人の貸遣したることありき右に付はなしあり折たく柴の記を右之日記にて標注したらは見合によかるへ

しとおもひ認かゝる積にて夫限になりたり暇あらは御書入あるへしわかみしものと違ふか否はしらねとも夫ならば有益之書也東鏡に似たるもの也○依田源十郎之方の弓術御出之由至極之事也大的さしやまきはらは必よかるへし元來的前といふもの實用の毒なるへけれとも以上のものには毒なかるへし周禮の様子にてもいにしへ射を專とせし聖人の教もさしや芝射などのことし○番町邊之御旗本の娘とかゞ不束之様子驚歎々々右に付先便申進候事も候ひしか定而御承知なるへし暗に御同意也御奉公の宿さかりなといやなること也畢竟是等は部屋のものに手ひきする悪黨あるによる也風聞に而は部やのもの悪党に而五十兩ほどの盗して扉を越出奔するとて扉より落氣絶して男子に捕られしなといふ也わかことく御奉公人の娘あるものは宿下り好しからすさて又部やの女共の目き六ヶ敷こと也藤左衛門印章のかすく押候而被越一覽候一人之所藏印譜のことしあまりのこと也新右衛門のこゝと尤也風流もやはり道樂のうち也つゝしみ

て可然候これにておもふ多くわかことく武器をつくるも是又道樂のうち也乍去近頃よき道具なく自然と其癖やみたりやうくに革くら甲冑位のこと也太刀其外とも高料ものは實に亡の手ひきのことしいにしへ大金の刀買たりとて北條家のうち誰にか有けむわすれたり返逆にひとしとて叱られけること古きものにみゆる刀にて諸侯の身にて如斯いはむや其余をや北條九代倍臣を以天下の權をとり天子を遠流に奉處其外詐謀を以事を成しものなれ共天下長く背さりしはよく儉約によるもの也代々身從五位下相模守に倍臣にて居しも一ツの儉也既に寢酒をのむとて味噌ありやとてみつかからさかし求められしこと世に稱する所也北條の勢を以酒に一種の肴なくみつかから求めてみ曾を食ふと云にて平日のことしるへし其子孫高時にいたり驕甚しくして九世の卿族法華堂にてみな自殺するにいたる驕のこと可恐北條の詐謀可惡も儉を以よく世を長ふする也正道にして儉約ならば万世の基なるへし北條家儉之内に別可稱は官位をすゝます倍

小學ニ七十
万錢ノ筭ノ
話アリ合ミ
ルヘシ

臣の名を守り居し也人々衣類の儉約其外身の儉約は出来るなれ共こゝろの儉約かたしこゝろの儉約のうち官爵の儉約又かたし名聞の儉約尙更かたし君子難きことを先にして得ことをのちにす大小ともに身分の進まむとするの類名聞に拘る類の心の驕より第一に可慎事也われ七日之潔齋にて東照宮を奉拜別に願少もなし第一にものを愛し敬ふの正理にいたりたくさて又不慮之災難を恐るゝ也母上に無事に拜顔いたし度末々何卒驕満の氣少にても減候様神のまもらせ給へとのことをいのる也其外に奉願こと少もなしそれにても驕満の氣の起らぬ日といふは至少少し畢竟小人なれば也小人は小なる器のことしみちやすしよつて驕満の氣日々起る也みちては溢るゝ也溢るゝ所驕満とも衰ともなる也可慎事也大成ものは海也海にみち溢るゝといふことなし少々の雨にてもあふるゝは小川也この方の心ははつか成茶碗位のこと故に水一はいにてはやよき氣になりあふるゝ也可慎事也これ誰もしることなれ共身をくやみてしるす也

○十四日 頃日母上より御ふみの趣もあれは遊はむとするに遊ぶことなしよつてけふは馬琴の五冊ものゝかりしあれは八ツ時より袴をもとりまくらにてよみかゝりし也午睡のかはりに一時はかりに其よみ本をよみ畢りたり邯鄲んの枕のはなしの如く一炊のうちに三十年はかりのおもしろきことかなしきこと勇めること笑へきことをみたりみはてゝみれば一場の芝居を畫かき又は書つらねたるかことくにてむかし莊周か夢に胡蝶と成て遊ひしか夢の前のこと夢なりしやさめて後の夢なりしやいつれを夢と定かねしといふ説に同じくよみ本も夢也世上も夢也芝居也いつれをよくわかつへきやと莊周のことに感ありきこれは近頃になき大遊ひもおなし夢と世を過しなは樂しみてこゝろやすけく年を経なましこの樂酒にあらず金にあらず女にあらず勢にあらず以上の樂みなつくるを患へ失ふを患るの患ありてたのしみなし以上のことを去りて樂しみなは天地と共につきぬたのみなるへしいつか其位にいたるへき

○十五日 くもり 月並なし周官に典常作之師無以利口亂厥官といふことあり是は今を以いふときは 東照宮より御代々様の御定被置たる御定法をよく守りて夫をもて天下を治むるの師として決あ己か才氣利口を以其御役々々仕來をみたるへからすといふこと也是等は遠國奉行の三復して韋弦にかへへきこと也祖宗已來々大法のあるに自分々利口にあする故に大變を仕出す也昨日も是住一件万々一引渡などになる時をも思て以前とりし口書をみるに口書の本書帳面にて所々々張消等に爪印もなし元來口書といふもの牢内は印形させす書判也これ印形は奉行所々取上置て勝手に成故也卷帙に書といふも繼手印形々ため也しかるを帳面にしてよからぬ事也よつて卷帙に可致とおもひしが再ひおもへは是奈良々從來々仕來也外より何といふとも二百年來のことなれば相濟へし取締に拘ることか人の難義になる事は格別の寸法違は格別其余はみな古法の通也よつて絶倒するかこときこともある也

○十六日 快晴 昨午後より天氣殊によろししかし夕かたより至る涼し
今朝七十五度也○きのふ女犯僧是住の引合々女尙又呼出して與力より爲
念月日等尋たり無相違この女至るよろし頃日々當麻より出し有髮の中將
姫の人形已來のうつくしさと之事に而民藏とかあればなかく田舎に
あるへしとおもはれず是住か六十度以上も都合牢問受しも尤也といへは
無口々順作にこゝしてよほと美人也といふ中番のおやち迄かかけ出
してみて感心したると也眞の阿彌陀の來迎にてもかくは人騒くましき
也人の色を好むこといにしへよりの事めつらしからす御用といへは公
儀祖師といへは日蓮太子といへは聖徳といふ類にて好スキといへは女のこと
になり女子といふ字を合せてすきとよませし蒼頡のこゝろよりはしめに
てかしこくも徳を好むいろを好むかことくと仰られし聖人もすむとスイ
ナ御方ちやとみえたり○けふはかすかの御旅所の御まつり其外興福寺の
南大門のすゝみにて人多くいづるかゝりをたき借馬をのりおとしはなし

大弓茶みせ等殊に賑ふよし也○きのふは伊奈遠江守公事方々御用 召右
々跡へ我をめしてきのふ七ツ時に出立するといふ天狗沙汰にてなら市中
々もの召連木津までも御送りなとて途中まで出し人もあり日傭の所々
尋に人來り其外儒者醫者等追々駈附たり大笑也

○十七日 晴 天氣大に直りたり朝七十八度也乍去昨夜なとすし○郡
山城主大病也妾腹の男子二歳三歳なるか二人あり其三歳々方を柳澤權太
夫等々國家老召連て急に出立したり○けふおさと々笑ていひけるはおさ
と此ほと三年來病氣なれば朝いろ々手當して起る刻限五ツ也壹ヶ月に
げろくならし二日あるへし又少々宛かのよろくさ一ヶ月に刻限つめに
して二日あるへし遅く起る分刻限つめにして一ヶ月五日其外前の二廉を
合て四日都合九日々費あり壹ヶ年百八日也一年に三ヶ月半余われに見合
て費立也はつか成事にても一日に積ればかくの如しこゝろさしあるもの
少々の費ををしみてつとむへき事也こゝに修行ある也酒をのみて遊び碁

將棊など都而不用之事に七十歳以下のものゝくらすといふことはあるへからす長壽にて短命も同前也七十以上はたのしみて遊ふか役也われも日備ならばおさとに見合て壹ケ年五兩三分之金まうけあるへきに其とくなしとて大に笑ひし也○この頃淺野のたのみ其外順作かなくさみにて古物をみるによりて古物所々來る前に記す通に付古瓦などは車にてつむとも尙あまりあるほとみたりきのふは大般若經一卷を買たり書至るよろし天平寶字六年のもの也其こと奥書にあり可疑ものにあらず末に朱書あり貞永とあり最妙寺ころの朱書也あまりによし壺石ふみ頃の肉筆みたくてもみられすよつて買求たり其外金きせのまか玉へつけしといふ環のときもの二ツこれ環にあらず左傳にいふ金玦にあらずやは江戸などにもありきせなれ共金色四々の位とみゆ其外いにしへの鑄物の鏝一ツこれさひの躰いふへからす極上古のものとみゆ行基やきの壺一ツ同しやきの盃臺のときものこの二品尤奇品也以上のものとても江戸にては買はれぬも

此經文中の寛
元證文の通
地證文のたよ
此經文のたよ
遺りに淺野へ
遺す約束也

の故に買置たりいつれも千年以上のもの也われ古物を尋ぬるかとしてい
くゝの古物を所藏のものみする也實に古物は多くある所也其内に三輪の
山より出る茶磨石といふものあり緒しめのこときもの也自然のもの也と
いふ也よつてわれ考ありわれよし野へ行ける時三輪の邊をみしにうねひ
耳なし三輪天のかく山相對したる躰其外山のけしきとも自然ものとも定
かたし 神武帝より遙に遠き世の陵ならむかと疑ひしことありいまこの
茶磨石といふものを得てよくみるやきものゝまとか成緒しめのこときも
の也これ日のもと神代といふころのみさゝきに三輪山の神をまつりしも
のにて茶磨石といふものは夫へ納めしを掘出すことゝみゆる也かく考み
れはこの石人作のものにて世界第一のものなるへし多くみさゝきといふ
ものをみれば古きやしろの山の類に可疑事のある也武州大崎の柳生かの
やしきの内に大なる松山あり地理を以推に古き古代のはかのことし大崎
村有馬のやしきに古き山あり其山を開きて庭を廣せしに其内より石門あ

りひらきみるに石室ありて中央に人ありて其左右に追腹切しか何かはし
らす人居並て死たるすかたのものありし故一同驚て早速に埋めて其山の上
へ祠堂を建て林大内記へ相談していかなる人かしらぬ故に冥漠君の祠とい
ふかくをかけしと大學頭語りし也其はかをうかちしものみな三十日前後
のうちに熱を煩ひて死したり積累セキライの毒にてもあたりしものなるへしとこ
れも大學頭のかたりし也これは前のことにかはらぬことなれ共いにし
へを好むくせあるもの或は神をけがすのことあればしるす也われいにし
へをこのみ古物をみれ共古物はきらひ也多くは墓中のけかれもの也しか
し江戸のみやけなともあり又淺野にたのまれし故に前のものは買ひし也
○十八日 快晴 朝七十七度ひる八十五度也○きのふよる五半時過に書
をよみ果ていねむとて衣着かへたりしか月ひるのことなれはいぬるもを
しければ庭へ出て御隱所居脱カの庭へ行みしに御二かた共に牀によりて月みて
おはしたりいさやわれらはねなむこの牀かさむとの御事にてしはし牀に

よりて月をみしか月明に星稀に曹公か詩のことくにて江上にはあらねと
も松風なみのことく露ふかく夜靜にしていふへからさるけしき也市三郎
を呼て芝生に筵敷せて臥なから月をみるに芝はいと細やかなれはおのつ
からわた厚きわたフツの上カに坐するかことくにて興いふへからすおさ
といふはや四ツを過したり十日の夕より潔齋なれば七日に過たりこの月
にて酒一ツはいかにといふあゝよくもいふもの哉奇也々と舌を鳴して
市三郎に酒を温させしに父上のきこしめして女もてうにを賜ひたりこれ
はくとして二ツ三ツはかりのみて月をみしに池の魚躍るけしきなといふ
へからす盃中に月ありて腸まで涼しく照せるかことくなりきならば夜あ
つき所なるによるこの節八月頃のことし

○十九日 はれ 暑八十八度に至るこれにてつゝかは豊年と成へし○俊
藏か知れるもの長崎にありそれかもとへ申遣したるに唐番一本貢番貳本
來るわか酒の肴十二分に出來たりこのかみつくるまでに江戸へ歸りたき

もの也昨夜江戸召之夢をみたり前の市中之躁なとある故なるへし
○廿日 くもり 八十八度の暑に相成これにては作から相應なるへし○
中字かきのうち細大共宜と歎申候銘と覺なつ氣のふて至るよろしく候右
之筆御序に二本はかり御廻し可被下候既に筆禿頭に相成候而書物にひけ
多出來こまり居候間可相成は早く御廻し可被下候○けふは 一乘院宮大
乘院殿に參る暑中也中院屋に參拜もいたすこれ奈良奉行之總廻勤位之も
の也往返にて二十町前後もあるへし奈良奉行になりて江戸の暑中廻勤等
のことをおもへは汗をかかも又難有也○異國船當年はめつらしく北海を
廻り其上南部青森にては大炮を以千軒ほと焼拂たるとの風聞ありまこと
にや元來西洋船之義北海を乗しことはなき也右は津輕と松前の間并から
ふとの間をのり不申候而は又元へもとり不申候而は難成故なるへし然る
に文化之度れさのつと日本航海をせし時歸りに北海をめくり夫々カムサ
スカへ行たるかはしめにて追々北海を廻り覺しと人のいひしかまことに

や北へ屢來ることあれは南のふせき別而心をつけねはならぬ也北はいく
ら來りてもいつれも王都の類へ遠ければ患なし豆州相州房州のこときい
やなることはなし孫子虚實篇にもそのことを專論したり北へ來り事を成
へくおもへは必南へ行南にてことをなすへくおもへは北にてさわきみす
ること軍旅の常なり○近江邊所々大雨とみえて湖水大に水まして膳所尤
甚敷つゞき御役宅にては出水のしたくを成たるか其にも不及さりしと也
草津邊は出水にて三四日往來とめに成しと也往還へけしからぬ押掘出來
しといふ也三井寺邊の山も崩しといふ吉野郡よりの訴に同郡にて山くつ
れあり民家にて逃損したるもの二人死せしといふ訴ありこの躰に而は所
々山くつれ出水あるへし○俊藏かたの少女ますゝ奇也そめ此ほと少々
不快也右に付世話をやかするなといへは一向に世話をやかせずして常に
倍したるおとなしさ格段也わたくしかおとなしからぬ故に母の疾にさは
りしなるへしとの事いたくおそれ夜にいたれば必そめの按まをすると也

兩親はそのおとなしきによつて又一ツの案事を起し日々菜其外菜くひの類まで悉世話をして今少しおとなしからすはよからむ位の事也これも親の慈悲なるへし夫故に少女一人には先ツ三度とも菜なと遣すよし也あるとき菜なきをかなしみて彼是いひければ元來めしと香の物はかりにても無差支くひ通すといふこといふかたき事也しかるに常に三度なから菜を欲することあるへからすと段々世の中六ヶ敷ことなとそめるとき示せしに遂に其後は菜をねたらす菜なきときはおつかさむめしと香物のくえるといふは難有こと也といふと也夫はまたよけれとも人來れははなしの序にわれらかこときものは香物とめしにて澤山也めしと香物を日々給つゝくといふはわれらか身分にては無勿躰とて染かいひし誠マコトのことはをまるにいふ故になら出入町人などへ對して折々父母の赤面するといふ也

○廿一日 晴 俄にあつし八十九度にいたる○市三郎の鎗大にあかりしと寶藏院にゐいふ也われあまり突身せしことなし市三郎の槍にてもすこ

きよりよしよつ毎朝突身をする也われもなれてよし老人なれ共乍去いまた市三郎などには困らぬ也同寸をも遣ひ遣す也同寸にては面の近所にも鎗不來けふらは汗如泉になりて立居にため息出る也わかあつさに困むこといにしへより不相替也是も母上の御讓なり

○廿二日 晴 九十一度也あつさいふへからす○先達高橋左太夫殿の日田の御移の賀として金三百疋肴代として奉りしにけふ右へ返書來る四十年余にて彼地に行みしに知たるものは山水のみにてかはり果たるけしきにて其來り問ふものを尋ぬれば或は親或は祖父を知しもの也との御事也日のもとにてうらしま子もろこしの人のつるに化してのち故郷へ歸りしといふ丁合成か山水はおなしけれ共其人は非也とて歎せしを今の左太夫殿におもひくらへて人ほとはかなきものはなしとおもふ也死して不朽ものは正しき名のみ也左太夫殿へ過酒あるへからすといふこと灸のこと申進したりしに御守りにて且持病もよしとの御返事也母上御安慮のため

に記す也○けふ福山侯の儒生の書し籌海私議といふものを大坂の人の越してみたりみなイキスリスの事の論也一わたり尤なることあれ共みな行はれぬ事也元來儒生の論といふものは時はいかに世はいかに當時之人材はいかに古來よりの御法はいかになといふことをは専らにせずしてわか考の手落なく書面の符合する様のことのみにかゝりて記す故によくみれば味なし新右衛門など此ほと其議に預ることあるともみたりに書生のことを信用すへからす趙翼か該余叢考か二十二史劄記のうちかに朱朝の天下書生のためにあやまれしといふことあり序に見置かるへく候され共わか方へ來りし渡邊華山又は天明の度の林子平など其時は狂人のことくにてとしを経し今になりておもへは狂人にはあらず先見のあることにて只過激に過たるのみ國家有益のこと多ければ世の中の人のいふこと決る能忽に聞かす己を空しくして聞へきこともある也され共我間宮林藏又は華山かこときものと親しくして災を招きしことは新右衛門等か親しくみ

る所也こゝろあるへき事也

○廿三日 九十度のあつさにて油てりといふもの也○午刻に所司代を田安一位様御 逝去之旨申來る引續き 御簾中様御不例之由御大切之旨をも申來る文化之ころは月々のことく御出生被爲在候御繁昌其後とても御六方様 御三夫婦にて被爲 在候御殿の御手せま申位之事也けるに近頃御凶事之御打續いか成事にや 皇天皇土之御力にも及はざる事にやいとく恐入たる事也 公儀の御力にも御引續恐悦はかりには難成事かはかりかねてかなしきこと也臣下の身としては只々 上之千万歳の御壽命のことのみ願ふ也きのふ 一乘院宮御家來と郡山家來馬役之忤と口論いたし郡山の家來は主人大病中外出いたし候故色々と相詫候處宮方之御家來二人に踏倒し刀をもき取候ことく刃を潰し打擲いたし候得共死せるかことくに相成居候處はやくたはりしや刀は遺物にせよとて投附立去候間拾ひ取もはやゆるさすとて一尺壹二寸のほと脇差を

拔追かけ壹人を切倒今一人を追かけ候處行衛見失ひたりとて郡山へ歸りたり其一件吟味に成町人百姓に候は、相手不法之義を仕かけたるものなれ共宮方足輕と武家之家來に、如何可有之哉とおもふ也わきさしよほとものも也小わきさしにて切たれともよほと疵所也

○廿四日 晴 昨日之御停止觸に付今日所司代御機嫌伺として可罷出處中暑に付用人使者として民藏を差出し御斷申上る右は押罷出たらは可被出なれ共昨日より例の母上の御症之氣味にて按摩をたのみ藥をのみ居るに烈暑之旅行手當六ヶ敷に付御斷を申せし也○昨夜庭の築山にて狐屢鳴江戸ならば可驚なれ共山中はなれて常のことし枕邊にてしはらく鳴故によく聞にクハイ／＼コ、といふかことしよからぬもの也さすか物を怖れぬおさとなれ共近くきつねのなくはきらい也屋敷四方に百間以上之土手あり空地多し故に狐は多き也晝なと女共庭にてしはくみかくる也

○廿五日 晴 九十一度の暑也ゆうへも狐の屢なくにて目をさましたり山さとは鹿の啼ねにめをさましつゝとは古今にもみえたりこのさとは鹿は犬のかはりなれは犬にては風情なしと狐のなくにや

○廿六日 晴 御簾中様去ル十日御逝去之由所司代申來る前に記す通り之事に、民藏出京中に付御機嫌之使者勤さする○昨夜も長屋へ行て狐屢鳴たりと也是は狐子をうみて飢たれば食を求るとの説ありよつて當分食を可遣やといふ故にさはらぬ神にたゝりなしといふことあり構ふへからす人のことに狐の世話やきしことなし人よりも又世話をやくへからす野獸人間もとより道を異にす構ふへからすとさし留たりこゝは犬なき所なれば狐至る多し近頃の奉行には狐懸り之給人ありて其宅にて日々飯をやりに後には白晝も群を成して來りて果は坐敷などへあかり困りし也又ある人は鹿を愛したるにこれも果は坐敷へあかり其上に奉行之頭をうちたりし故に驚て其後はいたく忌きらひしと也このみもせす構もせぬかかゝる

ものゝ取計也むかし鄭の國にて龍出て淵にて鬪ひしことあり子産にはらひをせむといひしに龍の淵中にて鬪ふに人の搆ふへきわけなきよしをいひて止たることあり多く御幣をかつく類のこと欲ふかきより理にくらくなりて三文のこゝををして百文の益を得むとおもふか臆病より起る也○日くれ頃泉水へ行おさと市三郎一同に金魚へ餌をやり居たるに六月十四日附並便之宅狀來る大井川十日余之川差支と之事に既に御簾中様御逝去之事今日所司代を申來る位之事故いつ方々たよりも遅く成しとみえたり今夕あつさいふへからすこの日記蚊遣火のもとに汗たらけにて書也五ツの太鼓を打に八十七度の暑也これ江戸になきこと也昨日已來の暑にてとかくに袴は着用なからも足を出しきの字なりに成る故に以前所々登城に歩行し時のことを思ひしにけふは大に暑を減したる様に覺へし也一度のきの字なりもなしおさといふ暑と争ふやうに眼さし常より光ると也大笑也不相替暑を恐るゝことを知り給ふへし吟味役に成前は朝劔術

を遣ひ九ツ位より脇坂などへ日々出し也され共くるしくはおもはず却るならにて六月中只一度外出せし方暑にたえすおもふはみなこゝろの怠り也昔後唐の莊宗暑をさくる樓を造らるへしと有し時郭崇韜といふ宰相か諫しに梁と天下を争ひし夾寨の戰のことを思ひ玉はゝあつくはあらしといひし信の確言也○先以母上様御機嫌能其外たれも病人なしとの事何より之義龍之助胎毒なく殊にいろ白にてよき男也との事藤左衛門別段出精格別骨折候故之義と相見る可悦之至り也内藤家にて予新右衛門幸三郎と男子三人生れ夫々結構に成過候而御先祖已來之陰德を遣ひ盡せしとみえ常にいたく恐おもふ所也これよりは予新右衛門幸三郎といふ内に銘々多く貪りしものより多くつみもとして陰德はなさすともせめて償は置たし孫らの盛衰祖父の心と教とによること也藤左衛門の兒よき子なるはみな新右衛門か福によるなるへし○おしけ縁談之事御申越の内いつれにても人のよきかた可然候高あり金ありても人材ならては一向に役にたゝぬ也

森當時の人は存不申候得共祖父覺藏は我も一面識は一段之親敷人なりし北山門下の學者なりしこの人の血脉不衰候は、別可然かいつれとも新右衛門之御鑒定次第にいたすへしくれ、も人物にて御取極可然候いづれとも御まかせ申候○順之助こと困りたるものたしか成受人等無之候は難差置候委細は家來より家來申遣候義と存候○鐘三郎の尺二八分六厘以上大出來也○くらの事具に承知被入御念候一躰此方にあも上を革にまつゝみしは失策也布きせにすへきこと也くらは細川へ幸三郎をやり眞左衛門之覽をたのむ方可然也○陽物をマラといふ卑諺の御考に魔王界の魔羅王を御考いかさまにも無覺束事也 天子より末々までも男子をマロといふマロは男子の通稱也口とラは舌音也マロの轉と申サはいかに右に付一笑あり負たることをへこむといふ也これは其第一は男女也女躰と男躰と合せみるに女躰一所のへこみある故に男子に不及よつて都而不及事をへこみといふなせへこみといふはへのこむるの中略也といひ

しと也今の世に万葉のことたまのさかやく國といふことより附會していろくのことといふ十に七八九はみなこの類也○長刀に而怪我人出來候而即日手やりのかけ所を御改のよし至極絶妙々々平日のことみなかくのことし聖人のみちの一ツなるへし感服々々○村上へ御出にてよからぬものを御撰御もらひ被成候由いかはかりか悦はしく存候義に御座候かくなくてはならず別而組頭になられてはこの御心得至極なるへしわか與力に鏝を與るに多く鏝を出して氣にいりしを選といひしに第一によからぬを取しとて田舎もの、不目利とて家來笑ふ故に實はわれかれか才子になると常に謙遜するをけふますく、しる目もよくきくとて感せしことあり新右衛門の取計を悦ふも右故也右之目かねかねにて筒を作りありてよくみゆるならば西洋ものなるへしわか目かね八兩位のものなればよく目かねやの直段を御聞置遠近の利きかたを御ためし可被成候其直段下直ほと新右衛門之直段は高きと御心得あるへし○たかの護國寺の山へ巢くひしと

いふはいかにも珍事也都る巢鷹山といふは至極深山にて柚の通ひもなき
ところ也或は絶嶋の岩山のはな也江戸近邊秩父玉^つ摩兩郡の奥甲州境など
に万々一巢たかあらは是も不思議と申位のこと成に御府内人烟盛成地へ
巢鷹の出来しといふは尤めつらしき事の様に思ふ也しかし左はなき事か
むかし大和のいつくの村なりしや鷹の巢をかけしを取て何といふとりと
武内大臣に御尋ありしに不知百濟より歸化^へ人みて鷹といふもの也と申
上て夫々日のもとに鷹のこと初しといふこと國史にみえしと覺^てへし夫は
つゝみとかにすをくひしとありて山とはなかりしとか覺しか空覺故あや
まりあるへし勿論其頃の^{大和}は今の信州きそ山位のものなるへしこのこ
ともし御尋あらは夏かけへ御聞可被成候○母上私不快を速に全快したる
よし御よろこひにて御文通^へ様子には例の御願かけ等有之候哉と奉存
候以後とも御願かけの類何事も御免可被下候勿躰なく只此上よきことな
と有之候^は天^ののおそれ^に御坐候右につき申上候たち物等^を事決^る御

無用也このころも禮記の居喪の禮をときしところに七十は飲酒食肉とあ
り七十にしては心の欲するところにまかすへしとの徠翁の說などもあ
れは頃日ならの御兩親へ申上るは御兩所さまとも既に七十にならせ給へ
は酒を被召上候と魚を被召上候とを御勤にて心のまゝに可被成候決^あそ
こに御配慮あるへからすと申上たり母上は殊に御勤好と申候様成御生つ
き故にそのことを御案事申上候聖人の教にて喪に居てさへに酒をのみ肉
を食ふといふにて其余を思ふへきこと也七十以上は世の外に遊ひて氣ま
ゝたるへしわれらも今よりそれ迄には行たしと樂に修行する也七十にも
世の外に遊ぶことならぬもの人にも所にもよるなれ共半は聖門の罪人な
るへしけふ大越より幾之進の書状おさとのもとへ來る別條はなし幾之進か
おさとを案事ているくといふさま筆外の意自らあらはれてわか新右衛門
を案事おもふと少もかはらす深切にみゆる也これ深切より書に及へはな
也こゝを以文章は末事に^あ役にた^ぬことをしる也幾之進のぼちく^と

しるせるにて涙を流す意みゆる也誠ならずしては被行不申ことはかくの
ことし母上の御文など一わたりの御文のことくなれ共おさとなど拜見こ
とに落涙せぬことなき也しかるに政をするもの一編の書付などを以觸示
して身にとりて不行して其書付のことくなることをおもふは無理のかき
り也心あるへきこと也しかるを役筋のものにても忘れ居たるふれ書など
を以小民を叱ることいかなるものにや終には民身を動せは刑せらるゝ様
になるへし政にあるもの取捨にこゝろあるへき事也○友野先生よりわか
詩作をはじめしことを殊によるこはれ候よし申來る去年冬已來はじめし
こと故に一向に出來不申候この春つくりし詩の御刪正の内七言古のさくら
の詩はよろしとて御賞しありければしるす也書生めきたる詩はいや故に
雪壓茅檐積碎瓊吟窓閑寂夜三更靡葉叢竹橫無響杭節疎松折有聲雪聲
據鞍揮劔手却日燃吟髭以換鳴琴瑟休嗤學小詩偶成
なとといふ風の詩は通らぬ也これ自己流故なるへし歌もその意あるに

は困る也さくらの詩は題は垂絲櫻也

春花春色各國新皇國獨縱櫻花春櫻花多品皆殊色就中垂櫻最絶倫

玲瓏垂簾珠万點楊柳羞澁欲傲鬢舞風細腰泣飛燕艷麗學得瓊嶼神

君不見西土從古花卉衆詞客年々吟咏頻獨賞梅瘦桃李俗遂令牡丹僭帝

宸又不見牡丹歸化既千歲俯同芍藥亦稱臣海内無競神州妙花猶壓倒戎

狄人

結句は日本はいにしへ無筆無學のときは百濟を臣とし任那へ迄も手を出
して武威盛りしこと也いにしへは戎狄をよくおそれしめしことなりしを
深く感したる意をこめし也再ひいふ護國寺のたかのこと御鷹へ屋と四五
丁の所なれば屢つなかれし鷹のはなれしなにはなきや大竹伊兵衛など
はいかゝいふや序に小笠原などを以御聞合可給候○岡田利喜次郎の弓術
などすること一向にしらぬことにて武備のあるに大に驚て賞歎せり御序
によるしく御傳可被下候竹内清太郎は奇人なれば別段とはいひなから兩

氏の武編常に感伏殊に岡田のことは不思議位におもふ也文備あるものは必武備あり全之御奉公する人に武備の出来ぬといふはなかるへし新右衛門并兩氏とも馬術はいかにそや馬又乗らすして成あかり者の大にこまることにて此伎名代にてはならぬ事也

○廿七日 くもり 八十六度也 一乘院宮御家來吟味に成れば暇申付候由之處此度之ものは御家來に無相違と之事也めつらしき事也儒者へ御門主の御沙汰には官家之家來奉行所を呼出あれは拘合に相成候を恐レ暇にするといふは主人より先不實を家來へ示す也夫故に家來の不忠也これ上之不實によるもの也いかに入用かゝる共家來ならば家來之取扱にすべきこと也とて坊官家司等大に叱られて今般之一件は家來にて吟味之節に召連人同道也元來武家めきたる御人故也けふ儒者のはなしに聞て御門主は乍恐御生レ損し也官家ならずはよかるへし法親王には立派過るとて笑ひし也

○廿八日 くもり けふは惣年寄へ荷物わたすとておさと六七日巳前より休みくゝに荷物こしらへ大騒也ことくゝくおさとの手に成事也みてもいや成事也

○廿九日 くもり この頃そめ痛風にて打臥たり格別の事にはあらず氣遣ふことはなしといふ也右に付女を見舞にやりしに歸り來りていふにはそめ不快中榮ほうのをとなしきこと別段に而このほとは三度の食事果て膳椀を洗ひふきてはこへ納るまでのことは悪い引受にて背をなて頭もむこときこともすると也五才の少女けしからすとて驚てかたる也おさといふされ共幼稚のもの仕かたなし親の不快を忘れ時々わかまゝをいひて氣をつけられてはおとなしくなると也仕かたなしといふ故にわれいふ人のこゝろにはれくもりあるは大人もみなしかりわれらなと晴くゝとおもふことまれくゝにあれとも常にくもりにて甚敷は五月暗に雨ふることきことのある也はれくもりなくいつも晴たるを以純一至誠といふ今はれくも

りなきものを見たくは俊藏夫婦などかゝいを愛するなとなるへしこれこそいかなる白刃の前にも少もかはらし千金を積とも少も動かしとおもふ也禮記に父は子を祀らす夫は妻を祀らすといふことありされ共父に子を祀るもの多く夫に妻をまつる位のこと多し純一至誠といふこと誰もあれ共仕とこの違ふ故に大人小人とわかるゝ也と笑ひし也

七月朔日 九十度快晴 儒者來りて郡山の家來共か小川小池にても魚のある所は武士の二十人三十人ツ、川狩するといふ話を聞てそれはうらやましきこと也江戸の武士もかくならはよしといひしに不審かりて私忤なとには戯には蟲も不殺様に教へわか常に生るを放つをも聞見することなるにいかにといふ故にされはとよ書に帝堯の徳を稱し奉りて則武則文といふ也易に文とは不言して神武と稱したるにあらすや其外武王周公より成王康王につとふる所のこと專に兵をこそいひたれそれにてさへに康王

の御子昭王は楚人に弑られたれとも君父の仇を報するものなく漸に齋桓召陵の間にいたりていさゝか其事ある位のことにかくも治れは治まるほと武は衰ふる也文の衰ふるは猶可也武の衰ふるにいたりていか成惡黨か大手をひろけて歩行ても取鎮は出來ぬ也こゝにいたりて天下いふへからさるにいたる也よつて 公儀にても武の御世話影御事なれ共いかにせむ江戸にゐは自由に山かり川かりして鳥獸魚鼈をとること不能故に武士の身を寒暑にさらすこと不能いかにこゝろはたけく共寒暑に身をさらさねは仕方のなきにいたる也甲冑も武藝もいか様にもなるなれ共馬術と武士の寒きめに逢は直に疝積の起るなといふことにいたるは實にこまりたることゝわか身の上によりて常におもふ故に郡山の武士の不教不令して武士の必用のことの出來るを稱するといひしに儒者の常におもふとは大にことなり御役人の學問はかゝる所にこゝろするにやとて不審かりて歸りし也山川のかりあれは不教して身のきたえ出來る也

○二日 晴 九十二度也けふ三輪の神主の不束に付取調みれば神主は禁足にして勤なし神主は都而神の取扱のことくなりといふ也三輪の神主共はみな大己貴命より神孫相續して今以連綿たりよつて其内を一人ツ、神主といふものを定置といへ共至而窮屈のこと故にはつかつゝにて替合てみな神主たることを恐るゝといふ也 神武帝より以前の實子相續とはけしからず江川太郎左衛門も三りを下に居るなるへし出雲の國造も禁足也といふこれも神孫にやいかに

○三日 晴 九十二度也川名圓藏の悴并中村理三郎より暑中々書狀來る右々趣に而は歸府の節は奈良泊り也と也○おさと健とはいへ共夏故にやとかくころゝする也

似たものか夫婦にならばかみなりとおさとごろゝ成て居るらむといひて笑ひしもおさとにあたるものは調物のるいふみかく事也しかるにみな好なること也今一ツ落字せしか也○京都より來る女の半襟に夕か

ほと蝙蝠と縫たるをみてさてゝ京都也たつねを迷ふ夕かほの宿とよみけむこゝろならしといひしに夕顔ならず瓢箪にてこれはこのほと京都へなり田屋來り芝居大あたり故かゝるものを作るよし也流行におくれたること如此風なかれて八人藝するとは季子か八僧の舞の類ならむといひし屁ひり儒者に似たりこの半ゑり京都の御勘定所の御用達より御勝手様へとて來るおさとか御奉公人なることおよび江戸役者の大あたりをいはむとの事予とは雲泥にきかきゝたり

○四日 晴 奈良を去こと一里はかりなる所にて雷起りこれはとおもひしにさしての事もなくはれてあつさいやまさりたり一里はかりとは三里の所にある山ははれなから其かたくもりて雷鳴はためきたれは也○けふ市三郎に申聞るは汝か書物故に打れたる頭の數いかほとあるへき頭の皮は鍛最上にて甲冑にもなるへき位也しかるに更に出來さるといふは朝夕よまさるにはあらねとも只々いやに而口を動し聲を發するはかりなれば

全學問の狂言に而心には少もしみぬ也心よりしみて學問せむとおもふもの臍下に一點の光を發したらは物覺其外ともなほるへきをといひ聞せしにてよく顧みればわれも又朝よりよるまで書を読みざるにあらず經典を專にせざるにあらねとも心より立居に行跡へかけてすることにはならず暇を消する爲によむ故に是も又狂言也食物衣服の爲にし妻子の爲にし名の爲にしみな己か爲にすることなき類みな狂言也詩文章の類は其内狂言中の小伎也この狂言の場をはなれて學問するもの洙泗の人々の後宋朝の諸先生等を省き一わたりの人々に何ほとかあるへき

○五日 晴 あつさいふへからすよるいつ方もねられすといふ泉水の水一尺よほと余減したり大和所々の溜池みなつきたり雨乞を火ふりといふことをするよし郡山を家來を届来る○市三郎のよむ源平盛衰記を予もよみしに義經の軍功によつて左衛門尉に被成尙又其としのくれに軍功を稱られて從五位下に叙せられたるよしをみて義經の軍功天下万世に比類

なく身は頼朝の弟としてかくの如し然るに我も今從五位下左衛門尉たりこれを以おもへは在勤をいやかりいろ／＼おもふなと、いふは天下の罰當り也可恐々々

○六日 くもり 雨二ツホはかりふりて暑ます／＼甚し所々病人あるよし也左もあるへし並便に而眞田信州の自書并蟪川能登守を之自書來る能登守といふ人はわか登 城すれば詰所を來りてはなしする位のこと也しかるに必月々に交通あり書或は新刻ものなとくれらるゝ也親類にも能登守ほとにする人少しいかなることによこの人七十九歳にて孫まで御小納戸に而悴は 上の 御覺もよしとかいふ也われに少も用なき人也ならぬめつらしき佛像のこと聞かれたき位のこと也よくはつせはいかにみわはいかになと申來る也

○七日 くもり けふはふりやせむいかにとておさと、未明に起て泉水のふちにて涼かてら蓮池のかたへ行て蓮の盛成をみて夫を築山へあかり

みるにいこま山春日山へ夥もやがりて大佛堂かすかみにみゆる位なり
しか又はれたり○七夕の登城とて江戸は此刻限より髪結浴して大に忙
しきことなるに遠國はかくのことし與力其外の禮受るといふも四ツ位の
ことなれはいと閑寂なること也

○八日 晴 所々雨乞するといふわけ故六日七日の微曇をみなく雨ま
ちて喜ひしにけふは半天の雲なく暑九十二度半也きのふは八半頃に薬の
ことく大猪口六ツの酒をのみて直に書にかゝりて唐帟十枚はかりを費す
日くれくいたる御隠居所にて御酒被下あり小器五ツに御免を申上
候亦又字にかゝる蚊夥し揮毫の手へ鹿の子のことく蚊集りて憤を生し揮
毫に不能よつて書は止て打臥たり一睡の後八半頃より蒸暑にていかにし
ても不眠夜中扇と手拭はもち通しといふ位故けふは甚ねむし家來らに聞
にみな同じ午後しはし假寐したりひるねといふこと珍事也母上へ申上た
らは御歡に孝行の一ツなるへしとしるす也御門主を儒生を召して御物

語の序に汝左衛門尉方へ行て語れ頃日奉行所吟味を申立し家來共を片口
を聞て其旨御口上書を以吟味申立ありしにこの頃にいたりよく聞はわか
家來の不法尤甚し不届の奴原也あの男故何も遠慮はあるましけれ共もし
や予申立と違ふなどの心配懸念のありてはいかにも氣々毒也少も無遠慮
嚴敷すへしそのこと只のはなしに物語れよとの御意也右に付此ほと足輕
中間其外御家來の不束もの以後なき様にとて嚴敷御手限の御糾にて御暇
などにも成るよし也法親王にはあらず立派の御役人也川柳に
檢校の女房きりやうむたなもの

といふは御門主の御こと也とて先達を申せしを内々被聞召てけしからず
御笑被遊しといふ風聞也

○九日 はれ 九十二度之暑也○別當兒の出來てよりよほとをとなしく
成たり日々うちに居て馬の世話もよくする也下人は己か爲にすることな
ければ子に遣はるゝ夫故に子にても失へは惡黨などになる也上下共に己

か爲にするといふことに心なければ悪事をなして善事をなしても退屈なとする也さりなから下人又子の爲にをとなしくなるなといふも天道さまの御法便なるへし夜はのみをいとひて臺を造り其上にのせてうちはにてあふきつめに酒を遣しても多のめはもりすることならずとて不飲也このことく親に成たらは御褒美もの也

○十日 是れ 少々新涼也今朝八十度也八十九度以後にてすむへし昨日よほと地震也よほといへ共江戸にては至る輕き地震也乍去三ヶ年中はしめて也今朝打よりていふ三年うち地震かとおもふことはあれとも家のみしりといひしこともなしきのふの地震は少しくみしといひし也山城は地震多いにしへより也信州もいにしへこの度のときありしよし國史にみゆるよし也まことにや地所にもよることかとみえたり○けふまでは吟味物なししかるに口書物多人數呼出して口合のことをいふ故驚て尋ぬれば口書は吟味物にあらずと遠國の田舎流義多くこの類也よ

つてわけを教て其こと記し置せたり

○十一日 晴 きのふ夕かた日高入をして村くもり立たり必雨なるへしと人々悦たりさてあつきこと蒸るゝかとしみなく寐かねたり夜半に与風めさめて聞は板屋へ小雨の音する也大に悦たりおさとにも左いへは是もきゝて雨なりとて悦へりしかるに雨たれのおとせず不審して起出みれば快晴にてふりしは星なるへしといふかとしあかり障子の茶たて虫の羽ふりせし音となるへし此ほとの人々雨を待ッおもふへしけふも快晴にて熱暑もゆるかとし御用日なかれてけふの白洲入組もの三口少々の金公事其外合て九口あり四ツ時八ツ前までかゝる却る暑氣を忘れたり暑をいとひてあつしといふも畢竟閑暇とおこりより起ること也

○十二日 晴 昨夕六日限に御團扇献上濟之奉書其外共來る右に付るは乍例新右衛門之御取計萬端之義忝幸三郎之認物御世話之至御座候先以安心いたし申候其御地は九十四五度之暑之由めつらしく候江戸は凡八十八度

お佐中はうは日さの御い
州は十はさの御い
位はなれは先の御い
頃もみははひみ其
申上は三たにりは
や三上ははに
まれは三たにりは
十は三たにりは
成たはに被ては
候と夫婦申へ
たし申候涙
候と夫婦申へ
たし申候涙

並のあつさに九十九度と申候は一ヶ年に兩三度に不過候興中に八十四
度より汗出八十七度以上より殿中に手拭を出し屢汗を拭候義十ヶ年來
之覺に御座候しかるに九十五度之義有之候は差引五度之相違冬ならば
綿入壹ツの違に付さそくと御さつし申候ならも暑に候得共九十二度限
に御座候一昨年と同様に御座候これも雨一滴もなく大和豊年米不食と申
習し候専ラ天水場に付此ほと百姓共大さわきいたし候田方之世話
たし居候用水之出入等はいまた不承候御狀拜見にて江戸表之義昨夜も申
あかし候義に御座候乍去 母上様至る御健にて其外御一同之御無異尤源
太夫俄に中暑に候得共是以快一同五苓散と首引との御はなし御尤に御座
候母上様御狀之御様子此ほとは御健と相見候一同歡候義に御座候新右
衛門家内にあわらひ奉り候迄にならの御はなし有之候由恐入候義に御座
候此義御尤至極之御事なから法華の功力にて少も御減し被遊候様にと奉
存候石川より差上候砂糖に砂糖も多被召上候由はあまり之御文華に御

水の漂す
いふも難
火のやと
いふ勿論
に取候事
義なる事
也難なる
こと達な
むかすの
むかすの

座候此ほとは新右衛門方ならよりは必ゆたか成事に可有御座候其上元來
常々申上候事なから新右衛門之よく仕へ奉り候事別段に其義にいたり
候毎度恥敷存候計之事に御座候を子なつかしくと被思召候より御ふみ
文華に過候様奉存候私と申新右衛門と申格別結構幸三郎と申候も少も
不自由はいたし不申母上様御一かたは樂々たる御隱居様に奉養候御事
故に却私事を被思召候御事といく重にも恐入候義に御座候只々例之御
佛參專にて御少も御心を樂しみ被爲在候様奉存候次郎右衛門母順作母な
と其外高橋之御祖母様などへ時々御引くらへ候御心を御養ひ被遊候様
奉存候法華之水もたよはすこと不能火も焼こと不能病即消滅不老不死
也との義も大火の焼ときも我土は安穩也と申せし類いつれも心のち方一
ツにて困しみを樂により直し候教と奉存候其所にいたり候は儒者の教
と申候もさして相違は有之間敷私など三ヶ年來は別稽古仕候も心困
しき事をは深く恥候天理をしらぬより起候と存候歎少々は肩やすく只

とを佛の教
たること
もしるしく
る第一と
のしきと
に取直せ
はあはれ
も苦しむ
也苦しむ
居るとい
も早く人
も早くと
る様にわ
水の難火
施の以教
華の妙義
上への義
右衛門
御へし
るへし
により

白洲は出候罪人を見候も先ツはにくしとおもふこと無之別の人をうら
みにくみ候心小人の私の心のうちにては少々減候義に御座候母上様など
御說法御聽聞何よりの御くすりと奉存候○越州書畫のこと承候御申越段
々忝候しかる所京もならも書畫歌等共にきれものの中々可稱ものは無
之候此節別々甚敷と承候間いろ／＼の墨にても取集新物を廻し可申候間
何分奉願候こゝへ來り承候得は古瓦を俵いたし候被取寄たるよし其余
いろ／＼聞候義も有之候間古物などは不益至御座候と考申候○伊州廿
七日頃大病之由歎息々々君子故と奉存候筈或は藥をのみて死し丹羽五郎
左衛門は積の虫に詫して服を切り山本道鬼は軍備を見損して討死して申
譯をしたり君子誠をつくす積に而智力不足ときはみなかくの如し君子の心
を勞する所は恥をしり己をとかむるところ甚敷小人のつみを人に歸して
平氣なるとは大に異なるものなれば士たるものこゝろあるへきこと也○
米下直にて百俵二十七八兩之由なら奉行などは袖乞せずはなるまし大笑

也しかし此ほと上かたは夫よりはよほと高し四拾兩以上也小笠原のこと
かけ捨之積金一口至極可然候よろしく御たのみ申候此人よき人たるは請
合也夫故別々貧也仁をすれば不富とは陽貨の名言なるへし○庭のすみに
壹間余に三間はかりの水溜あり此ほと干上りて水至少し市三郎誠一郎
うちよりて水をくみとりしに大小合てふな三十余あり泉水をかへたらは
多く魚あるへしとみなくいふ也市三郎泉水へ入みしに水なほ二尺はか
りありとみへもまてふみこみし也このほと水減したれともいまた魚死
するといふほとのこととはなし鴨をし鳥など可成につゝき居る也
○十三日 晴 九十一度の暑也はつかに夕立したり一向にしめりに不相
成候○はや三度の魂まつりせり江戸よりは何事も旅なればことそきたり
別々よからすものかなし魂迎への火をたくときに
庭火たくかけくらくとも手向するこゝろはてらせよみの國まで
夕からすこらくとなくも袖ぬらすはしとなりぬるたままつりかな

こらくとは万葉の戀歌に烏の子等來となくといふによりてこらくなくとはよみし也

溽暑似蒸風似死時看炎影暖還晴小池點々纔零雨一片殘雲漉熱行

數歲未逢如是暑患汗患渴困如癡尋思昔尹佐州日葛布喫氷過越山

三國の越後のかたの時にては七月中旬氷一塊二文ツ、也

○十四日 はれ 中院やに參拜暑如昨日御役所の佛間は當時兩御隱居様を被爲入候わきに二疊敷のはつか成上段のすかたしたるところありそこに三尺の佛間也そこをみたまたなを江戸の如くする也まこもの賣物ませかきといふものなし夫は田村與助の御細工也與助此ほとは徒格に五節句には目見をゆるし勝手方之下役に料理人兼帶也泥鰯うなきをよくさくこと江戸の如しさしみなとよくつくる也土地ものは田村さまとてみな様の突合也御祭禮の時紋附の上下を着用したきよしを願ふ不相成旨申聞たるに出入之徒といふは立派之米屋に出入之廉に例にて遣す上下

を着用する故に再應願ふによりて御勘定の時日備のさふらひに上下をかしたる例をおもひ出し御祭禮の時は別段とて紋附の上下をかしたるも大笑也中間の與助同前御取立にてきつこうの紋 御恩によりてひかる也甚敷は去々年勅使の時服穢に付紋附之幕を爲打事不可然といひしに春日の社人共御奉行之御紋の幕ならてはとて不承知先例もあるとの事に再應之論に終に 勅使警固の與力之番所へ紋附之幕を打たり 公儀御威光の御余澤にきつこうに三ツ星の紋のひかり如此難有扱恐入たる事也○十五日 晴 きのは欠込訴などありて七ツ頃までかゝりしかけふは晝前にすみたり中元の故なるへし書經に祭の時は酒をのむことをゆるし詩經にも祭の時は既に神は飲食をたしむとまてにいひあれば前へ潔齋を三日くりあけて盆三日は酒あり別あけふは中元にて母上の御機嫌よければこそけふ魚類食らるゝことなればやきたる魚を求て夫をさかなにてころよく酒給たりこのことはいつ迄もいはひたきこと也けふ市三郎へ教

の爲にはなしきかせしは小笠原信濃守かと覺たり其家來にかゝ美曉之介といふ人ありこよりをよりて内職にし甲冑を其錢を以作たりはしめ其こゝと酒井先生へ相談せしに先生の御世話にて明珍宗保に知ル人となりけふは壹万又貳万といふ位の金をはこひて作りたり出來上りたれば畢竟酒井先生の示によりしもの也とて酒井先生へ謝義として明珍に冑つくらせてまいらせし也無間先生失給ひ其冑其まゝに成居しを追々後家へ申して曉之介か仕立をせし也宗保話にめつらしき深切の事なれば手間は進物するとかたりし也この曉之介素讀と手蹟を師範と成ていつみ町へ堂場を出し弟子共に孝經を專に教へし也ある豪家の忤弟子入をして學問いたし候得は衆人の前にて口をきくにもはつかしからず候間何分頼といひしに曉之介驚て學問といふは一事を知り一事を行跡に及ほすことにて第一に親あるものは孝行を以元とす口をきく爲に學問するといふことを聞かす第一に學問をする眼のつけ所違ひたる人は弟子にしたりとて詮なしとてもち

來りし東修を其まゝ返却したりと也曉之介はわか同門にてさしての人ともおもはず愚物位におもひ居しに追々にかくの如くなりしを宗保か常にはなしに聞てわれらの遙に不及を感歎せし也されは市三郎などに何卒曉之助を目あてにせよとけふ申聞せし也

○十六日 晴 あつしきのふは九ツ半時より日くれまで人に頼れ候ものなど書て其上夜にいり月のよかりければ庭中には四五尺はかりにて長七八間はかりの芝生たる小土手のこときものあり泉のかた也夫へ筵を敷て芝をかりて直に蚊いふしに用ひて四ツ時頃まですゝみ居たり二階などの如くにはあらねとも土塀の外は畑にて空地所々に多あれば月明にして風清くこゝろを可慰おさと市三郎などゝいろゝのはなしをして一合はかりの酒を二時はかりに月をみるさかなにて風流なることまことの月見なりしかさて寂寞のかきり也はしめは筵の上に獨坐して詩歌など吟し居たるにおさと考にて一徳利いかゝといふ故に汝か才東坡の妻に過たりと

て稱せしかやかて一徳利と玉子二ツに豆腐十きれはかりもち來りければ地獄にて佛にあひしこゝろにて月の光を添阿彌陀も錢ほと光るといふことは聞しか月も酒ほと光とはめつらしと一笑せし也○けふ牢之内ものゝにふめんを遣すかつほふしなと入て味ある様にして遣したり去々年の七月は七拾五人ありしかけふは二十人に不及

○十七日 晴 中野之白洲等以前の奉行より上手也といふ故に上手下手とは甲乙を争ふ故也御仕置筋并白洲といふものは晝夜くるしみ先ツ十年にて筋よろしきもの免許也其余は銘々の稽古次第也中野は其ことにわか十二歳の時より三十七八歳の頃までかゝり居たれば二十五ヶ年以上之修行也精煉の人と一度も修行せぬ人とを以上下手を論せられては中野は泣物也大和國に儒を以鳴もの轍鮒の困といふことをしらす其余押之知ルへし夫に亦も濟也夫故に田舎に亦は上手は大損也可歎こと也

○十八日 晴 盆の十五日の夜裸躰無禪にて蓮の葉をかふり苧からを杖

につきて立並ひ月かけにてかけほふしをみれば人により淡濃ありこきはいのち長くうすきは短とかたり傳ふるとなむ其こと女共か試みしにみな同しかけ也と也十五日の夜庭にて女共蓮池の蓮葉を願ひて一枚ツ、もらひ行たりこゝろつかさりしか其こと也と也よつて其はなし一兩日笑くさとなる也○組之もの等身之戒と成へき語をしるし吳候様十人はかり願出たり手もとに四明公語録ありし故に取出しみにみな高過て與力同心等か戒とすへきものにはあらず多くは上手の上のこと也よつて四明公のうち薛文正の語と小學近思錄のうちより抄出してしたゝめ遣したりよくみればみなわか朝夕九拜してもあまりあるへき戒の語也學文は高きにあらず微妙の説にあらず只朝夕の手近きことに我らかいませは多くある也上手の論は學文出來てのこと也子貢の才にても性と天道のことは聞くとを得すまして凡庸をやとますくおもふ也大豪傑か儒員などは格別飲食男女のことたれも知たることなれとも夫にてもよく守ることはよほと

の賢人ならてはかたきことなるへし夫に附ても小學近思錄は一己を治むるには余ある書也

○十九日 晴 きのふ夕かた桂女願を通大和一國配札を義承届候禮として来る年齢廿歳余にて美人也且つ供立等立派なりといふによりておさと其外いなりの山に上り歸をすき見をしたり奉行所玄關より門前にてかこのるまでかつきをかふり并同じさまの女壹人むき出しつらの女壹人にて鉦打緋の雨覆ひのかこ立かさの袋緋にて全の御ひめさま也奉行所にて開門する也女共中將姫の参りたりと聞あやまりてはたしなとにて驅出したるものもある也桂女といふものは文永かの職人繪合に小はら女と相對して白き布にゐかしらをまき居たり桂のさとより出る故に桂女といふ也今も所司代は年始にあめをもちて禮に出るとか聞けり元來あめをうるいにしへの提重と關東にて異名する女の類かにて其内いか成事か由緒はしらす 東照宮の御由緒を申してふるく關東へ下り御廣敷にゐ黄金時服等

を拜領する也奈良奉行所は田舎にゐ院下の僧は 御簀本より上のものおもふやう成御役所故にかゝる取扱とみへたり今の桂女の親は土屋相模守懸りにゐ我取扱吟味したる事ありき御紋附のむらさきのかいとりにて出し也○きのふの夕立にて涼し朝七十三度迄下りたり未明に起しに月よしはや虫なきて初秋のけしき也

いつかたもうるほひもれぬ宵の雨にあさけすしき秋の初風

○廿日 晴 夕かた庭にて金魚の世話やき居たるに江戸状来る母上様等々御書はなし全過日引分もの也先以無別條にて安心也○十八日に微雷にゐ夕立せしか夜と朝はけしからす涼しく成たり朝は一兩日七十四度にて中敷のうち也尤ひるは八十六度に成る○なら町にゐ鹿の子病死いたし候旨之届書をみれば鹿守といふものゝ病氣之様子を爲見夫を興福寺にて檢使を出す全中暑に無相違と事也きりみせとかいふやすき賣婦のふんとしなどのことを猿かくわく亂せしいろのことしなといふことはきし

か鹿の臆亂めつらしきこと也鹿は鶴よりも長壽也と聞にかく死するといふは人に畜るゝ故なるへし

○廿一日 くもり少々雨ふる けふよりは別段七日を精進に勿論酒なしよつてきのふは紀州より到來の忍冬酒をのみて書物をしたりひるより晩かたまでによほと書たりけふ右を分を追々に遣したり我らの書たるものを額になし或はかけ物などにとて所々より被望も 公儀御恩也惣年寄以下のものは御筆願ひても不苦やと與力共を以內慮伺たりこれは身分ちかふ故に御筆願ふは恐多との故也

○廿二日 晴 八時頃俄に風おとし來ければおさと共にて庭に出てみるに日は照なからわかくさ山のうくひすの墳といふ所に一むらのくもあり春日山ははや雨にちけふりのうちにあるかことくさほ山のみ見寺の塔のわたりより一道の彩虹南北に棚引て畫とも何ともいふへからすおさとみるうちに雨ふりたる所なるへし南のかた銀のことくにひかりて奇景い

ふへからす其うちに雨ふり來りてよほと夕立と成たり雷は至る少也かゝること江戸の人々とみはおもしろかるへし

○廿三日 晴 七十四度より八十六度迄のあつさ也けふは月並の講釋也○例の穢多練革の小手をつくり來れり手の甲其外共によほとよく出來たり何卒革にてわか着用を六十二間の筋胃作りたしとひたすら願ふ也なれ共六十二間の筋胃といふものは信家等が鍛せしものち早乙女一類にまれによく出來たるありて其余はみるへからすよつて二百年はかり其職絶たりしを明珍宗保みねいたく歎きて段々工夫をこらし終に三作のことくに出來たりされ共當時の悴なにも六十二間はゆるさゝりし也しかるをはしめての人などになかゝ出來へきにあらずと其旨よく申聞遣たり此職人ふち頭其外鏝等追々に巧妙をつくす也可惜江戸にて人にもまれさること

○廿四日 涼氣也當年を暑威も大にくしけたり此躰ならばよかるへし○

左太夫殿々御文通あり大にこゝろよしとの御事也しかし御手蹟なとに
はさしてとも不相見候池田よりも書狀來る其追書之趣にあらは四五年もか
ゝり可申哉も難計とありよつて右之書狀御ふくみに母上様へ入御覽候御
代官は早く歸したしと申遣候

○廿五日 雨ふる 新涼もおさと少々ける／＼也この節魚なし漸玉子は
かり也一ツ十八文位也

○廿六日 はれ あつし都筑より書狀來る大津邊其外水場等作から大出
來也しかし米直段は八十九匁位也と也○おさとける／＼よしわれ号けて
女の零分といふ

○廿七日 くもり 八十八度之暑也御用日白洲に出る○きのふは夕かた
より御隠居所之御馳走あり廿六夜まちといふこと也よつて精進を落て酒
のみたり酒給るならばとおもひて御隠宅に不被召以前に人のたのみし六
枚屏風を書たり雪月花の詩歌二枚ツ、書たり右に付薬として酒用ひむと

せしに夕かた被召前に酒はよしくるゝ様と之御事故に大猪口三ツにて右
之書を書たり御隠居所御召にては小猪口五ツはかりのみて歸りて寐し也
夜九半過位に女共來りて廿六日夜の月今に出むとするよし故におさと市
三郎共に庭の築山へ行みしにわかき山の上鶯のみさゝきのほとりより
段々と麓へかけて大松火ふりて數千の人のほる也みしことはなけれ共夜
軍のことし程もなくわかき山の上しらむころにみな其松火は下りたり
やかてわかき山の上へ銀を以造れる船のことくに廿六夜の月さしのほ
りたりこのわかき山といふは春日野のうちむさし野といふ所にある春
日山のうち也芝のみにてよき山也山城邊みわたすなり山へ松火をつけし
けしき又別段也却る江戸にてはかゝる廿六夜はなき也

ともしさす昔かくやとしのはるゝわかき山の松の火のかけ
○廿八日 くもり あつしきのふ夜中大雷大雨也二時はかりふりたり井
戸は二尺余泉水は六七寸の水まし也雷はよほとこの事也地へ響こと甚敷電

光ひることく成しおさと大にはりたり今朝綿のことく成居しか四過より勢ひ出て自ラかみをゆひ浴なしたり

○廿九日 くもり きのふ古梅園の縁者和州添上郡柏木村利介といふものゝ田にて一昨夜雷獸を捕たるをきのふ古梅園のかたへもち來りしか近邊のもの集來りてこまりければ興福寺の勸佛所へもち行てみせしといふこと故に我もみたし人にもみせむとてとりよせしにおりふし雷氣ありければ一覽中雲にがして飛去ことなとありてはならずといひしに一旦鏃にてうたれ氣絶せしか蘇生したるにて氣遣しなしとてほとなくもち來れり大成箱に入ふとき細引をつけてあり大サ狐位もあるへし顔とかりて爪するとかく手足のかたちもくちも少し類せり毛はくろくして白きさしけありあしけの馬のことく白くくまとりたることきところもあり何分雷獸といふものとはみえず穩順なるものにてしはしの間も土を穿ち穴を掘るかこときことをする也馬琴か麻布マミ穴の證にいひしモミといふ者の

圖に似たり家來も誰もしるものなしよくみれば狸に類する所もある也民藏か國にてマミ狸といふものをみしかこれに似たりといふ也大雷後田の中に居て誤て雷公の名を僭せしもしるへからす何分雷獸には穩なるものもモミマミ同音にてかのもみ狸なるへし○けふの吟味物のうちに十三歳なる入墨ものゝ再犯あり乞食より給物に困らぬ故に盜するといふ也尤なる事也寄場なきにはこまる也

○卅日 晴 ならに不行跡のものありて親より申立て入牢になりたり其ものゝ煩ふ故に出牢させむとせしに親不承知にて其子牢内にて果たり親の子をおもふたれも同じしかるに子の死するを喜ふといふにいたる其子の惡敷故也愛する子の死をいとはぬといふも親のめくみのうち也よき人なれば死すれば他人までの歎くにこゝろ一よりかくなる也孔明五丈原へ出陣するといふくたりは人々おもしろからすこれ孔明のよき人故なれば也助のすくなきは親戚も背き助多きは天下も隨ふとは確言也みな己か心

一ツより也可恐

○八月朔日 雨 月並なし八朔の禮受ること例のことし○表々居間に而用人給人近習中小性夫を儒者醫者田村與助まで禮を受る夫を古梅園菊やの類出る一旦給人出てふす間を立て出入を惣町人共をくり込て又からかみを開て御出入町人共と披露する夫を小書院へ通かけ藤木美作といふ神職出入を廉にて間を間にて禮あり夫を小書院に而重立候町人共并御貸附懸り町人共を禮受る畢を大書院に出る與力二を間同心は三を間也いづれも獨禮也畢を玄關之間へ郷同心共一同出る玄關の板廊下に立居れば郷同心共と給人披露也夫を立もとり大書院に着坐惣年寄町代共差引給人披露にてなら市人并近廻を百姓共を内重立候もの等追々落椽に出る畢を引かけ立なからなら坂の穢多頭白洲に出て禮をいふ也

○二日 大雨 きのふは例を通御兩親様へ酒奉るこれ五節句の例也われ

はしはし其席に居て酒の小猪口六ツ七ツはかりのみて坐敷へ行て書を書居たり父上の女共御相手に而例の五禽の戯をなさるゝ也ならにては門外へ容易に御出もならずこゝに三四年此上居たらむには壽命に拘るとの御意故にせめとも御事とかゝることをは賞し奉りぬること也筆をおさめてもいまた興にいりておはしましぬ七旬にならせらるれと御壯年のことし恐悦の御事也けふ人のもとより謝疊山の評ある新刻の詩集きたるおもしろければ表へ行てそれを二十枚はかりみしころ御酒はすみたりかゝるときに 行道院さまのわか御取立になりしを一目も御覽なかりしを哀しくおもひてしらす貞にて過れともいつしかと涙出るにはこまる也わか生れし日より彌吉をくゝとて神佛其外へまで御心つくされて一目も御覽なきはいかなることによかなしき事也

○三日 くもり又雨 八十三度也當年の天氣はある有驗の行者にこしのいたみをいのりもらひし人のあまりにしるしありてうしろへのりいの

り過ては前へいのりかへし又過てはうしろへもとせしといふはなしのこ
とくはれをいのり又雨をいのり又このけしきにては晴をいのるなるへし
このあつさにては米は江戸も秋果ての後凡相場定り大玉より直段あかり
はるまでには四十兩以上となるへししかし寒中極寒なれば下落すへし
○四日 晴 御用日きのふ俊藏春日へ行しに三笠山のふもとむさし野と
いふ茶店の脇に親猿二疋にて小さるを數疋つれ來りて遊はせ居たり小
るよろこひて細き木のうらへ上りゆすふりて動く力をかりて遠き枝へう
つりなとしていろく戯しと也西瓜の皮をやれば木より下りて人を去こ
と四五間はかりなる所にて食ふ子ともよりていろくの物をやるにそは
へ行は木へかけ上る樹上を走ること平地のことしおもしろきこと也と也
樹上にて嘯なくも漸にかけすといふ鳥位也と也元來日本のは猿にはあら
す猴也全に猿の字にあたるものは蜀の巫峽などにてものかなしく鳴もの
にて大に日のもととのさるとはこと也それを歌にも古今集にさる巫峽にな

くといふ歌あるかはしめにて梵語によりてましらとよむ也日のもとには
合はぬ也この頃はや鹿鳴はしめたり鹿の鳴はしむると秋けしき一際につ
く也可笑ことは鹿に金玉といふものはるなつはなきかことし秋彼岸前後
に尾を交ゆる故に其ころになると金玉をふらくとしてあるく也陰莖の
大きくなるは聞へたれ共金玉の大きくなる不審也易に豮豕牙吉といふこ
とありこれらもきん玉をとりたる豕にてさかることをせすをとなしくな
りしなるへし西洋の馬蝦夷の犬いづれもきん玉の玉をとる也さすれば淫
情なく至_てをとなしと也人はいかゝ呵々
○五日 晴 八十八度之暑となりし也○きのふいか成ことか午後頻に酒
のみたく成たりよつておさとへ申して酒一合あたゝめて豆腐十きはか
り水へ浮めて其をさかなにてはつかに五口はかりにのみたりさかなし
といふ故に北條家は天下の執權たりし時寐酒にさかなかりしかはひる
の食残しのみそありしかといひて自らさかし出して夫をさかなにせられ

しにあらすや豆腐五六きれ大なる奢侈なるへしとて笑ければ天下の執政側
に遣ふ人なきにあらす自ラみそを尋ねしといふ可疑といふ故になるほ
としかり乍去詩の葛覃の詩は文王の御臺所の御作と申に葛を織て衣につ
くり其あかのつきたるをあらひすゝきて里へ歸りて父母に逢時のはれき
にせむとあり聖人も周南召南は書の二典三謨のことくにのたまひしもの
なれば偽はあるまじきなれ共それを以みればこれらも偽のことし門内の
ことは衣に違ふといへ共儉なるかたに隨ふへしと孔夫子の仰られしこと
は論語にみえたればわれかことも人は何といふ共身にとり人に對せぬこ
とは構はぬとて笑ひし也

○六日 晴 朝夕は冷氣に成たり○吉野山に北畠殿の自筆といふ職原抄
ありある儒者など其事を詩に作り板行にせしもみし也職原抄はかの公王
朝の再び振ふまじきことを歎きて大内裏の百官といふものはかく也とて
天下後世に示されたる難有書故にわれこのみてよむ也乍去職原抄と号ら

れしは後世のことのことく成に無覺束事とおもひて一覽のことを吉野へ
いひたれ共巡見の時みせしはかりに而寺外へは斷也今度開帳願に寄屢々
衆徒らか出る故に一夜みたしといひしにもち來れり昨日より今朝へかけ
校合にかゝりたるに年古き寫本には無相違よきこともあり誤も多し其内
異本には云々などいふことあれは疑ひもなく後人の書也乍去世にあるも
のと異なる所も多ある也めつらしき書也儒といふ号あるものは日本の書
目などはしりたき事也

○七日 東風にあつし 昨夜は四ツ頃に庭の山へあかりみるに風頸し
て蚊居らす兩國の船のすゝみのことし○このほとたかいひ出しけむ殿中
にて備前とか因州とか土佐とかの内には酒井左衛門尉と口論して酒井は
被殺とのかを専いふ也與力らかはなしにては大坂を其ことの飛脚矢を
つくことに日々通ふといふ評判也よもや偽の風聞を一犬虚に吠て千犬實
をつたふるなるへししかし何かいやなること也

幸三郎別條
なしや久々
たかりにし
いか不快なら
すやなとら
々々事居る日
故案の夢を
三郎の夢を
みる也

○八日 雨大風也 穢多のはなしに大夫の三弦の皮などにするには大坂
 并なら等市中の猫の革ならては用ひにならず五畿内の皮はよき内に在方
 は十分ならず市中のよき所の猫ならては精品にはならずなら市中の猫の
 死せしは金百疋以上之通行也犬の皮にてしないのみち革などにはなる也
 よつて穢多共犬猫をぬすみて御仕置になる分も不少なり○ならはかつけ
 被行也牢内之もの共十人の七人まではかつけにてはるゝ也此節尤かつけ
 多し少々なからけむ誠一なとかつてにて少々はれたり元來予にかつけの
 症あれ共終にいま迄かつけの症なし此ほとに至り薬の効と手當によるこ
 とをしる也かつけの症あらは麥をくひあつきをさいとして美食を少しも
 せず大承氣湯をのめは七日のうちには快氣する也痼症かつけ中氣大に異な
 るものにてみな筋に子細あるものゝ煩こと也疝の類またしかり醫はいか
 ゝいふかしらねとも筋をもみためしみるにみなしかり虫齒などいふこと
 みな筋に疾ありてめぐりよからぬかたの齒自然と口熱にてむれくさる也

けむを醫者
 に今日みせ
 たり腫れ少
 なし生れつ
 きにふと
 なる病に
 不無治と
 には相成
 一候大症
 に出候と
 中事勤日
 之也

よくふく中の筋をもみて虫齒へひゝくものあり虫のことくいふは
 大なる誤也

○九日 風雨夜はれ 昨夜かゝや助藏歸りたると之注進あり今朝學問所
 の俊藏出る助藏前を通りたれば立よりて江戸のたよりを聞しに新右衛門
 方に参り目通をもいたし被下物料理等丁寧也とていたく恐入る禮を述て
 六百年以上之唐墨をみしことを難有かり且驚てはなしたりと也いづれも
 様御機嫌よくとの事恐悦太郎助藏に逢汝はならのぢゝか方のものか坊は
 かくをとなしゝよく傳へよ物たうへよとていろゝ世話したり六ツ七ツ
 はかりにみゆるとのはなし也との事也助藏殊に難有かりたるとの事也同
 人話に道中一日も雨なく大井河を馬に乗ながら越來りたるとの事也酒井
 と備前傷刃のはなしは無跡形義にて道中上方近くなりて所々に其こと
 をいふものありし也乍去江戸より來りたれば空言をいふものもあればあ
 るとおもひて過しといふ也右を以おもへは大坂などをいそきて通行せし

飛脚などありて流言せしなるへし

○十日 はれ 大にあつしそめ久々不快なりしかけふ快氣せしとて參れりよほとやせたり以前のそめにあらず段々聞みるに全かむ症もおさと、同じ皆氣より起る也其源はよく氣の附實意ありて人にわるくいはれましとするより氣にこりを生し氣血不めぐりになりて筋へこる病也馬鹿不法もの惡物になき病也三十四五以上の女四十より五十以上の男にみなある也こゝに一ツの稽古ありて天道まかせにしてこゝろに樂むといふことを知ることはならずとも知るへしと少しにてもおもへはこの病なし女はともかくも男にありては君子の一欠はつる所也新右衛門など既に其としになりぬこゝろし給ふへし初學は先欲を減すへくとおもふにはしまるか也この欲錢金にはかきらす錢金は小事也扱又人々貪着すること尤惡し人に不拘己かこゝろによきとおもふことは養ひて失はす惡敷とおもふことは捨るやうにするか也われこの程初る工夫あり中々しるされず初學のこと

故少々わかりたらはしるすへし明珍宗保など君子にてこの病ひにて早く死せしか也可惜からたも弱かりし也

○十一日 晴又雨 御用日白洲に出る此ほと公事大に減す公事方盜賊方と與力同心わかり居る也盜賊方は例の喜久右衛門頭取にて三人ありいづれ共達者にする也召捕もの四五日内に伺書案をみする即刻一覽いたし遣す三四日之内に清書進達といふわけ故に牢内之菜用といふことなく食物大に減したり盆に遣す素麵三分一になりしにておもふへし

○十二日 雨 冷氣也きのふ夜に入る御用狀來る先以いつ方も病人なく一同無異と之義目出度御事也其内 母上様殊によろしくと相見御手跡御若やき被成候上もなき夫婦之喜に御座候中元其外惣年寄之届物等御丁寧に被仰越候恐入奉畏候其内心に懸り候は幸三郎より久敷文通なしかれば私より又一段弱し病氣には無之候哉と存居候處此たひのたよりも文通なし等閑の事ならは却るよろしく候不快には無之哉至る案事候義に御座候

幸三郎の事
獻上物之節
はよく世話
して其のち
れはくれば
の事も叱る
にあらず也
案事る也

よつてしはく此ほと夢にみる也夢は心懸り之所よりみるにて夫を案事はいたし不申候文通なきも宜候いかゝにや御序に事實御申越可被下候予と新右衛門は相類したる十人並之内弱きかたの人也幸三郎は又一段弱く其上度々危急之病氣有之候故此ほと類に其ことを案し居候いかにや候いつ方も申し參らす候序に云助藏新右衛門之目通りいたし歸り來りわか弟と聞しにわれと同年輩にみゆ實の弟か義弟かと内々家内に聞しと也新右衛門御用多にて機密の事に預ること多し機密の事に預る程の躰軀の毒なし伊能か話に亂世の一番やりをいく度にも碎きてくるしむか治世のよき給人と也その話のことくいのかかけにやゝ可准事に屢逢故にこゝろいたむ也いたむ故につかれ生する也御用心あるへし食養生あるへし酒色勿論の事ながら藥食の類不多食の類みな可然候石川左近將監の教を兼る守居候る四十歳の時より御存知のことく雞卵ならば二ツあひるの卵ならば一ツ宛湯にして毎朝給候左近將監此事生涯つとめしと聞也功ありて元氣を養

ふ也新右衛門にも御はしめあるへし養生は禮を以國を治むるかことく一向にきゝめなくして數年の後大に効あり藥は刑を以國を治むるかことし即効ありて却る品に寄用ひ候害ある也去年は家來菊をつくり當年はつくらす地を同じくし種を同じくしてことしは更に去年のかけもなし天數ありといへ共人事による也數はかすといふ字也ましも減も人によりてなる也天賦の動かすへからざるは親の譲りかねのことし子の善惡によりて同じし金高にても大に追る相違する也孟子天命の動かすへからざることを專に教へて命をせるものは巖墻のもとに不立といひたり高石かけ土塚の下などは用心して通らぬといふまでに用心するを以命を知る人といふ也天徳をわれに生す桓魋それわれをいかむと迄に動玉はす夫にても微服して宋を過たまへりよく天命をしりしを以用心に國亡ひすと卑諺にいひしなるへし御奉公人就中躰軀か大事也養生は忠と孝との内朝夕第一の品也朱文公全集人に答ふる書に

病中不宜思慮。凡百可且一切放下。專以存心養氣爲務。但加跌靜坐。目視鼻端。注心臍腹之下。久自溫暖。卽漸見効功矣。

とありこれ藥にあらす養ひ方の證據也久とあり漸とあり卽効をみへからす○母上様の日中なとに亦も少も御弱りなく御氣根別段也との御事恐悦也われらは夫程には不參夏は足より恭くつれ冬は手よりくつるゝとおもひて常にこゝろすれ共とかく暑中には袴をまくり立ひさなとして困る也母上様御長壽の効ことにあらはる恐悦之御事也○太郎多辯に亦俗才彰常よりあるかことしと一難義也よく御教可被下候みな身を亡すの道具也過日人の詩の和韻にかのかたくて詩にはならねとかく賦し申候

莫望舉兒有才氣。誰知才氣不如癡。君看多少危亡事。才氣爲憂豈可疑。才氣かくのこくとく藝又かくの如しこゝろ一ツの間違にて藝は高慢の道具になりて人にまさるほと害也盜賊の強きかたりの智惠多きみな身を大造に亡す也太郎も彰常に似たりやと喜居しに多辯祖父に似てわるき血筋を

引しかとわか身にはつる也楊素か父死せぬとするとき舌を出させ切りて血をとりこれをつゝしめといひしことあり可恐可戒これ太郎の戒にあらずわか卽戒をしるす○清書御一覽御賞譽忝候溢美實に過て却亦汗顔也わかする人の内に亦親族の外深切にあしきことをおもふまゝにいひくれ候人友野霞舟先生なりこの人にあまり虚言の謔言なし儒といひわか幼年の節より教をうけし人なるへし忝なき事也よく被參候は禮を申候て喜びて新右衛門に迄も吹聴したりと御申給はるへく候○日記之内林鏡藏参り候亦學問はなし有之候由此人才短して直なる所あり其上にいろゝの目に逢たれば學文進みしなるへし月々によひ候亦物語御聞可被成候明の周道通か書之内にも書物をよみ候亦友をあつめて論する方益多しとて於朋友不能一時相離若得朋友講習。則此志纔精健濶大。

とありまして林鏡は新右衛門の官途にては御弟子なれ共學文にては隨分と師とするとも苦からし尊みて教を乞あしきことをいひもらふことゝ可

被成候學文の事を聞益を得たりといふにて新右衛門の心進しかと大に喜ふ也予に心なきときはいかなる益友のいふことにて一向不分或は驕滿の氣あれはいさめをいとふにいたる畢竟新右衛門常につゝしむ故にかゝることも氣のつく也可賞事也右に付わか後悔のうたあり左に記すあらそふ友あらは道にいるもはやからめ我あしきこといひ教ふる人あらまほしなと思ひけるか又おもひかへせはよきとあしきのけしめをまれゝにしりつゝも身に行なふことのなきはわれとわかこゝろのいさめにそむけるにてかゝれはよき友の常にいひ教ふるも多かりけむをこゝろはなれたるまゝによくも聞候てすき行ならむとみつからいまして

しけり行おのかあさちに中垣を友の隔つとおもひけるかな

流れぬとしるをたよりに難波かたあしかり小船引かへさなむ

とよみしことあり君子の辭は婉曲にして意深く迂なることくにて深けれはわれらかことき能なるものには折角の深切にていひくれしを一向にし

らす過すこと多くたまゝは三年も立てあれはこの意なりけりと深く後悔することのありてかくはよみし也○めつらしき御吟味物可然凡相濟候様子よろしくと存候○助藏十九日參り候由右は前の日記にしるす通也この外難有かりたり羽倉は予より一挺唐墨製を遣したりしに大に賞し佐藤捨藏よりは六十挺あつらへあり唐製のかた新右衛門の遣ひ試いかゝ○詩作之事に付御論御尤也承服々々これは才短かく字を遣ひ廻すことのならぬくせに數年いろゝのことを聞たれば工夫は少々附故にたとへは瘦馬の重荷を附たることくにてすらゝとは歩行の出來ぬ也近くいへは銘人の詩歌は寺社奉行衆の御馳走のことく也我らか詩歌は貧人の御馳走也七りむを十文字にあふきたて臺所の下女中を飛て歩行中には主人かけあるきても間に不合甚敷はかり物にことをかきて灰ふきはし立とし事をしらねはしひむにつゆをいれて出す故にいけそうゝ敷のみにてみる人へドを吐にいたる也○江戸より文通之内松平土佐守病氣大切に付 上

使として酒井某を被遣たるよしみゆその譯故に土州の急飛脚しはく大坂を往來して終に酒井左衛門尉及傷の沙汰になら市中へ傳へしなるへし風聞の誤可恐々々

○十三日 くもり 夜月よろし例き通潔齋を十二日までに取越したりこれ月の爲也きのふは夜にいたりて大雨にて風もつよし六半時頃今朝までふりつゝきたりめつらしく泉水漲れり夕方にいたり所々の橋落たるよし注進あり木津川満水のよしわたしとまるきつ川は古代には戦をいとみたるとのことにていとみ川と申せしを万葉の頃よりいつみ川といふ也玉河位の河也よきけしきの所也○けふ出入之醫師勝南院宮内かもとより酒遣したる返禮にうなきをくれたり俊藏はうなきを焼こと銘人也夕かた來りて焼たり大うなきにて江戸の極大くしといふもの也市三郎おさと予三人にて七串くひたり江戸の最上品のうなき也やきたてを即坐に食しは數十年ふりのこゝろする也俊藏のうなきのやきかた江戸にもめつらしきとい

ふへき位故に奈良などにははなしにもなし此宮内といふ醫美食家にていろく六ヶ敷ことをいひ酒も改而製さするといふ位の男也御門主に被召けるにこの酒のめすわか宅の酒を御振舞にすへしとてとりよせて我らにもませしにて其余知るへし奈良第一のはやり醫の豪傑也この男に俊藏藥代かはりにうなきをやきて遣したるに其絶妙に感して翌日傳授を受けて以來うなきのことは俊藏か門弟子たらむことを乞ひしとは大笑也大笑に付大笑あり友野先生より被贈し文章のうち名妓夕霧のことし給ひしありけふならの儒員にみせしに文章を感していろく評しこのセキムといふ人はいつかたの人やといふ故に先生しらすや夕きり伊左衛門をといひしにいや左様に苗字など名乗るものにあらず名妓とあれば遊女なるへしといふ故にそは人のしる梨園演戲のものにある名妓也といひしになるほとく草双昏などにて幼年の頃其名は識たれ共いまた其詳なることを得すといひし也風流レテ八人藝スとは季子か八僧之類かといひしと同

し論にていつくの世にか聖なからむ也この人これ故今日まで門外のうは
さ人のことを爪ほともいひしことなし御門主の御意をたまさか傳ふか漸
也儒員には却あよし君子也

○十四日 晴 一昨日之風雨よほとのこととみえ所々にあ小家潰壓死のも
のあり今朝を九ツ時迄に届來るもの七人也其内に夫婦に倅にあ老父は三
年の大病にあ夫は無事にあ却あ妻と倅と死せしありのこりしものはなか
く死なぬを只うらみ居なるへし所々の檢使を出す御役所にあも惣圍
の土手上之大松根返りして給人長屋を危くかすりて倒たり長十間はかり
にあ八尺廻り之木也もしやこの木長屋に倒しならば怪我人あるへきに天
幸也

○十五日 晴 月並の禮受ること例の如し○きのふ追々に奉行所は届出
し分家潰壓死のもの九ヶ所にあ十一人也奉行所は届出ぬも多かりしと
おもふ也出水にて水死せしも多しといふなれ共届はなし興福寺境内に

秦の長城石
のこくと
あ数千に
となきこ
人の西行
にて西行
の支那に
記しあり
稱しあり

大松倒れて土塀へ倒かゝりしに屋根はくつれたれ共土塀には少しも事な
しかゝる土に城の塀を作りたきもの也第一何百年を経ても塀の修復に
錢いらぬ也興福寺の土塀は伊豆みかけにあつくれるかことくにみゆる也
さし鍋にさけあたゝめてにしうもをつきしろひつゝ月をみるかな
さし鍋といふもの万葉にみゆ和名抄に銚子をさしなへとよみたれは今の
爛なへなるへしさし鍋にゆをわかつて狐にかけよといふ歌あれは今の銚
子ともみえねとも銚の温器といへは可成に今の爛鍋としてもよかるへし
官家にあは瓶子を以さかもりする也關東にいふみきどくり也宮方にて今
なほしかり彼鹿谷にて俊寛か瓶子を平氏といひし躰にあこの頃も酒もり
にもちひしをしるへし 將軍家に何故御銚子はかりにて御式に瓶子なき
や爛鍋といふものにて御式をも被爲濟は御質素を用られしものか足利家
の式なとはいかに有けむかゝることならに問人なきに毎度こまる也芋の
こと万葉にうもとよみたれ共和名抄にはいもとあれはいもといふも可な

らむか千蔭はいもの誤字なるへしといひし也つきしろひの辭万葉の貧窮問答のうちのみゆ今のつゝきやひてくふといふ類なるへし○只今とり立の青さき也とてもて來れり六夕也江戸ならば月見といひ旁三分もすへしまた温也といふこと故六夕のおこりをして前のうたの如くには參らさりし也このほと芝地の萩さかり也この芝原にて三笠山の月みなから母上も新右衛門等もあらはいかに酒のうまかるへきに

○十六日 くもり又晴 きのふ晴と記せしは朝四前のことにて夫を段々くもり七ツ時頃より雨ふりてよもすから雨也御兩親様の御酒奉る八月十五日に限りゐは千里晴雨を同じくすといへともいかゝやと五雜俎にあれ共十五日にても山一ツ越れば必晴雨同しからさるへし昨夜は江戸はいかゝ○肥前の大潮和尚と江戸の人十五夜の詩を賦せしに晴雨同夜ことなるかありしかと覺へしか忘れたり○先達而陰莖をまらといふことたま家のまねを申せしかふと又おもふに日本記送糞此云俱蘇摩屢されはまるとい

ふるき物語
ふみに女も
まろといふ
ことあれは
先達の考を
く改し也

ふこと古言也今幼年ものなと洩器の類をかはいふは御廁ヤカハの略なるへけれと御まるといふは大小便をする故御まるの器といふことなるへしまらもさしていはず小便をまる所といふをまるとはかりいひラリルレロの轉にてまらといふなるへしきそ山の奥にて子供女の陰門をヲヘンシヨといふ也御便所ナルヘシ江戸などにてヲメコは則ヲメツチヨのつまりしにて御便所の轉かとおもふ也それに引くらへおもへはマラはマリ所の轉たること凡にするへし前の解より此かたまされるか也ある人の説にさか銚と陰莖をなつけしはものを突先に用あるものに上より下にさかり居るは陰莖に限れりよつてさか銚といふ也その銚の古言今尙存するもの小兒にチンホコといふ小銚の意也小をちむといふはちんころのマのことしといひしかいかゝあるへしや小をちむといふは解すへからす小犬にチンといふもあれは小の義ともなしかたしされ共チイサホコといはむには強言にもあらし談及猥雑いかゝ

○十七日 雨 けふも此躰にては月いかゝあるへしや昨夜くもの絶間よりてらゝと光みえたればよろこひて庭へ出てしは山より芝間など歩行せしはかり也中秋にかく月のなきはなさけなきこと也このほと庭の虫の音よし月あれば鹿といひ虫といひものさひしきのかきりなれ共いつれとして詩歌を催さぬはなき也○けふは朝五前より剛雨大雷にて書物の上へいくたひか電光のきらゝとして書をもみかねし位也しかし十町内外へ落しとはおもはず烈敷かりしか光よりしはしつゝありて鳴し也○けふは御目付衆例年之通御役所被參るゝ也已前は御馳走のありしことよし今は御改革已來事きたる事にて吸物一ツ飯菓子中酒肴も附に三種也やき物は鯛にて奉行みつから引古格也こゝにては興力に甲冑いはひの時焼物を用人引こと也いにしへ兼松又四郎とかいひし御持か御先手の頭ありしか甲冑祝のやき物を興力之分は必みつからひきしといへは焼物は相互の所にては必主人引しなるへし今も上野にて臺引は寺社奉行上野

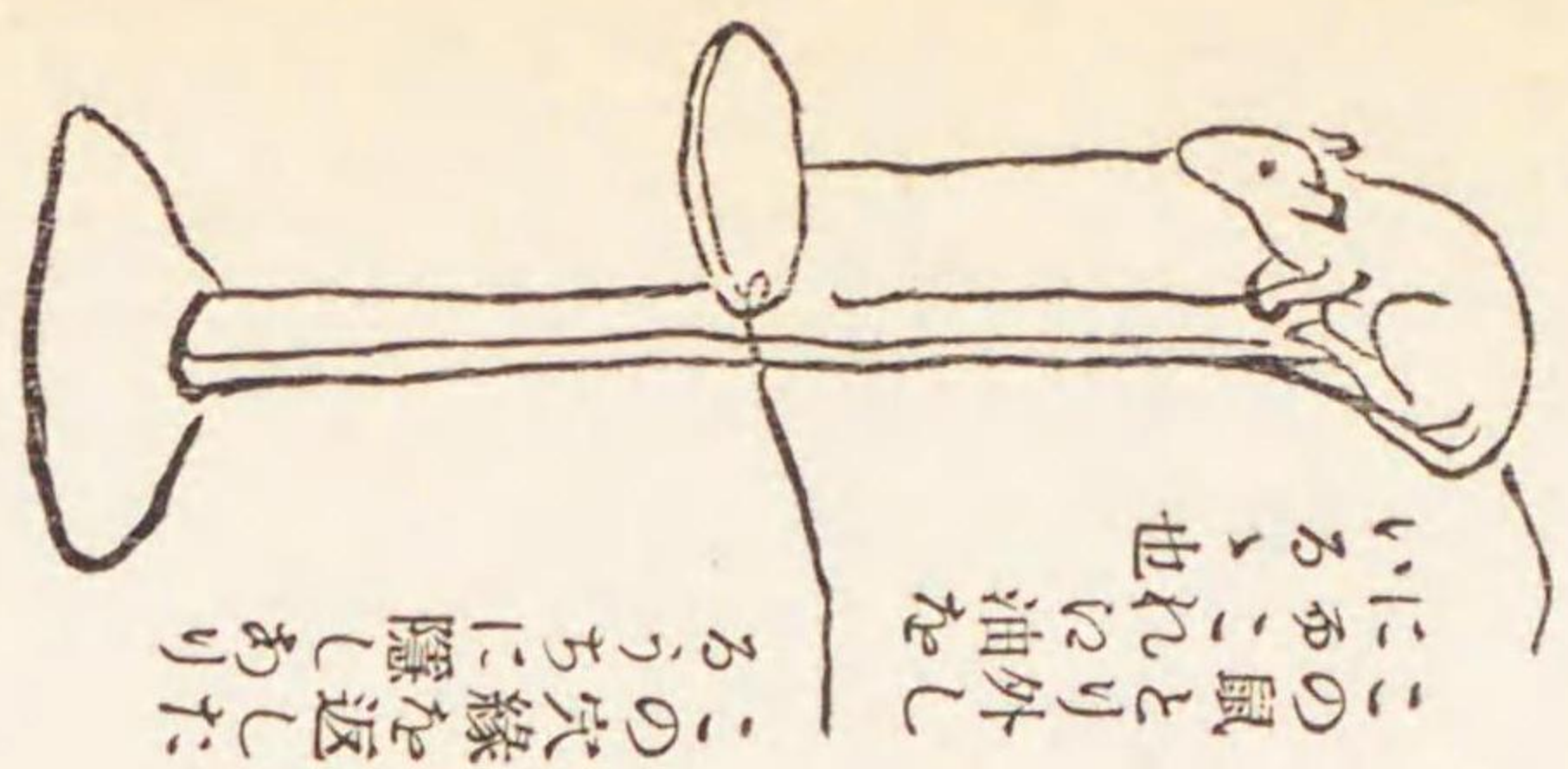
畫に認めし三人
 卷あけしよし
 共烟に居れよ
 百姓の子と
 都火事也
 卷上附し
 也併別條なし
 しと云

の時は坊官引也されはやき物の類給士の士にまかせぬことなるへし
 ○十八日 晴 され共村くも多し月いかゝあるへき今夜月みねは中秋は月に逢かたき也○きのふ京都の用達來るこの七月に京地にて龍の昇天せしといふかいかにととひしにあつてよくはれし日に俄かせふき來り無間も火事よゝとて人々騒ぐ故に屋根へのほりみしに千本通りより東へかけて黒けふり立のほりたること夥しく其内に水をまくかときけしきありいつくなるらむといふうちに其けふり立のほりて中天に横たはりさまもとは段々と細く先はひらきて晝にかける龍のほる通也其くもの通りしところは泉水も何も水なくなりたりやねをやふりしは更にもいはす飼とりを捲あけ人をも捲あけてけしからさること也と也はしめは松平伊賀守殿之京の下やしきより起りしよし也右をけふりのこときものうちにておりゝ光を放てしと也○けふ在方に出役せし興力歸る十三日の荒をきゝしに在方は夥しきことにて其夜立田に居しに河原ことの外に光りて

土民共甚恐れたることも也その翌日漸に川越同前の躰にて出立せしか高きよりみれば初瀬川近邊都海のことにて渺々たる躰なりしとかたりき京都へ行みちは木津川の堤きれて玉水邊は天井迄水とゞきふしみの大池よりならのかたへ大船にて人の旅行せしと御目付のかたられきわれならより京へ行みるに木津川より伏見までの間大池近邊小くらつゝみといふあたりは五六里四方みなよと川と木津川の縦横にあるきてふけ地なるを御世のひらくるに隨ひて今のことく繁昌せしか也近くおもふに建場の村々を長池新田玉水もとはたなまり水かといふにても以前の水地なることはしるゝ也其上に今も大池は一里余のもの也これは田畑年々に潰るゝ也伏見の御城を豊臣殿下の御築の時淀川の水行を改られし故に退水するといふ也今も古川敷存せり度々往來のたびに故川の水をもとしたらば國役あるへきともふ地也○大坂も出水にて芝居のある邊は床上へ水あかりしといふ也ならは水の患は更になき地に而東風にてよくあるゝ地なるに東にかすか山あ

れは風を隔つることゝみえたり火事なし水なし地震なきかことし三年之内に家の動たるとおもふことなしよき地也いにしへの都おもふへき事也○十八日 くもり又晴 きのふくれ六時より訴訟箱受取一覽として御目付の旅宿に參る興福寺の脇みとりの池の邊を通りしに虫頻になくまつ虫すゝ虫多いふへからさる聲也ならは鈴虫まつ虫共に多し穢多共とりて京攝へ出すといふ也こゝにてはチンチロリンといふ方をすゝ虫といひリン／＼といふかたをまつ虫といふ也うたにもいつれともなけれとも琴歌の譜を坐頭か謠ふを聞しにまつ虫の聲リン／＼といふことのありしと覺へしもとよりたしかに穿鑿せしものともいひかたけれと里諺と符合するを以おもへは關東のかた誤なるへし蛙の今さかりになく頃なるに屋敷内になしよつて奈良に蛙居るかといひて聞しによし野金剛山には殊に多しみかさ山にも居るといふ也これは日記に以前記せしと覺へし古今の序に春秋の聲のよきものをあけてはなになく鶯水にすむ蛙と貫之かいひしも

のにて普通の溝のはた田のくろなにかしましくなくものとは大に異なるものにてコマ鳥のなかに似てすぐれたる妙音のあるもの也○淺野中書より初瀬の鼠燈臺をうつしてよといひ越したれば市中の古道具屋などにもあると聞てけふとりよせみしに其意はあれ共かの倣鑿渾不似の類にてもとむべきものにはあらずよつて悉に返したり乍去油のつくるに従ひて鼠の口も水を吐わけはよくしれたり燈臺の棹をうつろにしてねつみと氣を通ふことくになしてきて油さらの半油のへりたるところに鼠と氣の通ふ穴をつくりたるもの也この穴の上まで油あれば氣のこもる故に鼠の口より油を不吐油の減して穴をすくれは氣のもる、故に鼠の口より油を吐て右之穴を越れば又氣塞かる故に油をはかすなる也其わけ水いれの穴の通也順作者附てかくいふ故に其通敷品を改みしにみなしかり巧なるものゝ容易なるもの也元來いにしへは蠟燭といふものなしもろこしよりわたりしなるへし東寺の什物帳蠟燭何挺とかいふをしるせしにてもみるへし



と夏かけ先生の被申たる也曾我の夜討など松火なるおよひみのかさに火をつけたるにてもみるへし挑灯など用ひしよしは信長の北畠殿を被責ところなとにみゆるは其ころはありしなるへけれ共専ラには用ひざるへし今の辻番控書にあやしきものあらは松火をともして云々のケ條あれば江戸の開けても尙辻番所などは松火を用けるか火の用心より段々今の如くなりしなるへしされ共今以大名辻番には松火かけあると人のかたりし也今のことく蠟燭自由にてはいにしへの燈臺など却而不自由なるもの也法隆寺に聖徳太子の夜學燈臺あり團扇のこときものを以風よけをせしもの也中々以今の丸あむとむに下に下さらなど置といふことき辨理なるものにはあらず人はふるきを用ひ器物は新敷を用ひよと書經にある意この燈臺の類にももさて、とおもふ也別而新敷ものならてはならぬといふは武器也武器のいにしへの甲冑太平記頃かの集古十種などにあるはみな捨物也武器の極新工夫の新敷といふは關ヶ原前後の品也太平三百年に近く

尙古之風より武器に役にたぬもの多く被行也可歎こと也

○十九日 晴 夜月よろし五半頃より月見をしたり所々に鹿なきさほ川のほとりにあきぬたの音頻にて三笠山の松を月中にみるけしき絶妙也き
○良右衛門方の男子去年の正月生れなれ共よく物を辨し段々のある所を下りるに遠くより後ろ向になり這ひ下りなどの類驚こと多しきつねむなどをする也至る繪本好に來りておさとに願ひては名所圖繪の畫ときを聞く也一冊畢れば其次の本を出せといふ二冊畢れば指さして戸棚の本を出せといふ也しはらくの間よくすはり居る也何か繪本をみてわからぬことをはなす也きのふみせしをは凡に覺へ居る也女共其ことをいふ故にきのふみつからためしみるに相違なし高き茶臺の繪をみて是は奥にあるもの也といふ位の辨別ありこの勢にて成長せしならはいか成才子になるへしや才子と云にておもふになら抱の侍榮吉十八才也と學才なか／＼ならの儒者などははや既に遠く不及文章にても詩にても達者にするなれ共平日遊

ひ居て一向にせず往々無覺東才子はあれ共出精する人少き也

○廿日 くもり 六十五度迄の冷氣に成當年は彼岸順にては冷氣早きかことし○泉州より呼出し置たる百姓出水を以歸村を願ひ尙又出來れり承れは淀川一丈三尺の水ましにて所々つゝみ切れて一万石はかりの亡所出來たり水屋根までつきし所もあると答たり

○廿一日 くもり 直胤方より文通あり同人このころは京都に居る備前備中に行いにしへのかちのあとを尋ねて備中の山中にて鏡山をみて夫々同所に五十日はかり刀を作りいろ／＼の工夫出來て今までのこと非なるかことく一段の自得ありて少々安心したりといひ越したり上手にて天下一人の鍛冶と成ても出精するものはみなかくの如し別段なること也當年七十歳也刀かちと天下を治むることに拘はる武士と道の深切いつれかまされるとおもへは深くはつる也われ故に一藝に名あるものを好みて江戸にては逢也はづることあることに身の藥と成也

○廿二日 雨 興福寺之境内に小柳荒馬劔山など來りて相撲あり其番附出來て奉行所願もすみたり例のいしや勝南院など金子の百兩も出すといふ也よく聞はまうけあれは少も身につけず興福寺南大門の奉納にするといふ也おもしろきわけ也

○廿三日 くもり又大雨夕晴 月並之講釋あり○落着物十口あり白洲に出る

○廿四日 晴あつし ならのさらし屋のうち豪家を銀三貫目宛奉行所に差出切にいたし度旨願出に付貧人の施し之義伺之通被仰付之依之 公儀より金三百疋被下之別段手もとより紋附上下一具つゝ遣す右に付なら市中施之ために相成候上は自分も町人共之内貧人の金百兩可吳遣旨與力の申渡之いつれとも永續方いたし候様申渡之われいまた借金もあれ共貧人を恵み候様申聞ルといへ共其令下に行届かたければ實に下を恵むころをしらしめたらは下之もの共令に隨ふこともあらむかと金百兩遣した

り元來恪齋家故にいままで七十兩位までのことはなせしか施しにはあらず無余義に出たる也この度は施しに百兩出したりこれみな君の御めくみと親の御恩によりて出来ること也百兩之金少しなれ共奉行か施しを好めは少々宛も町人共も元金は差出し可申左候は永代なら市中に貧人の極窮之もの六七十兩宛は不怠施の可成こととおもひてかくはせし也上の御めくみの末を下へ及ほすとは難有こと也

○廿五日 晴 六十八度の氣候になれり○けふは惣年寄より歸着之届あり
○廿六日 くもり 内膳式に楡皮一千枚壹枚ことに長壹尺五寸廣四寸搗て粉に成して二合と成年中 天子の雜御菜并羹料とするよしみえたりこのにれといふものもみの木に似たるものよし葉も食料になるよし也 天子さへも被召上上は毒などはあらし凶年に松の皮食ふときこの皮など用に立へしいか様なるものにや万葉よるときはもむにれとあれはもみに

似たるものなるへし○九ツ時頃惣年寄之荷物來る其以前よりおさとまちわひし故にそれよといひて珍客の來りし騒也いかにも年中之家來八朔と年始と之便になるなれば一度にとつと大客の來りしことし乍去けふは公事日にて目安夥故に一々にはみす先母上様之御狀奉拜見候處御一同之御機嫌克殊に御健之由恐悅之至に御座候母上之御意御頼に付藝術はひまにいたし酒を猪口に六ツ七ツ迄は必のみ候へと之御事奉畏候此節身も健に候得共乍去保養もいたし候義左に御心やすかるために記し申候朝めくすり齒くすり等用ひ候義としをと候間江戸に一倍まし夫之例之飛はねに御座候畢之塩立にめし二椀に限り候これ空腹ならては身の害と相成候故に御座候四ツ時承氣述附子之内一ふくつゝひるめし三椀灸事背申中かた手足とも都合貳十五ヶ所は毎月七日つゝ此灸數壹ヶ年に三万四千程日々針治四ヶ所宛夜食三椀ツ、壹ヶ月に朔日より七日まで酒たち十一日か十七日まで酒肉は勿論めし香物之外不食廿一日か廿七日まで惣菜にいりし

鯉節のつゆは不厭其外は玉子半づむも不食酒は大成猪口に五ツのみてたにさく五枚を書し又五ツのみて唐昏へ書をしたゝめ申候定式の數にいたれは盃をふせ其余は不飲けふは酒をのみしと御隠居所に聞ゆれば必御寐酒の時めさるゝ也其時三盃を限り其余は不給聞中之天道に之つとめ月に二度或は三度にまれに相成候事有之候得共おさと病身に難澁多く被斷候義あり右之度數に之は翌日市三郎其外と武藝は勿論何事も少もかはらす以上之義青天白日少も僞なしおさと申聞候上しるし候以上之事新右衛門御身へ引くらへ御考あるへし少も僞なし命をしろものは巖牆のもとにたゝすと申候得は人事をつくし候も天命をまち可申譯に付右之如くいたし候得は此上之病氣は天命のなき故にうらみなしと存候何事にもかゝはらす遊ひて氣を屈せず淡然としてたのしむこと最上なれ共學文いまた其味なくして動きてこゝろをくさらせずして病なき様之修行に御座候たとへは戸のさむの朝夕に動かすところは朽ることなしされ共朝夕に動かせは

すれてきるゝにいたる也しかし朽てくさるよりはたもちかた遙によるし
 く候養生は心をいたため候事第一の毒也こゝろ滯は氣血とこほり氣血滯
 れは病と成也常に動きしもの氣の運動する故に煩ひなし其人閑散の役と
 成病を生せぬはいとまれ也これこゝろに氣のつかぬ故也わたくしも四五年
 立候は、何事もせずしてこゝろの泥ます動かぬ位にいたるべくとおもひ
 候得共今はそのかけむいまた出來不申候試に酒をのみ遊ひ候事候ひしか
 放心する也書をかくかたまさる也其翌日の氣根をためしみるに酒のみ遊
 ひしか左は氣根おとれり精進にて灸をすへ酒をのまぬこと氣根のくすり
 也ためしてしりしこと也菜食之内泥鱈うなきの類少々給れば効あるかこ
 とし其余之肉に鹿の温類牛肉鶏肉など少々効あるかことし乍去肉類は養
 ひ過てみな害多し山家之百姓は都の美食のものより長壽なるにて菜食の
 九損一徳なるを知へし右等之通いろゝと工夫いたし候而養生いたし候
 間御安意可被下候新右衛門よくよみ候而御存慮承り度候半点もいつはり

○藤左衛門代料
 分給御申越可
 給御申越可
 ○去年中
 日記早御
 廻し可被下
 候正月御見
 合に御とめ
 置此所よ
 申越可被下
 候

は記し不申僞ありては役に立不申候○新右衛門より夫々の筆被賜千萬忝
 候明後日は酒用ひ申候積に付しるし可申と樂居候義に御座候其内すゝた
 けの筆精選之毫と相見おとろき入候義に御座候○明珍より六枚はり唐人
 かさの胃并面頬參り當時の明珍親におとらす感心候親宗保は彼かうら店
 におりし頃より世話いたし候處天下二百年來之銘人に相成候ひしか病死
 いたし候處彼か目かねにて當時之宗周養子にいたし候丈之手際あらはれ
 て落涙いたし候而宗保かこと民藏とも申候義に御座候○右之通に付養生
 のため此上は夕かた菜園に參り候而たのしみ可申と被存候其上にもこゝ
 ろをやすゝといたし遊ひ候様心附可申候いかに養生いたし候而も壽命
 は別物とは乍申養ひにより大に効有之候義前にも申候通草木にも相分
 候義其上先にも申候通養生は忠孝之一つに御座候

異郷日待家郷信何事開書意慘如知否尋常終夜話纔爲一月數行書
 母述肺肝書數尋共妻拜讀淚難禁初言待我常傷憶終記弄孫纔慰心

信來タヨリ洒シ淚レ信カ無傷ナシ鄉信カ何時不斷腸未發封緘魂忽動看平安字意初康。

右之如くに御座候日記に向ひしるし候間平仄の違ひあるへく候御笑可被下候所々菓子其外來る早速に茶を烹候而給申候○おけいの宿さかり止に相成候由何より目出度と奉存候○所々之御返事等追々しるすへし藤左衛門ヨもよろしく御頼申候

○廿七日 くもり けふ幸三郎か書狀をみるに同人水氣ありと聞けり深案事候右はやはり脚氣なるへしあづきをたうへ候而何分おりくくに大承氣湯桂枝加求附湯之類を醫に問ひて少にしても時候あたり之時のむへきこと也大承氣湯はわか母上へ奉りし厚朴あり右を御用ひあるへし厚朴大黃共に藥やにてよく吟味してきさみにあらぬをもとめてみつからきさみてのみ可被申候脚氣に大承氣湯の効あること雪に湯をそくかことしわれ屢これにて即効あり遠州ましま明眼院に而風眼に用ゆる藥第一は大承氣湯のこときもの也下手いしやのいふことに迷ふへからす大承氣湯に甚

敷効多し本郷菊坂邊と覺たり向田翁齋とかいふ醫ありよき醫也いまた存命ならは行て法を問給ふへしみな腹中のこと也腹柔ならねは大に害ある也○わかこと卦を立被見候由忝候坎下坎上の出しよし左もあるへし彖辭のこくとく成らむことは心亨ル上之ことなるへし六爻共に身におもひあたる也可恐々々尤つゝしみに成忝候○けふは母上より之御意見に付遊ふつもりなれ共さてく考なしよつて日課を減して扱儒者参りたる故に素麵を振舞てしはしはなしをさせ夏蔭より直し濟のうた六百首はかり其外よし野の日記なども一覽濟て來りたれば夫をよみたり八頃になりつき山より泉水を一遍めぐり來れり○けふ學文所メカに又納物をしたたり一部は畜徳録一ツは水戸齊昭卿の御筆の仰て天に忤す俯して人に愧ちすのかけもの也其筐書を儒者へ申付たり學問といふもの目當なければならず夫は卑ク近キことコにあり夫は文公朱先生の教のことしよつて吟味役つともし時誓詞前文丈のつとめをする積にて日々誓詞前文を拜しては登城せし也それは新

右衛門等其外幸三郎等を知る所也其時に御爲第一に奉存御後闇義不仕と申ことを守りかたしとおもひて齊昭卿に其ことの御筆願ひしに仰てはちすの御書被下候御内々藤田虎之介を以御爲第一のはし書ある御歌に御書簡添て玉ひし也よつてとても六ヶ敷事ながら夫をまにてつとめしもしかるにこの國の學校に太田備後守殿のかれし明教館といふ額字の外なしよつて彼不忤を齊昭卿の御書を奉し也右を筐書の大意は不忤云々のこと孟子三樂の一ツ也なか／＼初學のもの、可學にはあらねとも先達を學問所わか書して奉りし文公の語のことく學は卑近にあり其卑近なるもの、たれもよく知るもの心也其心のしるを明々したらは明々徳の場にもいたり不忤云々の語に近かるへきか心のよきとするは成しあしきとするはやめ其工夫を積こと集義なるへし集義の生する所浩然の氣にて浩然の氣則天地にはちさるものなるへきかこゝにいたりて人の微を以天地と並稱するにいたるといふことをわか標的とするといふことを宮書にした

る也おさとにけふはよく遊ひたりといひしにこれも又三日坊主かとして笑ふ也いかゝあるへき市三郎とわれと地かへ候は、母上の御安心此上なるへしとて大に笑ひし也

○廿八日 くもり 至るを冷氣也六十七度時雨めきてはれくもりして山々のもみちを染るけしきとはなれり○けふは朝鱸を目かたにして百匁食せり其内一くしはおさとへ遣したり百目といふは焼て二朱はかりに成か也代料にては生たるにて三百文也○いろ／＼遊ひてたしむ工夫をするに扱々六ヶ敷事也書をよむの類にあらぬ也母上の御工夫一段高き所なるへし明に儒生三百年之内に數千萬人あれ共孔子の廟の配餐をうくるまでになりしは四人と覺たり其人々は薛文正胡居仁陳獻章王陽明なり獻章は白沙と号せり此人の學問なりしは晩年に至り書見をもせず只山水等をたのしみてこゝろを養はれしとか聞此こと明儒學案に詳也されは何事もせず庭へ出ており／＼酒などをのみまことのたのしみをして不流位にいたる

は陳白沙以上の學文に付われらこときのならぬわけ也六ヶ敷事也遊ひたのしみてこゝろに主とするものなきときはわれらの小人は十にしては八九は小人閑居して不善をなすといふにいたる也

○廿九日 晴 奈良の學問所は所持之水戸殿之御自筆仰不忤天俯不愧人といふかけ物納る筈書の大意書をくれよといふ故に斷たれと聞かす無余義しるしみたり學問といふは人倫を明にして天理を知へき爲之様に心得居るこゝにて學問所を明教館と号するも夫を教之明にする所なれば也堯舜の教も人倫をすることを以主とし給ひしなれば人倫をよく知り得たる則天理をしる歟に候其人倫をしるといふは父子有親君臣有義夫婦有別長幼有序朋友有信の五ツにてたれも一わたりは耳に聞なれし事なれ共聊もはちさる様にすることいとくかたきか上のかたき事故海へ船をうかへていつれかのり筋なるへきやと渺々として知られさるかことく迷ふ也よつて目當なければならず其目當といふものはもとよりはかりしられぬこ

となから試に云は、聖人の位なるへし至る高く至る遠きのかきり也其高き遠きはいづくよりか手を下すへしやといへは至る近き至る卑きところにあるか也夫故に先達をしるして學問所は納めし文公朱先生の人に答られしにも

大抵爲學不厭卑近愈近愈卑則工夫愈實而所得愈高遠

なりといはれしかとおもふ也其卑く近きかかきりは何ぞといは、わかこゝろなるへきかわかこゝろにあしきとおもふことは直にやめて殘し置かすよきことおもふことは直になして失はぬ様にするこゝとなるへきかこの二ツの事を朝夕にたえすおこたらすするを明德をあきらかにすとも集義ともいふへき事かとおもふ也其徳を明にし義を集むるうちに先達を學問所は納めし温公通鑑に題せられし資治の字もこの度納むる畜徳録の畜徳の字もおのつ脱カからこもり居る様におもはるゝ也其よきはなしあしきは捨てのこさぬことの功をつみし所のかきりは則仰て天にはちすふして人には

ちすとも可申歟乍去このことは人にもとめす己か知るところより段々と明らかにしてよき筋道へ尋行ことなれば志を立てるときは出来るわけの様におもはるゝ也先年其ことを心附て大久保加賀守殿眞忠御勝手方御老中に亦其御手に屬し御勘定吟味役をつとめ朝夕申こともありけるころなれば先第一に近き誓詞前文のはしめにある御爲第一に奉存少も御後闇義仕間敷といふことを日々に守り申度と其ことを水戸殿にするし給はらむことを乞ひしにこの不忤天不愧人の字をしるして給ひし故夫を的にして日々に御奉公せしなれ共的は遠く手もとほくるひて一日もはつかしからぬころにて勤めしことなく恐入るの限今に同じこと也乍去卑く近くよりして天人に忤愧せざるにいたるといふは誰かのにもなるへき様也親につかふるものはしたしむの字をこゝろにしりしほとは行ひてわすれす天人に忤愧せさらむと欲し君臣の義夫婦の義長幼の序朋友の信いつれも同じ意を以なしなはみちにいるに近し明教の二字のまともなりぬへき歟に付

この書を以明教館の的としてわれも衆人とゝもに其教に従はゝいかに加あらむと明教館の博士佐々木西里にとひたゝしたるに可なるへしとの事故永く明教館に納め候夫弓を引ものは身を正しくするにはしまり大洋をのるものは磁石の針壹本也聖人のみちを學はむとおもふものは事を少くしてこゝろを養ひ靜にして動かさらむことなるへきを予愚にしてしらす的に當らむことをもとむることに心ありて身にもとむることをしらすいたつらにこゝろを動して走りながら弓を引常に動く磁石にて東西をしらむとすることときことを以日をわたり今後悔至極する也この館にいたり講を聞もの靜にしてことを少して心を動かさゝらむことを欲する也右々通下書をつけみしかいまたこゝろに叶はず尙訂正すへしこの語をおしひろめて文章にするといふは儒者大こと也今の古今の序とてかな書は貫之か筆なれ共實は四六文を望淑王のかゝれたる今別に行はるゝ眞字の序の案文かとおもはるゝ也歌よみはかくはいはねとも其頃勅撰などにかな序な

し古今にかきりかな序なるも真とかなの序同意なるか二ツあるも可疑
と也四六文の躰なれははなになく鶯水にすむ蛙といふやうに對語多くあ
るをしらす和文はかく認むるとおもふ人もあるか也真淵もと居らかかく
所は即並々の散文躰也興福寺に相撲あり阿武松劔山小柳あら馬等出るい
なかにめつらしきこと故か見物夥し遅く行たるものはみることならず歸
り來るといふこと也相撲と芝居に限り用人給士也

○九月朔日 晴 此ほと興福寺之相撲大繁昌にて人數一万人はかりもい
りあるといふ也荒馬に小柳の取組殊に大評判也いなか相撲はかり見て其
味をしらす押出すといふは十分之力に而却而投るかた力たらぬといふ意
あるをしらす一六勝負の相撲を是とするもの共なれは劔山の小男をみて
天下の大關いかゝと疑ひ小柳の腹はもしやつくり物かとおもふ位の事に
而荒馬は小柳には決而叶ふましとおもふうちに取組さてみれば互におと

らす其上小柳くものことくになるまでなけられて惣見物驚しと云也

○二日 くもり 二十前年の齒痛再發して今日は大になやめりよつて心
附は四五日已來夜腹をなて筋をもみみるに悉齒ぐき引はること也不思
義におもひ居しにけしからすいたみ出せり即大承氣湯二ふくを用ひ按摩
に所々の筋をもませしに夜に入大に快よしむし齒を蒸と虫の訓を混する
のこともとより論なし腹より肩并襟に引はる筋齒にも引はり居からだの
様子に寄目のかたの筋時候にあたれはやみ目齒に專の筋時候にあたれは
齒いたみたること疑ふへからす齒いたみには内藥專なるへし即効あると
て附藥などに迷ふへからす實は効なき也良醫に命して血をとるはよろし
かるへし元來經絡に過不及ありて夫を熱を生するものとみえたり幸三郎
此病あり故にしるす也むし齒といふものは其齒はかよふ氣血不順故に口
中の木石のこときもの故に蒸してくつる也腹より直さねは長くはきか
ぬ也

○三日 雨 きのふ 一乘院宮を御使にて今日相撲を被 仰付大乘院殿をも御招被成候間拜見として參 殿候様被 仰出之元來この宮かゝることとをいたくこのませ給ひて其場にいらせらるゝことのならぬ故に宸殿の御廣庭を相撲共々稽古場にかし被遣る日々御簾のうちより御透見あるといふこと也乍去暮之内などは不參いかにも御殘多思召と々評判なりしか遂にかくは被仰出たるとみえし也下人共わけをしらぬ故に御簾の方へ向ひて禪を替或は立小便などを宸殿の御庭にする故にみるもの恐入れ共一向に 宮は御構不被成と々事也この宸殿と申は五十疊はかりにて上段附金はり附にていにしへ關東より進せられしといふなれ共雨も御疊破れてなよひたる御けしき也乍去右近の橋左近の櫻などいふものに類して橋と梅とを被植しさま上野御本坊の大廣間といふ御席など、同じ親王の御坐所かゝるものとみえし也○晝頃を雨頻也雨にてもと御門主の思召立と々事故參る積なりしに雨ふれば江戸 將軍家の 御覽にても御延引に

成事也と々義を江戸相撲共強る申故に止に相成齒痛きのふ半分になりたれ共けふは參 殿すれば給物等もある故に内實迷惑なれ共儒者かはなしに宸殿上之間に 一乘院宮其次大乘院御門跡其次にわか坐をまうけられたるとの事にあはなしの傳へにも其坐に着坐したきものとおもひしに流に相成たり可惜

○四日 晴 御門主を今日相撲被仰付候間唯今參 殿候様申來るしかるに少々風邪其上齒痛に御盃等被下候節こまり且けふは御用日なるに公事合をも流し不申付候あは不相成御門主の仰なれ共御慰に 公義ことこの可廢も亦恐入候あ御斷を申上たり家來共市三郎名代として差出候あは如何といふ故に大に叱りて坐敷へ犬をあけてわれに外聞かゝするなといひしに御斷に遣したる使者のもの坊官の逢候あいろく不快々義尋扱御門主御内々御意也悴召連參り居ると承る其ものに相撲みせし家來共夫々附添共に拜見せよ其旨表向被仰出はあるへきなれ共先ッ合に申遣すと

之御事也無間も其旨坊官よりも申來るけふは大乗院御門跡等も御出なるに例の市三郎か不取廻しわか面目を失ふことを恐入故に何分にもいやなれ共元來御なくさみにて公へ抱りし過ならねは差支もなきを難有御門主の御意を奉背もこれ又深恐入たれは急に市三郎に支度させて遣したり右に付用人給人侍共をも遣す大心配也利口なるとり廻しのものならば常の御宴にも召連出へきなれ共例の御手際家來らは嫡子にも仕たきなど先達も申出る位故わかこゝろはしらぬ也市三郎は小十人位相應之男也乍去わか妾腹の次男に小十人ならば無勿躰こと也よき御番方の口あらは早く遣し度もの也

○五日 くもり きのふ市三郎は二之膳附に御門主御前にて御膳其外共可被下と之御催に付附添参り候俊藏取計に市三郎は竹之間といふわれなどのいつも参 殿して休息する所に御料理被下畢御門主御逢例之通いかにおもしろからぬことにて氣之毒左衛門か來らさりしは遺憾之

限り也以後は左衛門俱々必參殿せよなどの御意あり供之もの共まで一汁三菜の御馳走市三郎は蒸菓子干菓子迄被下追而奥にて御酒をも可被下と之義に付俊藏取計に其義は御斷申上候而歸りたり槍術の師寶藏院始終市三郎の取持に出てはなしせしと云也○けふ場所に荒馬と劔山の勝負を聞に劔山より仕かけて荒馬の得手なる右の手をさゝむとするところを身をかへて劔山荒馬のうしろへ廻り候而手もなく抱出し見物肝を潰し候由惣而得手といふものにてみな勝チ得手といふものにのみ負る也役人之昇進する道具みなしくじる道具也孫子に智者は可擒勇者は可殺などいひしみなこの理也可恐々々

○六日 くもり 御用日白洲の出る○市三郎 一乘院宮に参 殿之御挨拶之使者差出す御同所も御挨拶之御使者來る市三郎咄に 一乘院宮に御料理被下候節は脇に諸太夫坊官等挨拶として附居かた衣きたる青侍らか給士にてきのつまりたること無限御料理の油揚の玉ほとなる汗はふり

落てさて鹽あまく無味鹽鰯一尾を宅に而食は別段の風味也と也一同大に笑ふ也○相撲共之はなしを聞て今の武士は至極之下手相撲にも及はぬ也京都より十二里のみちを來り其一日にて來るは平坦の地且少々近ければこともなけれ共其日に直に勝負したるもある也夫は荒馬等か遅く來るもの共計かとおもひければかぢらにものりしとおもひ居しに四日の終日一乘院に而も稽古をなし同日場所の晴勝負をもなして其翌日未明にみなならを引拂て京都又いせに行たり今のさふらひにたとへは力わさのならひ得たることにても終日して其翌日十里のみち歩行なるへきや十里のみちを歩行來て其日に直に場所へ出らるへしやいかに彼らにても鬼神にもあらず今の士にても公家上臈にもあらず只平日に身を遣ふと遣はぬまてのこと也可歎こと也徂徠の説に夏は笠をかふり冬は足袋はき巨燧にあたるを是と心得し人々はまさかのときに仕かたなきわけを詳に説けりこゝろあるへき事也公儀之御成に若年寄はしめ惣御供いかなるあつ

き六月十二日の御參詣にてももとより笠なく正月廿日の御成にも足袋なし公儀にての御法通のことをおしひろめは侍も少々は勢附へきことかとおもふ也小太夫殿を御交通あり御手跡之様子に而は御不快御快方とみゆ西國も氣受よろしと目出度事也表門へ池も田も岩にも作のみゆるの中或は半天に名も高橋とひきそすれといふはりかみせしと也予方よりたにさく墨なとまゐらせし御返しにいろく被下たり酒を減し灸を專に可被成旨申上しに忝よし等御申越されたり母上にも御安心可被成候酒は已前の半分も不飲と被御申越たり

○七日 くもり又雨 六十七度余也○此ほと松たけしめし其外共多くいつる味殊によろし節句に付酒をのみ及ひ字をかくへしと樂しみおもへり去年來奈良最寄神社佛閣の銅物銅器等悉紛失すること夥し察する所異國船防之大煩を作る人々多ければ夫へ直をよく買取ものあるへしといろいろ穿鑿すれ共曾あしれす四五日已來奉行所近邊町家之銅樋被盜取殘念に

付其盗人を捕たらは直に褒美を可遣と番人共いふれしらせしに今日召捕たり三十五六ヶ寺に入銅佛をとりたり考之通大煩をつくる下かねになりし也大坂にて六躰之地藏の六尺もありし一夜に失しときく也元來銅佛を大筒にいたすは無益を以有益となす事に上もなきことなれ共これは奉行所之世話にもならぬ也かゝる賊人多くて可相成はならの大佛をも盗み行て大筒に鑄させたきこと也天下の幸なるへし

○八日 くもりはれ けふは中院屋に參拜之日なれば白洲なし○紀州之御家來之はなしに紀州はめつらしき大水にて新宮邊は三丈の出水にて水野土佐守の城も城下もみな水にひちしといふ也つゝみの夥きれて村を流し人を溺せしことかすしらすといふ也それは新宮領より紀州の方甚敷よし也○けふ御役所の通鑑をよみておもひしはわか藏本の通鑑はねころ與力の所藏を坂本熊次郎世話にて十八帙十六兩にて買ひし也夫を不筋事にあ莫大の金子を出し買ひしよしある人にははれて驚しことあり其ころは

其人々か必死地に置へくと成せし故に恐れてこゝろせし也然ルに其こともやみて穩なる時却あなら奉行被仰付たりこれ心のゆるみよりわか行跡の欠出來て其欠より破し也よのなかに可畏とおもふ事の多かるは身の守り也易に危ものは其位をたもつもの也と聖人の教玉ひしそありかたき世ははるの氷をふめるこゝろにてわたるそやすきもとる也ける

新右衛門など畏の一字御忘れあるへからす畏は即敬也

○九日 くもり 昨夜宅狀來る母上様倍御機嫌克と之御事其外御一同之御無事大悦いたし申候幸三郎不快之義詳に相分安心いたし申候○新右衛門不快疝積へ熱之からみたと之事平日大紫胡湯解るへからす其疝を遠察するに水おちより左右に開き三寸はかり凡てんすうの見合にてよくさくり見可被申候すしぱりたるものあるへし并へそのわき右之方并左とも塊あるへしもしあらはみな夫は筋也其筋よりかたへもこしへも引つる也湯あかりによく入念候る膝をみらるへし皮のそこに青き筋は無之候哉

且こしは右なりや左なりや以上之こと此次のたよりに御申越可被成候か
たの貝から骨などの近邊にいたみは無之候哉是又御申聞之事痲症之人を
よくみるに左に塊物かくれて右にすかたをあらはすかとおもふ也中風痲
積脚氣みな一類也われ近頃夫に考ありて人の病をみるに十にして五六は
不違按腹の術を覺て御兩親さまおさと等を以試みるにみなしるしありわ
かいふことを家來共不信さるものも多かりしか近頃大坂にて按摩のこと
を圖解の板本出來たり夫をみるにわかことを記せるかことく符合し其上
あるは俊藏の眼中をみて汝か右之かたにけふは痲症發せりといふにきか
す論より證據也右之手の三里の邊をもみみるへし必痛に不堪といひしに
果してしかり大に驚て即日按摩に所々もませ快氣したり夫を人われを
不疑けさも未明之槍其外を仕舞奥へ行みしにおさといさゝかげろくの
氣味にて打臥居たりけふ臥られては難義に付得と按摩をして遣したるに
よほとありて腹雷鳴してゲイ／＼と三ツはかりいひてやかて起出て終日

ことなし右之ことく夫々しるしある故にいふ也これに付も母上の按摩
のならぬ事をいひてしは／＼泣也眼にやに出并かたはることあらは必醫
師に見もらふへしかたのはるといふは重き懷中ものをいれて襟引はるか
ことく腹のすしに毒ありて太くなる故にかたひける也是尤可恐之症也下
劑を用ゆへし巴豆より大黃劑よし

○十日 くもり きのふは例之通父上へ酒奉るわれものみし也朔日の精
進落に少々のみしまゝ故に書を久しくせずよつてきのふは詩歌等を多く
書て樂しなりこれに付其酒の人と對しのむの大に身に害あることを知れ
り新右衛門心得にするすはしめ小猪口にて五ツのみて短冊十枚はかり書
たり夫を御養父母様と相對して小猪口に十はかりのみたり夫を其御席
を辭して坐敷にて大字を唐番三行はかりへ記して居たり乍去父上の寂寞
にて早く御酒のすみ可申躰に付書をやめて御相手をなして又小猪口に
四ツのみて書を認居たり書果て行みしに父上例の五禽の御戯あり右を拜

見しなから又小猪口に而四ツのみたり夫を俊藏か焼てくれしうなきにてめし三椀を喫し畢り父上は鼻雷の頻にてよく臥給ひしかはおさと、二人庭へ出て庭上十篇はかり往來し此足數六百余てふしたり今曉六時に起てこの六引ふは江戸の例の通三千のやり三千の刀をふりたりきのふの酒氣更になしされ共以上の猪口を數二十三を二十五として八ツにて壹合の積にして三八貳十四と申せは三合よ也され共さして酔しとはおもはす壹人に而二合のめは大字にてもちと勢を得過かとししかるにこゝろにもおもはす三合に及へりよつて衆とのむと獨酌とは酒の腸へ染かた大にちかふ故に大に毒と成とするへしわれ近頃三度々食事其外共に數を定め置いていろくためして養生をする故に前の通きのふの酒もためし見て群飲の害あることをしれり○けふ父上のきのふは御酒過てけさはおもてはゆくおもふと仰らるゝ故に我いふ父上の五禽の戯は至而々御美事也よつて御酒もちこすことなしわか願ふところは今よりは其數をまして多く身を御動しありた

しといひしに母上の大にわらひ給ふ故に大に御養生たることをいひさて又既に七十にならせられ給ふ上はわか御役に拘る類のことは御とめまゐらするなれ共其余は何事もたゞ御まかせ申上候間御まかせなるかよし七十になれば喪に居ても酒をのみ肉を喫したゞ其服をきる計と申せは聖人の教七十以上の人はきまかせにするを以第一とすることにて世にいふ勝手次第をゆるしたるものとみえたり徠翁の説などにては七十になれば心の欲するにまゝにすることを免したることなれ共聖人故に尙も孔夫子はのりをこえさせ給はさりし也と解したるにても七十以上の男子まして仕を辭したる人は只きまかせにするか聖人のみち也わか身の上に拘るほどのことはわか御とめ申上る故に其余は御氣まかせに御遊ひあるへしと申せしに御よろこひありし也母上近頃は酒を多くあかることを御とめ申しあればきのふなと以前の十分一位のこと也され共いかゞやと今朝按腹をなしてみ奉るに右のかたのこり常よりも大也酒の毒といふは嚴敷もの

也かくもきく薬はあらし故に百薬の長といふなるへし武備志に毒酒のこ
とをいひてさけにてのみし毒は五臓六腑へ染わたれば解毒すること不能
とあり可恐もの也江戸にて母上など新右衛門幸三郎心して御きまかせに
なし奉るへし

○十一日 くもり 暖氣にて時化といふ天氣也十三夜も覺束なし中秋十
三日より十七八日まで晴なし當月も如斯ならむにはことしは月の凶年也
友野先生より詩作來る十四日十五日共に八月は晴たるよし也○きのふは
こゝろはかりのものをして 行道院様のことおもひ奉りて用人はしめ別
當小遣にいたるまでものくはせたりけふは御兩親様へ夕かた江戸ならば
人を招くつもりにて御酒奉りけふはわか尤亭主役なれば字などはかゝす
これなくさみに流るゝことを恐るれば也 行道院様は内藤家の祖なるは
いふにも不及わか川路家の中興なるに其もとほみな 行道院様に出夫に
付千辛万苦いふへからすなかゝ筆に可盡にあらず井上家のこと新右衛

門中興也しかるに夫に付ていろゝ御辛苦夫かために一旦は獨身同前に
御別居までなされし也しかるに目出度ことは一度も不逢失給ひしかかな
しき也

○十二日 雨 きのふは 行道院様の御忌日の御逮夜に付御隠居様を奉
招る御酒を奉る其席へ出るものを多くつくりて表へ出し詰合を用人其外
にも酒給させし也日のもの今の法事といふものは先祖祀るに類する也
先祖を祭るときは都々給物など多くつくりて下々へも行わたる様にすへ
きこと也佛家に施餓鬼といふことあるにてもみるへし詩經に祭の時のこ
とのうちに神飲食をたしむといふことみえ書經に祭には御法度の酒をも
用ひよとあるにて知へき事也日くれに御兩所さまの御酒もすみたり父上
のけふの手向にと六半時ころよりことなければ例の字を四五枚書たりよ
つて手向まいらせ候 行道院様のわれ等の御恩何にたとへ可申哉難有可
奉報へき様なし母上へよく事へ奉り兄弟親敷することや第一なるへし其

上兄弟三人身を大事にしてよからぬことの心起りたとへは酒一ツ過すことをも大事の身と 行道院様のことおもひ奉りて大切にすへきことにはや

○十三日 くもり 更に月なしあかつきにいたりいかにかと出みるに月なし月入てのちはれたりことしは上方は月なきことなるへし

○十四日 はれ このほと松たけよしこのものは土瓶入て蒸也至あよろし江戸にてはほう烙へいれむすよつてみな土器へしみる也とりたての松たけ土瓶むしの味絶妙也こゝにてしめしなめたけなといふものあればはつたけをくふものなしみなくさるといふなり夥あれとも賣物にもなし

○十五日 晴 けふはおさと其外一同に出入る醫師か持山へまつたけとりへ行たりこれは以前の奉行もみな行し也われは行かすいしやの娘廿一歳なれともおさといふ十五か十六迄にみゆる玉子のことき顔也といふ下女共みな大に驚てはなす也松たけをもち歸るをみるに大こせむかこに

一ツあり

○十六日 くもり けふはきのふの松たけを留守せし人々に遣すとておさとらうちよりてとりわくる也三ツまたなるも二またなるもありこは痘瘡の薬也といふ也又實に眞の陽物のこときもあり不思議といふはかりなるもありて女共大に笑ふ也この節香の物の外はみなまつたけ也

○十七日 雨ふりて七十度のあたゝかさ也○此節ならに所々病人あれ共御役所内にはなし阿部遠州病死と承る一昨日下午野守殿御役 御免旨所司代々申來る

○十八日 雨 母上よりつとめて遊び樂しめとの御意にて右は御たのみ被遊るゝとまでに被 仰下しと存してより日々少々宛こゝろするにさして遊び居るけしきもなくおさと側より又三日坊主にけふはならせらるゝなど氣をつけるゝ也乍去小半時と無事にあは居られすやはり已前にかはりたることなきかことくなれ共其御沙汰已來三十日はかりのゞ高にい

たりみるに詩歌も讀書の數も驚はかりに減たりされはとて人を求めはなしをするにあらすひるねもせぬ也これにて新右衛門などおもふへし貧乏の時のこゝろにて調役の組頭たらは夥富有と成へきを少々宛のこゝろゆるみ大成費となることにていにしへの入用と大に相違する也これはたれもしかり鶴匠鷹匠役の末とてよからぬものに極られしは子孫の福をこのときにわかくしらす浮費爲に遣ひ失ふ故也可恐事也しかし法におゐて可貫ものは孔子か原思の百を辭たるをもらひ候へと仰られ孟子か百鎰の贈物を受しにて何も可辭にはあらずともよく儉約にして其上に溜りたる金は人に施してわか奢にせぬ様にせは少しは子孫苦をまぬかるへきか也御同前のいましめ尤これにあり自然の身上の大きく成の目にもえぬ事わかこの頃ものゝおもひの外に出來ぬと同じことゝしり給ふへし扱あまりのこと故に復古せむかと醫師にとひしに學問藝術に出精するは不宜御用之ひまには庭へ出少々酒をのみ遊へし其時詩歌無用也といろゝ家來を以

申出たり右に付わか定説ありて衆人の論に動へからさることを記すわれ幼年の時より眼氣齒共によからされ共今以いにしへに少も不變又武術等下手にはあり勝負の歩合は落たれ共息合等にしへに少も不變これは每度中村など驚ゆ申也今以しかり扱又三ヶ年已來彰常病死其外のこと身にとり一生涯中初る難事計集り來れ共右を以少しもめげわつらふといふことなしこれはこゝろの修行をする故にたとへは一盃の水を一車薪の火にそゝきし位の有余はあるとみえたりこれ日々書見をして心をたのしましむる様に稽古するによる故也何用事もせず遊ひて万々一長命のことあるとも夫は氷室の氷埋火の長くあることきわけにて天理に背きかくれ居て日月をぬすむにて天命に背き人の道を失へり一事を以申サハ顔回は孔子七十二弟子のうち第一の人にて聖人も回は其樂を改めすと御稱しありし眞樂の人なれ共三十前後にして死たり又千金の子万石の家にて無事の人々の短命なるかたしか成證據にて管仲も遊ひたのしむは酪毒也とま

ていひし故に酒などのみて身を動かさぬは死をまねくもとる也へしわれ
らはさして出精するといふにはあらねともとしとりてもいらぬ武けいな
とする故に人々夫に目を附いふなれ共却る益はある共少も損なし少も疑
ふへからすわれ等かこときもの万一のことあるとわか一類は夫に恐れて
みな無筆にて刀の抜こともしらぬものと成へければかくはいふ也兼るも
いふ通り養生に心を可盡は孟子か天命をしろものは巖墻のもとにたゝす
と迄にいひたれば心を盡しなはよく手をいれしはなの開落は同じことな
から衰の色少き位には必參るへき也され共五月のさくら十二月の菊なし
孔子已來第一のたのしみ人の顔回にても命はのかれぬ也決し而子供の教
等ゆるかせにすへからさる也しかしわれは母上の御意は不背此ほと諸藝
凡三分五厘方の減をつくる様にこゝろかくる也これは母上の仰重く且御
安意をため也乍去酒は日々のめは當る故に書をかくときはかりといたし
置候御安心可被下候○凡天の下にあることのうちなくて不叶ものは男女

のみち水火也この害又第一に多し五世界之内に飯を不喫國はあれ共もの
ゝみて酔はぬといふ國はなしよつてこの害にて人を殺す水火男女につゝ
く也この理を万事に推すにみなしかり一身のうち役に立耳目のこときも
の害多き也よを亂たすものはみな其筋に居て世を治むる役の人々也智仁
勇は天下の達徳也され共夫に付害有故に孫子に仁者はくるしましむへし
智者はとりこにすへし勇者は可殺とまでいひたる也人々害少益多きこと
を撰ひ用ひてよく毒を甚しからさる様に可心附也

○十九日 くもり このほとなら人のするにより松たけめしをたきたり
至るよろしきものもおさと四椀をたうへたりおさと四椀のめしはしめて
見たり其法とりたての松たけを酒と醬油にて煮てそれを入れてめしにたく
也其かほり其味別段なるもの也○池のかもをしのうち一つかひのかも一
兩日不來昨夕かためのかたのみ來れり雄はとられしにや雄を尋てよすか
ら鳴也ねられす水とりは夫婦睦しきものにて且正しといふはまこと也

○廿日 晴 七十三度也武藝をなしみるに如夏○一乘院宮之坊官二條宰相と云ものあり少々文字もあり樂をよくし風流人にて且御用立よき男也毎度 一乘院宮へ参り度とこと世話に成故にけふ入來したれば酒などのませたり以前の奉行などにもある例也席上にゐ順作詩を賦し儒員も詩を賦したりこの宰相位はなせる人はなき也四ツ頃まで學問のはなしなとしてたのしみたり

○廿一日 晴 昨夜はしめて晴たり月みさらむには秋は月をみさるにひとしとおもひて四頃より月みをしたり閑寂の庭なるにきぬたの音鹿のなぐ松風のひゞきいつれか秋のけしきならぬものとはなきよき月みなりき乍去いまた火を焚にも不及し也○きのふ儒者松茸のけしからぬ大成を十莖はかりくれたりいふは此ほと多くあるものにてめつらしからぬの極なれ共 圓照寺宮の御庭に生たるとて人の贈りければと云ければとりあへず

有ふれたものとはいはし尼てらに生たまつたけそれ珍物
と出まかせに云ければ儒者例の如不男故驚たり

○廿二日 くもり きのふより例の七日の精進也精進の時は酒は飲まぬ事也然ルに人に被頼三百字近きものを書くに細書なりかけ物故に氣つまりたれば密に小猪口にて五ツ如藥にして酒をのみたり夜に入而父上の被爲入候ゑ今夜一杯御寢酒の御相手せよとの御意也今日よりは酒をのみ不申候積とて御斷申せしにいや先刻字をかく所をみたり字をかく上はのみたるなるへし然らば是非に來れとの御意にて掩事ならすして大に笑ひたり行て四ツはかりいたゞきたり其ことをけふ家來共にかたるに一同みな大に笑ふ也

○廿三日 はれ あつし女共みな單衣也彰常かはや三回忌とはなりけりいとく早きもの也われは歸りてあはむを契りて品川にてわかれしを永きわかれとはおもはさりけり今に折々は死しはまことかとおもひ迷ふや

うなることある也あすは逮夜也とて人々にもくはせ牢内之囚人共へ施しするとして臺所にてみなくいそかしきさま也別當らか靈前へともくるゝをみれば馬このみけることなとおもひ出られていとかなし彰常死してはわかことを傳ふるものなし其上におさとは子なけれ共彰常あれば決而のちまでもこゝろやすしなといひしをけふしもおもひ出して夫婦うちよりなく也かゝることにてなきて心動してはならず禮記にも親は子をまつらすとも申すといひなからなみたは頻におつる也

村しくれ袖ももみちのいろやみむ手向らるゝ身に手向なしつゝこれにつきても市三郎か文藻等のなきをなけく也榮吉といふわかさふらひか詩文をかきてわかこのほとこのゝろなくさめいふも又かなしき也なか／＼にめぐりくる日のうらまるゝわすれしを又おもひ出てはけふおさと蜂にさゝれたりためしに江戸よりもち來りたるやけとの札にてなてしに火ほとりのこときいたみ忽にやみて一同大に驚たり麻布のや

葦に驚は
小兒の妙
薬如神の
なるを根
に握せ入

けとの札小兒あるところにては一枚ありてもよし岡本花亭かすゝめにてもらひしに屢奇効あり可疑可怪もの也

○廿四日 晴 昨夜宅狀來る朝より用向けしからすよく濟たる夕かた宅狀來ること十にして六七は必しかり不思議なる事也○先以母上様少々御不快なから格別之御事には無之其外一同之無事目出度候其内龍之助不快のこと承候ことに驚入たる事難盡筆昏され共らにの奇効ありしにて蘇生同前のよし天幸々々何事かこれにしくへきや新右衛門御奉公のために見捨て出勤せずは必六ヶ敷ことなるへしこれみな人力の不及所これにて毎度いふ天を待の意をしるへし新右衛門實物の目出度事に逢たればこの味よく御心附あるへしさて右に付かるはつみしてよしといふにはあらず夫は前にもいふ孟子の説にて御承知あるへし○葦を根とゝもに一つかみ煎し用ひて小兒驚風の死をまぬかれたるよし書付にして與力共へわたしたり○母上の御狀難有市三郎に具に申聞候右に付尙又思召之趣に私了簡を

し用後村
に領人々
上小の驚
は領の思
風にもよ
死居るを
ひ之を以
右之を免
小兒死を
かれしを
人々兼事
るへき事
也

加候申聞候は元來人は人情をしること第一也人情をよくしれは鳥けたものとはいはれぬ也人情をしるといふは物に感ずること也親の恩主の恩に感し人のこゝろを察して鳥獸草木までをもあはれむにいたるは一つの人情によく感動するにありこの人情なきものは親をも爲泣家をも潰す也と段々申聞候義に而人情さへあれば決あわゆるくはならず夫によく行わたるといふは聖人賢人はしらねとも其以下凡愚の我等かこときものは幼年か死するまで日々心に存すへき事也○新右衛門より書狀日記并わか日記壹冊共に落手いたし申候弓を御出精のよし其外女色酒等之御工夫具に御申越事々感心いたし申候これ聖學の門なるへし胡安定か子に申せしも

以飲食男心爲切要從古聖賢自這裡做工夫

と申せしにて別而新右衛門の心の用ひかたに感ずる也○弓のことあたるは躰の正しきにありて的にあらず先生の説尤也明人の射法に前手は泰山を推かことくと申たれば十分に突はりて少も動かぬ事なるへく後手は虎

の尾をにぎるかことく申せは至而むづくりと大事にもつことなるへし先生の説と符合せりわれ常に三年まきわらをつめて一日の怠りなくは一ツの益あるへし的はなくてならぬものゝ大に害なるへしといふいかによしらぬこと故に試に記す○鐘三郎弓上達目出度候 行道院様御一生の御このみ弓と御書を被成たる御事なりしかみな新右衛門かたへ傳はりし也よりにて鐘三郎の弓いとくめて度おもふ也○事にかゝりて只理のみにくるしむを佛家にてさへいみて理障と云也諸藝共に必有事助けて長するなかれの意にとまるとみえたりいにしへの君子徳を以弓に比す御奉公向も弓にて十分のこゝろもち也的のあたるあたらぬにこゝろをくるしめす先ツ己を正しくす己を正しくするにかゝり居て的をうらみす實に大徳也馬術の御修行目出度候岡崎にて教をうくる第一の事也唐物を取上しを難せしものあるとはけしからず候御政事はその様のことに瑣細かゝる故に大法を失ふ也難せしかた理をしらぬ也○養女願承附其外共相濟安心いたす

○馬具を御買入御無用以前大に損をしたり作くらの類せめ馬を三度もすれば居木折れ可申候今の加賀象眼のあふみのこときもの更に實用なし○弓に付矢數等御申越感心也的數多過かなれ共新右衛門等の武は我らと同じくはらこなし也こゝろの養ひになるかたかよき也しかし以前より中りはよしとおもふ也○龍之介不快之節新右衛門之勘都亦尤也○下野守殿病氣に付御役御免之由當地にも所司代を申來兩御門主にも申上に成青山大膳亮は新右衛門一旦支配受候御人も別々時々の容躰尋等あるへしかよう成時士氣を見さけらるゝこと多し大炊頭殿御病死之由風聞ありまことにや阿部遠州病死之由右に付はなしあり以前本家阿へ遠州を相續の世話をして越前守殿被成候御合にて乍去遠州に十万石の祿を可保相貌なし天のゆるさぬ所とみえし也折角本家相續させて死してはつまらぬ事也世話は出來ぬといふ雜談のありしことありこの節扱もおもふ也彼人令終せぬ人にて勿論末々は我らの類はみな捨られし位のことなりりしか才ある人故

にかゝる鑿もありしなるへし可惜越州の剛復專にて終に今の御様子となられしこと實に可歎事也役人を多みるによく物を決斷して十分のことの出来る人に終を令する人いとくまれ也可恐事也伊尹霍光と千載の下にいはるゝ人の霍光のこを沉深寡黙とか稱せられしと覺たり決る手早くことの決斷なとする人にはあらぬ也このこと小學にあり本書にのみ給ふへし役人のこゝろあるへきこと也けふは用人給人より靈前へとて菓子を出し良右衛門をめらかこときは又別に或ははな又は菓ものなど夫々出す精一郎かこときも又しかりわれはその挨拶するかつらき故にみなおさとに取計せたり家來共に菓子或は飯などふるまふ○けふは廿一日より廿七日まで魚類と酒を斷ことなれ共われこの月は酒のみありふれしは肉をも食して少にてもこゝろをたのしむ様にする也大切の母上等のましますに少にてもこゝろをいためてはならぬによりて也十二日の御法事はことごとくにわか引受てすること也けふはみなおさとにまかせてわれは少々酒

のみ書をかき或は庭など歩行様にして少もこゝろをとめぬなりこれにて却ち相當するか也昔阮藉は親の喪に居て酒をのみ肉を食ひ少も喪のけしきなかりしか杖つかされは歩行も出来ぬまでにやせ衰しといふことあり阮藉といふ人は行跡のよからぬ人なれば其ことの實なりや否はしらねとも十二日の御法事はつとめてなすこと半分あるかことし廿五日はつとめていろいろとわするゝ様にすれ共すこしく阮藉の味なきとも難申恐入たる事也

○廿五日 風雨 御用日公事九口ありけふは彰常のために眞物のせかきいたすちやめしに豆腐にかまほこのしるを作りかつほふしをいれあうましくして牢内之もの共小屋下迄都合五十人々爲給たりことの外ありかたかること也

○廿六日 雨 ならにはしめしたけ多し味殊によし差わたし三寸位のものいくらもありなめたけといふものあり椎たけに似たりこれは別段によ

し

蕈菌數品佳下物ヨキサケ 黄シメ 索ハケツ 甘美松香若令張翰生寧樂必向秋風

返此郷

○廿七日 雨 日々雨にてさひしきこと也當月はわけてものかなしき秋のこゝろする也江戸へ歸りて彰常のことをおもひてさそやと今より苦勞のきみありこれは人しらぬこと也

○廿八日 雨 俊藏家内段々こゝろよし俊藏はなしにそめのいとすきなる松たけもおそれて給申さりしか此ほとは少々つゝ給候と申しき用人ならすは申たきこともありしか只わらひて聞居たり○龍介うたよみて大に高慢家也醫者も龍介といひて紛敷故にいつしか中納言ノといひてこれは中納言に申付よなといふ也けふいふは已前輕き御奉公せし時はみな日傭のみにて所謂諸大夫の供なりしかわれ今諸大夫と成ては中納言の家來ありいつも家來のかた高官也とて笑ひし也

○廿九日 くもり又雨ふる 俊藏方に而江戸狀の翌日よりらのそうす
いをつくりてそめ并忍い共に給るに大に効あるかとし忍いは四日目に
必紫圓を用ひねは不通しなるにらの雜炊以來は日々二度宛快通する也
これ必うちのゆるみしなるへしと也よつてきのふより俊藏かたにてはに
ら畑をつくりたりと也われも喫てためさむとおもふ也鏡粉巴豆といふ
ものにては必即効あれとも毒もまた多かるへしにらは毒なかるへき也源
氏物語に儒者の娘のかたへ通たるに極熱のそうやくを給たれはくちくさ
きをいとひけむ逢さりしことのありしに其注ににら也とありしと覺しに
らをくへは男を斷様にては女房には勘辨ものなるへし

○晦日 雨 松たけめしをたくおさと五はいを喫せり是もそめにおとら
ぬ松たけは好物とみえたり畑のきくを庭へうつしたりこのほとやうく
さかりにならむとす時候の遅をみるへし○松たけをこのみて日に三度宛
食すけふも買へといへはおさといふちとへそくり金にても出して御買ひ

候へといふあか貝などに一文に而も出したらはおさと此節の鹿よりも角
をふりたてゝさわくへきに松たけ故にかくいふかと戯をいへはみなく
笑ふ也

○十月朔日 くもり又晴 月並の禮うくること例の如し○昨夜夢に彰常
をみる頻に彼か病を案しているくいひ或は書物の論などをせし也さめ
てのこりしは暮秋のさひしきまくらに置あまる露のみなりき昔王陽明か
説に大學の格物は良知をもつて事々物々を格して善に歸すること也とい
ひき今此一事を以おもふに親の子の病ひをおもふこと甚敷もの也我らか
ことき壯強にして子にわかれてもかくの如し老たる親あるものは身を健
にする程の孝行はあらしと其ことを事々物々に及ほし人の子を愛するこ
とも又わかことくなりとおもひて人の子を愛せはみちにいるの一端なら
むか子死して哀さるは愚也屢おもふはまよひ也とおもひ定たりはしめ彰

常死せしと聞し時はこれはわか身にあたりて親不孝也と心附たればこゝろに主ありて却るよかりしかはや三年を経てそのこゝろは失て却る愛着のかたのみ残る居故にこの頃の法事に心を動され夢などをみるとみえたり動ては修行の詮なし可戒○御城代御用召之由所々申越御老中たるへし恐悦之御事也この御人賢者の聞へあれは別る恐悦也勢州などのよき御相談相手なるへし

○二日 雨又くもり 御城代より御用 召にて當月四日 御發駕之由申來る○所司代よりめつらしく泥り居たる御下知もの悉ありて落着十六口あり

○三日 晴 庭のかきつはた梅なことくはなさきぬかきつはたは殊によし暮春のことし返りはなといへは遠國にてはみるもうれしきこゝちする也○此ほと暖氣の故なるへし晴るゝは晴るれ共夕かたよりくもる也このくせ七月以來多しよつて七八九と月見なしにことしは過しゝ也

○四日 くもり又雨 良右衛門の子二才にしてはめつらしき才子の本すきにて少々覺ゆる也けふも居間に小印の附たるたもとおとしを置表之居間へ行居しに奥に來り見附て御用くといひながら夫をもち來りてわかつくへの上置行たりいかにしてわか常に用ゆることを知けむとみなみな大に驚し也与風おさと戯に名所圖繪のゑときをなしてきかせしに大に悦ひ日々來りて三四冊承り行也おさと慰ながら大に又こまる也昨夜墨師助藏抱屋敷へ松たけとりに行たりとてとりたて也とてよる五過にくれたりみな大物に大成は七八寸以上也陽物之論清香室にみちたり何分あしたとはいはれす直にきりて焼又煮て食せしに美いふへからす白きこと如雪にて全に玉を以つくるかことくなしまつたけも二日三日の物とりたては味大に殊也母上新右衛門などにまいらせ度と申ながら給しこと也

○五日 くもり又雨 大に暖氣也唐帝の反古多く出來たり漉返しに遣すけふ儒者のもとより認物たのみ越たれば直に記し遣したり東大寺西大寺

法隆寺などの古てらへは何なりと申にまかせ可認遣旨申遣たり

○六日 くもり雨さむし 白洲の出る三輪山の神主と別當の出入也三輪の神の神代々の御陵にて山即神跡にてかゝることもあれば山とかきて日のもとにはかみとよむといふわけより段々とき示したるにやれやれ難有御事哉とて訴訟人大聲にて受をしたり即刻濟口に成いにしへ狼をもかみとよめり奉行の利解は狼なるへし

○七日 はれさむし 昨日七ツ頃より都筑金三郎來る夜四半頃までいろ／＼のはなし也山上藤一郎代檢見中なれ共所司代の御達之趣有之上京候様と之事に付俄に參ると之事也定而御用 召とみえたりうらやましき事也江戸へ出ればはしばらく逢れぬ故にことに金三郎もくつろきて咄たり何分にも腕をもかれたるか如し諸事相談相手なくなり當惑する也昔蘇武と李陵が夷地にてのわかれに双鳥共北飛一鳥獨南翔とて歎きしに似たりわれは三年都筑は六年なれば半分灘を越たるこゝろ也

○八日 晴 五十二度のさむさ也かすか山よほともみちせり夕日かせにもみち見に庭へ出て佐保川のほとりにあるさほ山のはゝそのもみちをみてとりあへず

たらちねのわれ待袖かしくれしてさほのはゝそはいろつきにけり

と申候ひし春日山の紅葉は實に絶妙也

千株楓樹萬年松雨後笠山秋色濃。借問紅顏與青黛即今誰チアルシトシテカ適巧スルカタツクリテ爲容

○九日 くもり 昨夜宅狀到着也彰常か三回忌のこと詳に申來る漸四日五日このかた忘れたることを又いふもいとつらし夫はしるさす○母上様御機嫌克其外一同之御無事目出度候新右衛門書狀之内に 上聽公事其外の事に付關宿のうしの新右衛門の勞をねぎらひ給ひけるさま彼公の心の程別段なること扱新右衛門之出精のこといとめてたし新右衛門か人に用ひらるゝことをおもへは 父上のことおもひ出ていかに悦はせ給ふべきと嬉しくて頻に落涙せし也右に付るも母上の御事決る左衛門尉早く歸れ

といふことは思召ましく候只々 公儀の御恩と 行道院様の彌吉をく
と仰られなから 御目見以上になるをも御覽せられす失給ひしこともあ
ると思ひ給ひて左衛門尉歸れと思召たひに 行道院様の爲に御經を御よ
み可被遊とおもひ奉り候母上の御運いか成事にや 行道院様の御不運い
か成事にやと御引くらへ被遊候御信心第一たるへし○おまきの宿下り
右に付るも新右衛門か万事の世話おますよめまての世話千萬の事と忝さ
いかにやいふへき幸三郎も参りたるとの事これよりもいろくくられ
たるとの事長者の万燈の類にて又これもきのとく也○父上御存生のとき
われ人に書物をよみ遣しめめたかのとき魚もらひしことあり夫をも彌
吉か腕先を出たるもの也とて殊々外御喜びてみつかから烹給ひしことなど
おもひ出ること屢也其後留役助の時内寄合はしめなとに焼物魚あれば必
御辨當に持たせられし也必相番の人にはほりかになし給ひしなるへしし
かるに御存命中反物は申に不及可成なるませ肴もらひしこともなし九月

に失給ひあけのとしの正月十二日に調役の助に成奉行よりいろくの菓
子等をもらひしこと嬉しきかうちの哀しきかきりなりいまこのことをお
もひなみたのおつる故にしるす也この御恩報しは兄弟三人丈夫に而養生
をなし母上につかふるより外に仕かたなしこれをよみておさとに聞かせ
たるにこれはしらぬ御方なれとわかこのくりこといふ度に涙落るといひ
てかなしみし也今大越幾之進か貞五郎をいろくおもふさま甚父上のわ
か事を思召と甚よく似て幾之進かとし老たること貞五郎か様子等身につ
まされて父上をおもひ出て幾之進をかなしきものにおもふことあり不思
義なるもの也

○十日 はれ よほと暖氣也泉水の魚いまた夏の如に遊き歩行也跡部能
登の家來武善之介か死せしか強死かとの風聞にて氣の小なるなといろい
ろの説ありいかに氣は小さくとも大塩平八郎か一件のときかれは二十余
なるへきに人をも壹人うちとめて功を立たるものにゐにしへならは世

に名をしらるゝ男也しかるを評するもいとおかし世のことみなかくの如し人間は心の小なるは帝堯の一徳ある也小心ならては大事は出来ぬ也世に名聞を好むと小人に評せらるゝことは范文正公にてもまぬかれぬ也ぬらゝとして身をゝしむ小人の君子へ疵をつけるにはあれは仕過る名をこのむ穩ならぬといふ也夫等々のこと宋朝の仁宗神宗などの御時に専ありしこと也善之介は少もしらぬ人なれとも主人の爲に大坂にていのちを差出せし人故に世にまれなる人にてわれらは常に身に引くらへておもへはいとくはつかしき人なれば死せしと聞てかけなからをしむ也
○十一日 くもり 村しくれふるけふは父上は春日山の紅葉臺へもみちかりにいらせられたり御供は民藏順右衛門平吾其外中間共也御かこの事は近きわたりなれば何卒御笠にていらせられたきとの御事故に思召にまかせたりいらせられてしはし過てしくれふり出たれば御迎として家來共走らせたりしくれば又たちまちに晴たり其内に興福寺のほと近くにて某

の寺の茶室を御かりそにて御雨やとりして燈火つくへき程に御歸りなり行道院様の常の御ことに彌吉か御目見以上被仰付たらは直に隱居して今の父上とゝもに遊ひ行かむなと仰られしこと也き七十一二歳までおはしまさむにはわか吟味役たらむをも御覽あるへきにと又しもけふの御ことにおもひ出て人しれす袖にも時雨のふりけり○凡いもかり鹿かり小鷹かりさくらかりもみちかりなといふことありいもかりはことなれともよはみな松茸かりの類までもうつらかりなとゝ同じこと也しかるにならには辨當かりといふことあり夫はしらさりしに吟味之時辨當かりの歸るさといふことを一件之ものゝいふを聞てわからす追而與力に尋しにこよひのむ酒一とくり也と晝飯の一盃なりとそれを野へ山へにもち行て給て鬱散することを辨當かりと云也と夫によりておもへは五月のはしめまてはよきはくみ重にさけかるきはめしひつに椀かこをもちてわかくさ山の邊等にみな行て歌よむにもあらず詩つくるにもあらずをとなしく着坐

して只野へ山へをみて歸るさまを屢みし也夫を辨當かりといふと也いにしへの都且は上かたの人こゝろかゝる幽閑なること多ある也これらにいたりては關東の背にほりものしてかけこゑのきやりといふもの歌ふ徒とは多にことなる也

○十二日 晴 昨夜五半時に柿獻上濟の御奉書來る右に添たる宅狀も來る先以母上様御機嫌克一同之無事恐悅此事に御座候扱又此ほとは一同ならも病人なくおさとめつらしくつくへにかゝりて朝より夕かたまで暇あることに筆とり居候このころの松たけとりのさまを例のおさとかこのめる紀行にしるして母上に御笑にいろゝとのことこのよし也かゝること近來三年のうち更になし大にとゝのひし所あるとみえ候御案し遊さるましく候○新右衛門日記之内不快之義考之趣申遣し候處大同小異なるいしやの考にゆくすりも申越候而承知安心也この三黃湯といふもの殊によき法也常に御用ひあるへし追ふはわか法ならては不參候今は夫にてよろしく候

右の三黃湯へ甘草芍藥を加へ候而貞助の悴の痲症に而品に寄驚風のけしきあるに與へみしに大に効ありもの驚と寐てうなさるゝことも直りたりおさと市三郎母上みな御平日御用ひ也いしや氣のこりとはいかなる考かはしらねとも水毒のたまるといふはみな筋のつまる故也決而疑ふへからす筋つまる故に人間の躰をめぐらうちに水火氣のうち水はかたちあればたまる也其譯はくちを結ひてものをくゝみ見るへし半時のうちにみゝたらひに半分位は水を吐へし無病の人にても同じこと也筋つまればみなかくの如く也よつて黃蓮等の類にて筋をゆるめる也夫故に大黃の力もあらはるゝ也夫はためして無病のとき試置醫の大かたのことをいふをしるへし天樞といふ所の近邊の筋は肩へも手へも齒へも足へも引つる也其内左にかたまりて右へわさを出すかとし右之筋のわけに而疝積脚氣中氣なとの類あるひは留飲ともなる也これは平日無病のときためしみるへし新右衛門少々に而も氣分あしき時肩を抜かいから骨の近邊をよく入念て撫